



Informatica®
10.4.0

バージョン 10.0 からのア ップグレード(10.4.0)

Informatica バージョン 10.0 からのアップグレード(10.4.0)

10.4.0

2019 年 12 月

© 著作権 Informatica LLC 2006, 2020

本ソフトウェアおよびマニュアルは、使用および開示の制限を定めた個別の使用許諾契約のもとでのみ提供されています。本マニュアルのいかなる部分も、いかなる手段（電子的複製、写真複製、録音など）によっても、Informatica LLC の事前の承諾なしに複製または転載することは禁じられています。

Informatica、Informatica ロゴ、PowerCenter、および PowerExchange は、米国およびその他の国における Informatica LLC の商標または登録商標です。Informatica の商標の最新リストは、Web (<https://www.informatica.com/trademarks.html>) にあります。その他の企業名および製品名は、それぞれの企業の商標または登録商標です。

米政府の権利プログラム、ソフトウェア、データベース、および関連文書や技術データは、米国政府の顧客に配信され、「商用コンピュータソフトウェア」または「商業技術データ」は、該当する連邦政府の取得規制と代理店固有の補足規定に基づきます。このように、使用、複製、開示、変更、および適応は、適用される政府の契約に規定されている制限およびライセンス条項に従うものとし、政府契約の条項によって適当な範囲において、FAR 52.227-19、商用コンピュータソフトウェアライセンスの追加権利を規定します。

本ソフトウェアまたはドキュメンテーション（あるいはその両方）の一部は、第三者が保有する著作権の対象となります。必要な第三者の通知は、製品に含まれています。

本マニュアルの情報は、予告なしに変更されることがあります。このドキュメントで問題が見つかった場合は、infa_documentation@informatica.com までご報告ください。

Informatica 製品は、それらが提供される契約の条件に従って保証されます。Informatica は、商品性、特定目的への適合性、非侵害性の保証等を含めて、明示的または黙示的ないかなる種類の保証をせず、本マニュアルの情報を「現状のまま」提供するものとします。

発行日: 2020-02-24

目次

序文	8
Informatica のリソース	8
Informatica Network	8
Informatica ナレッジベース	8
Informatica マニュアル	9
Informatica 製品可用性マトリックス	9
Informatica Velocity	9
Informatica Marketplace	9
Informatica グローバルカスタマサポート	9
第 1 章 : アップグレードの概要	10
Informatica のアップグレード	10
Informatica のアップグレードサポート	10
アップグレードプロセス	11
Business Glossary のアップグレード	12
第 2 章 : Linux でドメインをアップグレードする前に	14
リリースノートの確認	14
システム要件の確認	14
Verify the Domain Upgrade Requirements	14
一時ディスクスペースと権限の確認	15
ディストリビューションの確認	15
パッチ要件の確認 Linux の場合	16
Java Runtime Environment のインストール	17
環境変数の確認	18
インストーラファイルの抽出	19
Informatica Upgrade Advisor を実行します	19
第 3 章 : UNIX でドメインをアップグレードする前に	21
リリースノートの確認	21
システム要件の確認	21
Review Patch Requirements on UNIX	22
Java Runtime Environment のインストール	22
Java Runtime Environment のインストール (AIX の場合)	22
ディストリビューションの確認	23
ドメインアップグレード要件の確認	23
一時的なディスク容量の要件	23
環境変数の確認	23
インストーラファイルの抽出	24
Informatica Upgrade Advisor を実行します	25

第 4 章 : Windows でドメインをアップグレードする前に.....	27
リリースノートの確認.....	27
システム要件の確認.....	27
ディストリビューションの確認.....	28
ドメインアップグレード要件の確認.....	28
一時ディスクスペースと権限の確認.....	28
環境変数の確認.....	29
インストーラファイルの抽出.....	29
Informatica Upgrade Advisor を実行します.....	30
 第 5 章 : アップグレードの準備.....	 31
データトランスフォーメーションファイルのバックアップ.....	31
PowerCenter リポジトリの準備.....	32
モデルリポジトリの準備.....	32
データ統合サービスの準備.....	32
Profiling ウェアハウスの準備.....	32
参照データのディレクトリの準備.....	33
Metadata Manager の準備.....	33
Metadata Manager ウェアハウスのバックアップ.....	33
Metadata Manager プロパティファイルのバックアップ.....	34
Business Glossary の準備.....	34
データベースのバックアップ.....	34
Informatica Cassandra ODBC ドライバ用の odbci.ini ファイルのバックアップ.....	34
ドメインの準備.....	34
Verify Database User Account Requirements.....	34
ドメインのシャットダウン.....	35
ドメインのバックアップ.....	35
 第 6 章 : ドメインのアップグレード.....	 37
ドメインのアップグレードの概要.....	37
Upgrading in Graphical Mode.....	37
コンソールモードでのアップグレード.....	46
サイレントモードでのアップグレード.....	48
プロパティファイル内のパスワードの暗号化.....	48
プロパティファイルの作成.....	49
サイレントインストーラの実行.....	50
ドメインアップグレードのトラブルシューティング.....	51
 第 7 章 : ノード設定の変更を伴うドメインのアップグレード.....	 52
ノード設定の変更を伴うドメインのアップグレードの概要.....	52
別のデータベースへの移行.....	53
別のマシンへのインストールの移行.....	53

インストールディレクトリのコピー.....	54
Windows 上のポートの使用可否の判定.....	54
Step 3. Create a System User Account.....	55
手順 4. サービスマシンへのネイティブ接続の設定.....	55
手順 5. データベースクライアントソフトウェアのインストール.....	56
手順 6. UNIX 上でのデータベースクライアントの環境変数の設定.....	56
グラフィカルモードでのアップグレード.....	57
コンソールモードでのアップグレード.....	68
サイレントモードでのアップグレード.....	73
ノード設定の変更の完了.....	74
ブラウザのキャッシュをクリアする.....	74
ロケール環境変数の設定.....	74
ライブラリパス環境変数の設定.....	75
動的ポート番号の範囲の確認.....	75
ノードバックアップディレクトリの確認.....	75
PowerExchange アダプタの設定.....	76

第 8 章 : アプリケーションサービスをアップグレードする前に..... 77

POSIX Asynchronous I/O の設定.....	77
Informatica の環境変数の設定.....	77
ロケール環境変数の設定.....	78
Administrator ツールのキーストアファイルの場所の確認.....	79
ブラウザのキャッシュをクリアする.....	79

第 9 章 : アプリケーションサービスのアップグレード..... 80

アプリケーションサービスのアップグレードの概要.....	80
サービスをアップグレードする特権.....	80
以前のバージョンからのサービスアップグレード.....	81
サービスアップグレードウィザードの実行.....	82
モデルリポジトリサービスのアップグレードの確認.....	82
オブジェクト依存関係のグラフ.....	83
Model Repository サービスの詳細プロパティ.....	83

第 10 章 : Informatica クライアントのアップグレード..... 84

Informatica クライアントのアップグレードの概要.....	84
Informatica クライアントのアップグレードオプション.....	85
プロファイル.....	86
データメインのインポート.....	86
プロファイルおよびスコアカードの保存.....	86
既存のスコアカードの実行.....	86
グラフィカルモードでのアップグレード.....	86
サイレントモードでのアップグレード.....	87
プロパティファイルの作成.....	88

サイレントインストーラの実行.	88
第 11 章: アップグレードした後に.	89
サポートの終了レポートの場合.	89
Informatica ドメイン.	89
ログイベントディレクトリの更新.	90
PostgreSQL への移行.	90
ドメインへのクライアントの接続の保護.	91
Microsoft SQL Server の接続プロバイダタイプのアップグレード.	92
PowerCenter 統合サービス.	92
オペレーティングシステムのプロファイル用の Umask の設定.	93
Data Integration Service.	93
HTTP プロキシサーバーパスワードのリセット.	93
ログイベントディレクトリの更新.	93
メタデータアクセスサービス.	94
メタデータアクセスサービスの作成.	94
スケジューラサービス.	95
アナリストサービス.	95
モデルリポジトリのユーザー名とパスワードの入力.	95
フラットファイルキャッシュの場所の確認.	96
一時エクスポートファイルの場所の確認.	96
アナリストサービスのリサイクル.	96
Metadata Manager エージェント.	97
Metadata Manager サービス.	97
Metadata Manager プロパティファイルの更新.	97
UNIX での ODBCINST 環境変数の確認.	97
Informatica Platform リソースのアップグレード.	98
ビジネスインテリジェンスリソース用のマルチスレッドの更新.	98
Metadata Manager コマンドラインプログラム用のトラストストアファイルの確認.	99
DataDirect Drivers の更新.	99
Informatica Cassandra ODBC データソースのアップグレード.	100
Data Transformation ファイルのコピー.	101
Hive エンジンのサポート終了のためのプロファイルの更新.	101
リリースガイドの確認.	101
付録 A: アップグレードチェックリスト.	102
アップグレードチェックリストの概要.	102
ドメインをアップグレードする前に.	102
ドメインのアップグレード.	103
アプリケーションサービスをアップグレードする前に.	104
アプリケーションサービスのアップグレード.	104
Informatica クライアントのアップグレード.	105
After You Upgrade.	105

索引.....	107
---------	-----

序文

製品をアップグレードするには、このアップグレードガイドの手順に従ってください。

アップグレード手順に加えて、このガイドには事前および事後に必要なタスクも含まれています。

このガイドは、製品のアップグレードに携わるシステム管理者を対象としています。

Informatica ドメインのサービスとクライアントをアップグレードするには、アップグレードガイドを参照してください。データベース要件を確認して、データベースをドメイン用に設定します。サポートされている製品のディストリビューションは、ネイティブ環境でも非ネイティブ環境でも確認できます。使用する環境が、インストールプロセス、一時ディスク領域、ポートの可用性、データベース、アプリケーションサービスハードウェアの最小システム要件を満たしていることを確認します。

複数台のマシンに製品サービスとクライアントをアップグレードできます。すべてのノードでサーバインストーラを実行してアップグレードします。ドメインをアップグレードした後、Administrator ツールにログインして、アプリケーションサービスをアップグレードする必要があります。その後、すべてのマシンの Informatica クライアントをアップグレードできます。

Informatica のリソース

Informatica は、Informatica Network やその他のオンラインポータルを通じてさまざまな製品リソースを提供しています。リソースを使用して Informatica 製品とソリューションを最大限に活用し、その他の Informatica ユーザーや各分野の専門家から知見を得ることができます。

Informatica Network

Informatica Network は、Informatica ナレッジベースや Informatica グローバルカスタマサポートなど、多くのリソースへの入口です。Informatica Network を利用するには、<https://network.informatica.com> にアクセスしてください。

Informatica Network メンバーは、次のオプションを利用できます。

- ナレッジベースで製品リソースを検索できます。
- 製品の提供情報を表示できます。
- サポートケースを作成して確認できます。
- 最寄りの Informatica ユーザーグループネットワークを検索して、他のユーザーと共同作業を行えます。

Informatica ナレッジベース

Informatica ナレッジベースを使用して、ハウツー記事、ベストプラクティス、よくある質問に対する回答など、製品リソースを見つけることができます。

ナレッジベースを検索するには、<https://search.informatica.com> にアクセスしてください。ナレッジベースに関する質問、コメント、ご意見の連絡先は、Informatica ナレッジベースチーム (KB_Feedback@informatica.com) です。

Informatica マニュアル

Informatica マニュアルポータルでは、最新および最近の製品リリースに関するドキュメントの膨大なライブラリを参照できます。マニュアルポータルを利用するには、<https://docs.informatica.com> にアクセスしてください。

製品マニュアルに関する質問、コメント、ご意見については、Informatica マニュアルチーム (infa_documentation@informatica.com) までご連絡ください。

Informatica 製品可用性マトリックス

製品可用性マトリックス (PAM) には、製品リリースでサポートされるオペレーティングシステム、データベースなどのデータソースおよびターゲットが示されています。Informatica PAM は、<https://network.informatica.com/community/informatica-network/product-availability-matrices> で参照できます。

Informatica Velocity

Informatica Velocity は、Informatica プロフェッショナルサービスが開発したヒントとベストプラクティスのコレクションで、多数のデータ管理プロジェクトから得た実体験に基づいています。Informatica Velocity には、世界中の組織と連携してデータ管理ソリューションを計画、開発、デプロイ、管理する Informatica コンサルタントによる集合知を表しています。

Informatica Velocity リソースには、<http://velocity.informatica.com> からアクセスしてください。Informatica Velocity についての質問、コメント、またはアイデアがある場合は、ips@informatica.com から Informatica プロフェッショナルサービスにお問い合わせください。

Informatica Marketplace

Informatica Marketplace は、お使いの Informatica 製品を拡張したり強化したりするソリューションを検索できるフォーラムです。Marketplace で、Informatica デベロッパーやパートナーからの多数のソリューションを活用すれば、生産性を向上したり、プロジェクトでの実装時間を短縮したりできます。Informatica Marketplace は、<https://marketplace.informatica.com> からアクセスしてください。

Informatica グローバルカスタマサポート

電話または Informatica Network からグローバルサポートセンターに連絡できます。

各地域の Informatica グローバルカスタマサポートの電話番号は、Informatica Web サイト (<https://www.informatica.com/services-and-training/customer-success-services/contact-us.html>) を参照してください。

Informatica Network でオンラインサポートリソースを見つけるには、<https://network.informatica.com> にアクセスし、eSupport オプションを選択します。

第 1 章

アップグレードの概要

この章では、以下の項目について説明します。

- [Informatica のアップグレード, 10 ページ](#)
- [Informatica のアップグレードサポート, 10 ページ](#)
- [アップグレードプロセス, 11 ページ](#)
- [Business Glossary のアップグレード, 12 ページ](#)

Informatica のアップグレード

Informatica Platform は、サーバーコンポーネントおよび 1 つ以上のクライアントコンポーネントで構成されます。Informatica では、Informatica サービスおよびクライアントをアップグレードするために別々のインストーラが提供されます。

ドメイン内の各ノードをアップグレードする際に、ノードホスト名、ポート番号、またはドメイン環境設定リポジトリデータベースへの変更を許可するようにノード設定の変更を選択することができます。

Informatica のアップグレードサポート

Informatica 10.0、10.1、10.1.1、10.2、10.2.1 および 10.2.2 から直接 10.4.0 にアップグレードできます。

現在インストールされている製品バージョンを Informatica 10.4.0 にアップグレードできない場合は、まずサポートされているバージョンにアップグレードする必要があります。現在インストールされている Informatica 製品のバージョンを特定するには、Informatica Administrator のヘッダ領域で **[ヘルプ] > [Informatica Administrator について]** をクリックします。

注: サポート EOL ステートメントの詳細については、Informatica グローバルカスタマーサポートに問い合わせるか、<https://network.informatica.com/docs/DOC-16182> を参照してください。

アップグレードプロセス

Informatica サービスと Informatica クライアントのアップグレードは、複数のフェーズで構成されています。アップグレードは以下のフェーズで構成されます。

1. ドメインに対するアップグレード前タスクを実行し、正常にインストーラを実行できるようにします。
 2. ドメインをアップグレードします。ドメインをアップグレードするには、Informatica サーバーインストーラを実行し、アップグレードオプションを選択します。ドメインアップグレードウィザードでサーバーファイルをインストールし、ドメインを設定します。ドメインに複数のノードがある場合、すべてのノードをアップグレードする必要があります。ドメイン内の各ノードをアップグレードする際に、ノードホスト名、ポート番号、またはドメイン環境設定リポジトリデータベースへの変更を許可するようにノード設定の変更を選択することができます。
- 以下の表に、ドメインをアップグレードするときにインストーラが実行する処理を示します。

タスク	内容
Informatica Upgrade Advisor を実行します。	インストーラがアップグレード前タスクを実行してサービスを検証し、ドメイン内の廃止されたサービス、サポートされているデータベース、およびサポートされているオペレーティングシステムについて確認します。 アップグレードを進める前に、競合を解決します。
Informatica のインストール。	Informatica のディレクトリとファイルを新しいディレクトリにインストールします。
infa_shared ディレクトリのコピー。	infa_shared ディレクトリの内容を、既存のインストールディレクトリから新しいインストールディレクトリにコピーします。
暗号化キーファイルをコピーします。	ドメイン暗号化キーファイルを、既存のインストールディレクトリからアップグレード時に指定したディレクトリにコピーします。
既存のドメインで Kerberos 認証を使用する場合は、Kerberos 構成ファイルおよびキータブファイルをコピーします。	既存インストールディレクトリの Kerberos 構成ファイルを、新しいインストールディレクトリにコピーします。既存インストールディレクトリのキータブファイルを、アップグレード時に指定した暗号化キーディレクトリにコピーします。
既存ドメインで Metadata Manager サービスが使用されている場合は、mm_files ディレクトリをコピーします。	mm_files ディレクトリの内容を、既存のインストールディレクトリのデフォルトの場所から新しいインストールディレクトリにコピーします。
ドメインのアップグレード。	このアップグレードでは、ドメイン内のユーザーアカウントおよび管理者アカウントが保持されます。
Informatica サービスの開始。	ノード上で Informatica サービスを開始します。

3. アプリケーションサービスをアップグレードします。ドメインをアップグレードした後、Administrator ツールにログインしてアプリケーションサービスをアップグレードします。サービスアップグレードウィザードでは、アップグレードが必要なすべてのアプリケーションサービスの一覧が表示されます。依存オブジェクトに必要な順序に基づいてサービスがアップグレードされます。

4. Informatica クライアントをアップグレードします。クライアントインストーラを使用して次の Informatica クライアントツールをアップグレードします。

- PowerCenter Client
- Informatica Developer

Informatica Developer を、ドメインをアップグレードした HotFix バージョンを含む Informatica のバージョンにアップグレードします。

注: 以前のバージョンの Developer tool を使用して Informatica ドメインに接続することはできません。

Informatica クライアントをアップグレードするには、Informatica クライアントインストーラを実行し、アップグレードオプションを選択します。クライアントが複数のマシンにインストールされている場合は、すべてのマシンのクライアントをアップグレードします。

5. アップグレード後のタスクを実行します。

注: Informatica のインストールを複数のマシンでアップグレードする場合は、このガイドの詳細な指示を使用して最初のアップグレードを完了してください。その後のアップグレードは、付録のアップグレードチェックリストを利用して実行できます。

Business Glossary のアップグレード

ビジネス用語集機能は Metadata Manager から Analyst ツールに移動されています。ドメインをアップグレードする前に、Metadata Manager からビジネス用語集のエクスポートと削除を行う必要があります。

Metadata Manager の用語集エクスポートファイルを使用して、アップグレード後に Analyst ツールで対応するビジネス用語集を作成します。

Analyst ツールのビジネス用語集には、Metadata Manager のビジネス用語集にはないいくつかの機能が含まれています。例えば、Analyst ツールのビジネス用語集には、ビジネス用語に関連するビジネスの実践を左右するビジネスポリシーがあります。Analyst ツールの用語集は、広範囲のビジネスユーザーが使用できます。データリネージュの表示が不要なビジネスユーザーは、Metadata Manager を使用してビジネス用語とカテゴリの作成と表示を行う必要はなくなりました。

ビジネス用語集をアップグレードするには、以下の手順を実行します。

1. Metadata Manager でアップグレード前のタスクを完了します。
 - a. Metadata Manager リポジトリをバックアップします。
 - b. 必要に応じて列挙されたリンクまたはルールベースのリンクを使用する各用語集をバックアップし、列挙されたリンクおよびリンクルールのファイルをバックアップします。
 - c. オプション。ビジネス用語集モデルにカスタム属性が追加されている場合は、ビジネス用語集モデルをエクスポートします。
 - d. 各ビジネス用語集を Microsoft Excel ファイルまたは XML ファイルにエクスポートします。

注: ビジネス用語集を XML ファイルにエクスポートする前に最新パッチがあるかどうか、Informatica グローバルカスタマサポートにお問い合わせください。
 - e. 各 Microsoft Excel ファイルで、Metadata Manager サービス名が含まれるワークシートを追加します。
 - f. Metadata Manager から各ビジネス用語集のページと削除を行います。
2. ドメインをアップグレードします。
 - a. オプション。Metadata Manager でビジネス用語集モデルにカスタム属性が追加されている場合は、Analyst ツールで Metadata Manager モデルエクスポートファイルをインポートします。

- b. オプション。Metadata Manager でビジネス用語またはカテゴリが用語集間でリンクされている場合は、Analyst ツールで用語集エクスポートファイルをマージします。Microsoft Excel ファイルに用語集をエクスポートしている場合、重複するビジネス用語を削除してください。
 - c. Analyst ツールで、各ビジネス用語集ファイルをインポートします。
 - d. オプション。Metadata Manager に表示するパブリッシュされていないビジネス用語とカテゴリを、Analyst ツールでパブリッシュします。
 - e. 各 Analyst ツールのビジネス用語集に対して 1 つのビジネス用語集リソースを作成します。
 - f. オプション。列挙されたリンクまたはルールベースのリンクを使用する各用語集で、列挙されたリンクおよびリンクルールのファイルをビジネス用語集リソースに関連付けます。
 - g. 各ビジネス用語集リソースをロードし、各用語集を確認します。
3. ビジネス用語集を Analyst ツールにインポートし、Analyst ツールでアップグレード後のタスクを完了します。
4. Analyst ツールのビジネス用語集に基づいたリソースを Metadata Manager で作成してロードし、Metadata Manager でアップグレード後のタスクを完了します。

Analyst ツールのビジネス用語集の詳細については、『*Informatica Business Glossary ガイド*』を参照してください。Metadata Manager でのビジネス用語集リソースの作成と設定の詳細については、『*Metadata Manager 管理者ガイド*』を参照してください。

第 2 章

Linux でドメインをアップグレードする前に

この章では、以下の項目について説明します。

- [リリースノートの確認, 14 ページ](#)
- [システム要件の確認, 14 ページ](#)
- [インストーラファイルの抽出, 19 ページ](#)
- [Informatica Upgrade Advisor を実行します, 19 ページ](#)

リリースノートの確認

リリースノートで、インストールとアップグレードプロセスの最新情報を参照してください。また、リリースでの既知および修正済みの制限事項についての情報も確認できます。

システム要件の確認

使用する環境が、インストールプロセス、一時ディスク領域、ポートの可用性、データベース、アプリケーションサービスハードウェアの最小システム要件を満たしていることを確認します。

製品要件およびサポート対象プラットフォームの詳細については、次の Informatica Network で Product Availability Matrix を参照してください。

<https://network.informatica.com/community/informatica-network/product-availability-matrices>

Verify the Domain Upgrade Requirements

Verify that your machine meets the minimum system requirements to upgrade the Informatica domain.

Ensure that you have a minimum disk space of 13 GB and a RAM of 4 GB to upgrade the Informatica domain.

注: When you upgrade, the installer requires an additional disk space used by the existing infa_shared directory.

製品要件およびサポート対象プラットフォームの詳細については、次の Informatica Network で Product Availability Matrix を参照してください。

<https://network.informatica.com/community/informatica-network/product-availability-matrices>

一時ディスクスペースと権限の確認

一時ディスク容量、一時ファイルに対する権限、Informatica クライアントツールに関する最小システム要件を、現在の環境が満たしていることを確認します。

一時ファイル用のディスク容量

インストーラによりハードディスクに一時ファイルが書き込まれます。インストールをサポートするディスク容量 1 GB がマシンにあることを確認します。インストールが完了した場合、インストーラにより一時ファイルが削除され、ディスク容量が解放されます。

アプリケーションサービスが有効な状態で Informatica をインストールするには、18 GB の最小ディスク容量と 6 GB RAM のメモリを確認します。18 GB のディスク容量のうち、14 GB のディスク容量は製品のインストールバイナリに必要です。実行するランタイム設定により、Informatica サービスでは 13,846 MB 前後のディスク容量を使用する場合があります。1 GB のディスク容量は、使用される一時ディスク容量です。

一時ファイルの権限

/tmp ディレクトリの読み取り、書き込み、実行の権限があることを確認します。

製品要件およびサポート対象プラットフォームの詳細については、次の Informatica Network で Product Availability Matrix を参照してください。

<https://network.informatica.com/community/informatica-network/product-availability-matrices>

ディストリビューションの確認

非ネイティブ環境のディストリビューションを確認します。

各リリースで、非ネイティブディストリビューションおよびディストリビューションバージョンのサポートが追加、保留、削除される可能性があります。将来のリリースで保留していたバージョンのサポートを再開する可能性があります。サポートされるバージョンの最新リストを確認するには、Informatica カスタマーポータル (<https://network.informatica.com/community/informatica-network/product-availability-matrices>) の製品可用性マトリックスを参照してください。

パッチ要件の確認 Linux の場合

Informatica サービスをインストールする前に、必要なオペレーティングシステムのパッチとライブラリがマシンにインストールされていることを確認します。

Linux 上の PowerCenter

次の表に、Linux 上の PowerCenter で Informatica サービスを使用する場合に必要なパッチとライブラリを示します。

プラットフォーム	オペレーティングシステム	オペレーティングシステムパッチ
zLinux	Red Hat Enterprise Linux 6.9	次のすべてのパッケージ。<version>はパッケージのバージョンです。 <ul style="list-style-type: none">- e2fsprogs-libs-<version>.el6.s390- keyutils-libs-<version>.el6.s390- libselinux-<version>.el6.s390- libsepol-<version>.el6.s390
AWS Linux	AWS Linux リリース 2 (Karoo) - 2.0.20190618	次のすべてのパッケージ。 <ul style="list-style-type: none">- e2fsprogs-libs-1.42.9-12.amzn2.0.2.x86_64- keyutils-libs-1.5.8-3.amzn2.0.2.x86_64- libselinux-2.5-12.amzn2.0.2.x86_64- libsepol-2.5-8.1.amzn2.0.2.x86_64
Ubuntu	16.04.5	次のすべてのパッケージ。 <ul style="list-style-type: none">- e2fsprogs-1.42.13-1ubuntu1-amd64-ext2/ext3/ext4 ファイルシステムユーティリティ- libkeyutils1:amd64-1.5.9-8ubuntu1-amd64-Linux Key Management Utilities (ライブラリ)- libselinux1:amd64-2.4-3build2-amd64-SELinux ランタイム共有ライブラリ- libsepol1:amd64-2.4-2-amd64-SELinux ライブラリ (バイナリセキュリティポリシー操作)
Linux-x64	Red Hat Enterprise Linux 6.7	次のすべてのパッケージ。<version>はパッケージのバージョンです。 <ul style="list-style-type: none">- e2fsprogs-libs-<version>.el6- keyutils-libs-<version>.el6- libselinux-<version>.el6- libsepol-<version>.el6
Linux-x64	Red Hat Enterprise Linux 7.3	次のすべてのパッケージ。<version>はパッケージのバージョンです。 <ul style="list-style-type: none">- e2fsprogs-libs-<version>.el7- keyutils-libs-<version>.el7- libselinux-<version>.el7- libsepol-<version>.el7
Linux-x64	SUSE Linux Enterprise Server 11	Service Pack 4
Linux-x64	SUSE Linux Enterprise Server 12	Service Pack 2

Linux 上の Data Engineering

次の表に、Linux 上の Data Engineering で Informatica サービスを使用する場合に必要なパッチとライブラリを示します。

プラットフォーム	オペレーティングシステム	オペレーティングシステムパッチ
AWS Linux	AWS Linux リリース 2 (Karoo) - 2.0.20190618	次のすべてのパッケージ。 - e2fsprogs-libs-1.42.9-12.amzn2.0.2.x86_64 - keyutils-libs-1.5.8-3.amzn2.0.2.x86_64 - libselinux-2.5-12.amzn2.0.2.x86_64 - libsepol-2.5-8.1.amzn2.0.2.x86_64
Ubuntu	16.04.5	次のすべてのパッケージ。 - e2fsprogs-1.42.13-1ubuntu1-amd64-ext2/ext3/ext4 ファイルシステムユーティリティ - libkeyutils1:amd64-1.5.9-8ubuntu1-amd64-Linux Key Management Utilities (ライブラリ) - libselinux1:amd64-2.4-3build2-amd64-SELinux ランタイム共有ライブラリ - libsepol1:amd64-2.4-2-amd64-SELinux ライブラリ (バイナリセキュリティポリシー操作)
Linux-x64	Red Hat Enterprise Linux 6.7	次のすべてのパッケージ。<version>はパッケージのバージョンです。 - e2fsprogs-libs-<version>.el6 - keyutils-libs-<version>.el6 - libselinux-<version>.el6 - libsepol-<version>.el6
Linux-x64	Red Hat Enterprise Linux 7.3	次のすべてのパッケージ。<version>はパッケージのバージョンです。 - e2fsprogs-libs-<version>.el7 - keyutils-libs-<version>.el7 - libselinux-<version>.el7 - libsepol-<version>.el7
Linux-x64	SUSE Linux Enterprise Server 11	Service Pack 4
Linux-x64	SUSE Linux Enterprise Server 12	Service Pack 2

Java Runtime Environment のインストール

Informatica には、AIX または zLinux 対応の Java ライブラリは付属していません。AIX または zLinux に Informatica をインストールする前に、Java Runtime Environment (JRE) をダウンロードしてインストールする必要があります。必要とされる JRE のバージョンは、Informatica をインストールするプラットフォームによって異なります。

参照リンクでダウンロード可能なソフトウェアは、Informatica LLC ではなく、サードパーティに属しています。ダウンロード元リンクは、誤りがある可能性や、削除または変更される可能性があります。Informatica LLC は、そのようなリンクやソフトウェアに対し、明示的、黙示的にかかわらず、商品性、特定目的への適合性、権原、および非侵害についてのいかなる保証についても、その責任を一切負わないものとします。

Java Runtime Environment のインストール zLinux の場合

PowerCenter 統合サービス、PowerCenter リポジトリサービス、および Web Services Hub は、zLinux 用の 1.8.0_181Java サブバージョンをサポートします。Informatica は zLinux 対応の Java ライブラリを提供していません。

zLinux 上の PowerCenter 統合サービス、PowerCenter リポジトリサービス、および Web Services Hub は、次の Java バージョンで認定されています。

Java(TM) SE Runtime Environment (ビルド 8.0.5.20 - pxz6480sr5fp20 - 20180802_01 (SR5_FP20))

zLinux に PowerCenter 統合サービス、PowerCenter リポジトリサービス、および Web Services Hub をインストールする前に、次のリンクから jdk-8u181-b12Java Runtime Environment ファイルをダウンロードします。

<https://developer.ibm.com/javasdk/downloads/sdk8/>

JRE のインストール中にエラーが発生する場合は、JRE ベンダーにお問い合わせください。

環境変数の確認

Informatica のインストールで使用する環境変数を設定します。

以下の表に、確認する環境変数を示します。

変数	説明
IATEMPDIR	インストール中に作成される一時ファイルの場所。Informatica は一時ファイル用に 1 GB のディスク容量が必要です。 /tmp ディレクトリに一時ファイルを作成しない場合に、この環境変数を設定します。
INFA_DOMAINS_FILE	domains.infa ファイルの場所を含みます。アップグレードを開始する前にこの変数を取り消します。
INFA_HOME	Informatica インストールディレクトリの場所を含みます。アップグレードを開始する前にこの変数を取り消します。
LANG および LC_ALL	ロケールを変更してターミナルセッションに適切な文字エンコードを設定します。例えば、フランス語の場合は Latin1 または ISO-8859-1 に、日本語の場合は EUC-JP または Shift JIS に、中国語と韓国語の場合は UTF-8 にエンコードを設定します。文字エンコードにより、UNIX 端末に表示される文字の種類が決まります。
DISPLAY	インストーラを実行する前に DISPLAY 環境変数を設定解除します。 DISPLAY 環境変数に何らかの値が設定されている場合、インストールに失敗する可能性があります。
ライブラリパス	ライブラリパス環境変数が Informatica の以前のバージョンを含んでいないことを確認します。
PATH	PATH 環境変数が Informatica の以前のバージョンを含んでいないことを確認します。

インストーラファイルの抽出

インストーラファイルは圧縮ファイルとして圧縮および配布されます。

インストールファイルは、注文処理電子メールに含まれている FTP リンクから取得できます。Informatica インストール tar ファイルを Informatica 電子ソフトウェアダウンロードサイトからマシン上のディレクトリにダウンロードした後で、インストーラファイルを抽出します。

インストーラファイルをマシンのディレクトリに抽出します。インストーラを実行するユーザーは、インストーラファイルディレクトリの読み取り/書き込み権限と、実行可能ファイルの実行権限を持っている必要があります。

注: 必ずファイルをローカルディレクトリか、マシンにマッピングされた共有ネットワークドライブにダウンロードしてください。次に、インストーラファイルを抽出します。ただし、マッピングされたファイルからインストーラを実行することはできません。抽出したファイルをローカルドライブにコピーしてから、インストーラを実行します。

Informatica Upgrade Advisor を実行します

アップグレードを実行する前に、Informatica Upgrade Advisor を実行してサービスを検証し、ドメイン内の廃止されたサービス、サポートされているデータベース、およびサポートされているオペレーティングシステムについて確認します。

1. システムユーザーアカウントを使用してマシンにログインします。
2. Informatica Upgrade Advisor を実行する前に、ドメインとサービスが実行されていることを確認します。
3. シェルコマンドラインで、ルートディレクトリにある `install.sh` ファイルを実行します。
ローカル環境変数が設定されていることを確認するよう求めるメッセージが表示されます。
4. 環境変数が設定されていない場合は、**N** キーを押してインストーラを終了し、必要に応じて環境変数を設定します。
環境変数が設定されている場合は、**Y** キーを押して続行します。
5. Informatica をアップグレードするには、**2** キーを押します。
6. Informatica Upgrade Advisor を実行するには、**1** キーを押します。
[ようこそ] セクションが表示されます。
7. **Enter** キーを押します。
[インストールディレクトリ] セクションが表示されます。
8. 現在のインストールディレクトリを入力します。
9. **Enter** キーを押します。
[ドメインおよびノードの設定] セクションが表示されます。

10. 次のドメイン情報を入力します。

プロパティ	説明
ドメイン名	ドメインの名前。デフォルトのドメイン名は、Domain_<MachineName>です。名前は 128 文字以下で、7 ビットの ASCII 文字のみにする必要があります。スペースまたは次のいずれかの文字は使用できません: ` % * + ; " ? , < > \ /`
ゲートウェイノードのホスト名	ドメインのゲートウェイノードをホストするマシンのホスト名です。
ゲートウェイノードのポート名	ゲートウェイノードのポート番号。
ドメインユーザー名	ドメイン管理者のユーザー名。初回はこのユーザー名を使用して Informatica Administrator にログインできます。次のガイドラインを使用します。 名前では大文字と小文字が区別されず、128 文字以内であることが必要です。 名前には、タブ、改行文字、または次の特殊文字を使用できません: % * + / ? ; < > - 名前には、先頭と末尾の文字以外に ASCII スペース文字を使用できます。その他のスペース文字は使用できません。
ドメインのパスワード	ドメイン管理者のパスワードです。パスワードは、3 文字以上で 16 文字を超えないようにする必要があります。 Kerberos 認証を使ったネットワーク上で実行されるように Informatica ドメインを設定する場合は使用できません。

11. **Enter** キーを押します。
[Infomatica Upgrade Advisor のサマリ] セクションが表示されます。
12. Advisor の結果をログファイル (Summary_<timestamp>.log) で確認します。
13. **Enter** キーを押して、Informatica Upgrade Advisor を閉じます。

第 3 章

UNIX でドメインをアップグレードする前に

この章では、以下の項目について説明します。

- [リリースノートの確認, 21 ページ](#)
- [システム要件の確認, 21 ページ](#)
- [Review Patch Requirements on UNIX, 22 ページ](#)
- [Java Runtime Environment のインストール, 22 ページ](#)
- [ディストリビューションの確認, 23 ページ](#)
- [ドメインアップグレード要件の確認, 23 ページ](#)
- [環境変数の確認, 23 ページ](#)
- [インストーラファイルの抽出, 24 ページ](#)
- [Informatica Upgrade Advisor を実行します, 25 ページ](#)

リリースノートの確認

リリースノートで、インストールとアップグレードプロセスの最新情報を参照してください。また、リリースでの既知および修正済みの制限事項についての情報も確認できます。

システム要件の確認

使用する環境が、インストールプロセス、一時ディスク領域、ポートの可用性、データベース、アプリケーションサービスハードウェアの最小システム要件を満たしていることを確認します。

製品要件およびサポート対象プラットフォームの詳細については、次の Informatica Network で Product Availability Matrix を参照してください。

<https://network.informatica.com/community/informatica-network/product-availability-matrices>

Review Patch Requirements on UNIX

Before you install the Informatica services, verify that the machine has the required operating system patches and libraries.

次の表に、UNIX 上の PowerCenter で Informatica サービスを使用する場合に必要なパッチとライブラリを示します。

プラットフォーム	オペレーティングシステム	オペレーティングシステムパッチ
AIX	7.1 TL4	OS レベル: 7100-04 bos.adt.debug バージョン 7.1.2.0
AIX	7.2 TL0	OS レベル: 7200-00 bos.adt.debug バージョン 7.2.0.0

Java Runtime Environment のインストール

Informatica には、AIX または zLinux 対応の Java ライブラリは付属していません。AIX または zLinux に Informatica をインストールする前に、Java Runtime Environment (JRE) をダウンロードしてインストールする必要があります。必要とされる JRE のバージョンは、Informatica をインストールするプラットフォームによって異なります。

参照リンクでダウンロード可能なソフトウェアは、Informatica LLC ではなく、サードパーティに属しています。ダウンロード元リンクは、誤りがある可能性や、削除または変更される可能性があります。Informatica LLC は、そのようなリンクやソフトウェアに対し、明示的、黙示的にかかわらず、商品性、特定目的への適合性、権原、および非侵害についてのいかなる保証についても、その責任を一切負わないものとします。

Java Runtime Environment のインストール (AIX の場合)

AIX 対応の Java ライブラリは付属していません。AIX に Informatica をインストールする場合は、事前に Java Runtime Environment (JRE) をダウンロードする必要があります。必要とされる JRE のバージョンは、Informatica をインストールするプラットフォームによって異なります。

AIX 上の Informatica サービスは、次のバージョンで認証されています。

Java(TM) SE Runtime Environment (ビルド 8.0.5.40 - pap6480sr5fp40-20190807_01(SR5 FP40))Java(TM) SE Runtime Environment (build 8.0.5.40 - pap6480sr5fp40-20190807_01(SR5 FP40))

次のファイルをダウンロードします。Java8_64.jre.8.0.0.540.tar

JRE のインストール中にエラーが発生する場合は、JRE ベンダーにお問い合わせください。

注: Informatica サービスをホストする AIX マシンに強度無制限の Java Cryptography Extension (JCE) ポリシーファイルをインストールする必要があります。JCE ポリシーファイルは付属していません。JCE ポリシーファイルのダウンロードとインストールの詳細については、

<https://www14.software.ibm.com/webapp/iwm/web/preLogin.do?source=jcesdk> で JCE ポリシーファイルを参照してください。

参照リンクでダウンロード可能なソフトウェアは、Informatica LLC ではなく、サードパーティに属しています。ダウンロード元リンクは、誤りがある可能性や、削除または変更される可能性があります。Informatica LLC は、そのようなリンクやソフトウェアに対し、明示的、黙示的にかかわらず、商品性、特定目的への適合性、権原、および非侵害についてのいかなる保証についても、その責任を一切負わないものとします。

ディストリビューションの確認

非ネイティブ環境のディストリビューションを確認します。

各リリースで、非ネイティブディストリビューションおよびディストリビューションバージョンのサポートが追加、保留、削除される可能性があります。将来のリリースで保留していたバージョンのサポートを再開する可能性があります。サポートされるバージョンの最新リストを確認するには、Informatica カスタマポータル (<https://network.informatica.com/community/informatica-network/product-availability-matrices>) の製品可用性マトリックスを参照してください。

ドメインアップグレード要件の確認

マシンが Informatica ドメインをアップグレードするための最小システム要件を満たしていることを確認します。

Informatica ドメインをアップグレードするには、13GB 以上のディスクスペースと 4GB の RAM があることを確認してください。

注: アップグレードする際、既存の infa_shared ディレクトリが使用している追加のディスク領域がインストーラで必要です。

製品要件およびサポート対象プラットフォームの詳細については、次の Informatica Network で Product Availability Matrix を参照してください。

<https://network.informatica.com/community/informatica-network/product-availability-matrices>

一時的なディスク容量の要件

インストーラによりハードディスクに一時ファイルが書き込まれます。インストールをサポートする、マシンに十分な利用可能なディスク容量があることを確認します。インストールが完了した場合、インストーラにより一時ファイルが削除され、ディスク容量が解放されます。

インストーラを実行するには、1 GB の一時ディスク容量が必要です。

環境変数の確認

Informatica のインストールで使用する環境変数を設定します。

以下の表に、UNIX 上で確認する環境変数を示します。

変数	説明
IATEMPDIR	インストール中に作成される一時ファイルの場所。Informatica は一時ファイル用に 1 GB のディスク容量が必要です。 /tmp ディレクトリに一時ファイルを作成しない場合に、この環境変数を設定します。
INFA_DOMAINS_FILE	domains.infa ファイルの場所を含みます。アップグレードを開始する前にこの変数を取り消します。

変数	説明
INFA_HOME	Informatica インストールディレクトリの場所を含みます。アップグレードを開始する前にこの変数を取り消します。
INFA_JRE_HOME	サポートされている Java Runtime Environment (JRE) が含まれているフォルダの場所。Informatica を AIX にインストールする場合は、INFA_JRE_HOME 環境変数を設定します。 シェルの構成ファイル、例えば.bashrc ファイルでは、INFA_JRE_HOME 環境変数を JRE が含まれるディレクトリに設定します。ログインシェルが INFA_JRE_HOME 環境変数にアクセスできることを確認します。
JRE_HOME	Informatica サービスを UNIX マシンにインストールする場合、インストールを開始する前に環境変数 JRE_HOME をクリアします。
LANG および LC_ALL	ロケールを変更してターミナルセッションに適切な文字エンコードを設定します。例えば、フランス語の場合は Latin1 または ISO-8859-1 に、日本語の場合は EUC-JP または Shift JIS に、中国語と韓国語の場合は UTF-8 にエンコードを設定します。文字エンコードにより、UNIX 端末に表示される文字の種類が決まります。
DISPLAY	インストーラを実行する前に DISPLAY 環境変数を設定解除します。DISPLAY 環境変数に何らかの値が設定されている場合、インストールに失敗する可能性があります。
ライブラリパス	ライブラリパス環境変数が Informatica の以前のバージョンを含んでいないことを確認します。
PATH	PATH 環境変数が Informatica の以前のバージョンを含んでいないことを確認します。

インストーラファイルの抽出

インストーラファイルは圧縮ファイルとして圧縮および配布されます。

インストールファイルは、注文処理電子メールに含まれている FTP リンクから取得できます。Informatica インストール tar ファイルを Informatica 電子ソフトウェアダウンロードサイトからマシン上のディレクトリにダウンロードした後で、インストーラファイルを抽出します。

インストーラファイルをマシンのディレクトリに抽出します。インストーラを実行するユーザーは、インストーラファイルディレクトリの読み取り/書き込み権限と、実行可能ファイルの実行権限を持っている必要があります。

注: 必ずファイルをローカルディレクトリか、マシンにマッピングされた共有ネットワークドライブにダウンロードしてください。次に、インストーラファイルを抽出します。ただし、マッピングされたファイルからインストーラを実行することはできません。抽出したファイルをローカルドライブにコピーしてから、インストーラを実行します。

Informatica Upgrade Advisor を実行します

アップグレードを実行する前に、Informatica Upgrade Advisor を実行してサービスを検証し、ドメイン内の廃止されたサービス、サポートされているデータベース、およびサポートされているオペレーティングシステムについて確認します。

1. システムユーザーアカウントを使用してマシンにログインします。
2. Informatica Upgrade Advisor を実行する前に、ドメインとサービスが実行されていることを確認します。
3. シェルコマンドラインで、ルートディレクトリにある install.sh ファイルを実行します。
ロケール環境変数が設定されていることを確認するよう求めるメッセージが表示されます。
4. 環境変数が設定されていない場合は、**N** キーを押してインストーラを終了し、必要に応じて環境変数を設定します。
環境変数が設定されている場合は、**Y** キーを押して続行します。
5. Informatica をアップグレードするには、**2** キーを押します。
6. Informatica Upgrade Advisor を実行するには、**1** キーを押します。
[ようこそ] セクションが表示されます。
7. **Enter** キーを押します。
[インストールディレクトリ] セクションが表示されます。
8. 現在のインストールディレクトリを入力します。
9. **Enter** キーを押します。
[ドメインおよびノードの設定] セクションが表示されます。
10. 次のドメイン情報を入力します。

プロパティ	説明
ドメイン名	ドメインの名前。デフォルトのドメイン名は、Domain_<MachineName>です。名前は 128 文字以下で、7 ビットの ASCII 文字のみにする必要があります。スペースまたは次のいずれかの文字は使用できません: ` % * + ; " ? , < > \ /
ゲートウェイノードのホスト名	ドメインのゲートウェイノードをホストするマシンのホスト名です。
ゲートウェイノードのポート名	ゲートウェイノードのポート番号。

プロパティ	説明
ドメインユーザー名	ドメイン管理者のユーザー名。初回はこのユーザー名を使用して Informatica Administrator にログインできます。次のガイドラインを使用します。 名前では大文字と小文字が区別されず、128 文字以内であることが必要です。 名前には、タブ、改行文字、または次の特殊文字を使用できません: % * + / ? ; < > - 名前には、先頭と末尾の文字以外に ASCII スペース文字を使用できます。その他のスペース文字は使用できません。
ドメインのパスワード	ドメイン管理者のパスワードです。パスワードは、3 文字以上で 16 文字を超えないようにする必要があります。 Kerberos 認証を使ったネットワーク上で実行されるように Informatica ドメインを設定する場合は使用できません。

11. **Enter** キーを押します。
[Informatica Upgrade Advisor のサマリ] セクションが表示されます。
12. Advisor の結果をログファイル (Summary_<timestamp>.log) で確認します。
13. **Enter** キーを押して、Informatica Upgrade Advisor を閉じます。

第 4 章

Windows でドメインをアップグレードする前に

この章では、以下の項目について説明します。

- [リリースノートの確認, 27 ページ](#)
- [システム要件の確認, 27 ページ](#)
- [ディストリビューションの確認, 28 ページ](#)
- [ドメインアップグレード要件の確認, 28 ページ](#)
- [環境変数の確認, 29 ページ](#)
- [インストーラファイルの抽出, 29 ページ](#)
- [Informatica Upgrade Advisor を実行します, 30 ページ](#)

リリースノートの確認

リリースノートで、インストールとアップグレードプロセスの最新情報を参照してください。また、リリースでの既知および修正済みの制限事項についての情報も確認できます。

システム要件の確認

使用する環境が、インストールプロセス、一時ディスク領域、ポートの可用性、データベース、アプリケーションサービスハードウェアの最小システム要件を満たしていることを確認します。

製品要件およびサポート対象プラットフォームの詳細については、次の Informatica Network で Product Availability Matrix を参照してください。

<https://network.informatica.com/community/informatica-network/product-availability-matrices>

ディストリビューションの確認

非ネイティブ環境のディストリビューションを確認します。

各リリースで、非ネイティブディストリビューションおよびディストリビューションバージョンのサポートが追加、保留、削除される可能性があります。将来のリリースで保留していたバージョンのサポートを再開する可能性があります。サポートされるバージョンの最新リストを確認するには、Informatica カスタマポータル (<https://network.informatica.com/community/informatica-network/product-availability-matrices>) の製品可用性マトリックスを参照してください。

ドメインアップグレード要件の確認

マシンが Informatica ドメインをアップグレードするための最小システム要件を満たしていることを確認します。

以下の表に、Informatica ドメインのアップグレードに必要な最小のメモリおよびディスク容量を示します。

RAM	ディスクスペース
4GB	10 GB

注: アップグレードする際、既存の `infa_shared` ディレクトリが使用している追加のディスク領域がインストーラで必要です。

次の表に、Informatica クライアントツールを実行するための最小システム要件を示します。

クライアント	プロセッサ	RAM	ディスクスペース
PowerCenter クライアント	1 CPU	1 GB	3 GB

製品要件およびサポート対象プラットフォームの詳細については、次の Informatica Network で Product Availability Matrix を参照してください。

<https://network.informatica.com/community/informatica-network/product-availability-matrices>

一時ディスクスペースと権限の確認

一時ディスク容量、一時ファイルに対する権限、Informatica クライアントツールに関する最小システム要件を、現在の環境が満たしていることを確認します。

一時ファイル用のディスク容量

インストーラによりハードディスクに一時ファイルが書き込まれます。インストーラをサポートするディスク容量 1 GB がマシンにあることを確認します。インストーラが完了した場合、インストーラにより一時ファイルが削除され、ディスク容量が解放されます。

アプリケーションサービスが有効な状態で Informatica をインストールするには、18 GB の最小ディスク容量と 6 GB RAM のメモリを確認します。18 GB のディスク容量のうち、14 GB のディスク容量は製品のインストールバイナリに必要です。実行するランタイム設定により、Informatica サービスでは 13,846 MB 前後のディスク容量を使用する場合があります。1 GB のディスク容量は、使用される一時ディスク容量です。

一時ファイルの権限

/tmp ディレクトリの読み取り、書き込み、実行の権限があることを確認します。

製品要件およびサポート対象プラットフォームの詳細については、次の Informatica Network で Product Availability Matrix を参照してください。

<https://network.informatica.com/community/informatica-network/product-availability-matrices>

環境変数の確認

Informatica のインストールで使用する環境変数を設定します。

以下の表に、Windows 上で確認する環境変数を示します。

変数	説明
%TEMP%	インストール中に作成される一時ファイルの場所。Informatica は一時ファイル用に 1 GB のディスク容量が必要です。 デフォルトのドライブに一時ファイルを作成しない場合に、この環境変数を設定します。
PATH	PATH 環境変数が Informatica の以前のバージョンを含んでいないことを確認します。
ライブラリパス	ライブラリパス環境変数が Informatica の以前のバージョンを含んでいないことを確認します。
INFA_HOME	Informatica インストールディレクトリの場所を含みます。アップグレードを開始する前にこの変数を取り消します。
INFA_DOMAINS_FILE	domains.infa ファイルの場所を含みます。アップグレードを開始する前にこの変数を取り消します。
DISPLAY	インストーラを実行する前に DISPLAY 環境変数を設定解除します。 DISPLAY 環境変数に何らかの値が設定されている場合、インストールに失敗する可能性があります。

インストーラファイルの抽出

インストーラファイルは zip ファイルとして圧縮および配布されます。

zip ユーティリティを使用して、インストーラファイルをマシン上のディレクトリに抽出します。zip ユーティリティのバージョンが、Windows オペレーティングシステムのバージョンと互換性があることを確認します。ファイルを解凍する場合は、zip ユーティリティが空のフォルダも抽出することを確認します。

FTP ダウンロードを使用してインストーラファイルを抽出できます。Informatica インストール zip ファイルを Informatica 電子ソフトウェアダウンロードサイトからマシン上のディレクトリにダウンロードしてからインストーラファイルを抽出します。

注: 必ずファイルをローカルディレクトリか、マシンにマッピングされた共有ネットワークドライブにダウンロードしてください。次に、インストーラファイルを抽出します。ただし、マッピングされたファイルからイン

ストーラを実行することはできません。抽出したファイルをローカルドライブにコピーしてから、インストーラを実行します。

Informatica Upgrade Advisor を実行します

アップグレードを実行する前に、Informatica Upgrade Advisor を実行してサービスを検証し、ドメイン内の廃止されたサービス、サポートされているデータベース、およびサポートされているオペレーティングシステムについて確認します。

1. 以前のバージョンのインストールに使用したユーザーアカウントでマシンにログインします。
2. Informatica Upgrade Advisor を実行する前に、ドメインとサービスが実行されていることを確認します。
3. インストールファイルがあるディレクトリのルートに移動して、管理者として install.bat を実行します。管理者としてファイルを実行するには、install.bat ファイルを右クリックし、**【管理者として実行】**を選択します。

Informatica 10.4.0 ページが表示されます。

4. **Informatica 10.4.0** へアップグレードを選択します。

デフォルトでは、**【Informatica Upgrade Advisor を実行します】** がオンになっています。この場合、アップグレードを実行する前にサービスを検証し、ドメイン内の廃止されたサービス、サポートされているデータベース、およびサポートされているオペレーティングシステムについて確認します。

5. **【開始】** をクリックします。
【ようこそ】 ページが表示されます。
6. **【次へ】** をクリックします。
【インストールディレクトリ】 ページが表示されます。
7. 現在のインストールディレクトリを入力します。
8. **【次へ】** をクリックします。
【ドメインおよびノードの設定】 ページが表示されます。
9. 次のドメイン情報を入力します。

プロパティ	説明
ドメイン名	ドメインの名前。
ゲートウェイノードのホスト名	ドメインのゲートウェイノードをホストするマシンのホスト名です。
ゲートウェイノードのポート名	ゲートウェイノードのポート番号。
ドメインユーザー名	ドメイン管理者のユーザー名。
ドメインのパスワード	ドメイン管理者のパスワードです。

10. **【次へ】** をクリックします。
【Informatica Upgrade Advisor のサマリ】 ページが表示されます。
11. Advisor の結果をログファイル (Summary_<timestamp>.log) で確認します。
12. **【完了】** をクリックして、Informatica Upgrade Advisor を閉じます。

第 5 章

アップグレードの準備

この章では、以下の項目について説明します。

- [データトランスフォーメーションファイルのバックアップ, 31 ページ](#)
- [PowerCenter リポジトリの準備, 32 ページ](#)
- [モデルリポジトリの準備, 32 ページ](#)
- [データ統合サービスの準備, 32 ページ](#)
- [Profiling ウェアハウスの準備, 32 ページ](#)
- [参照データのディレクトリの準備, 33 ページ](#)
- [Metadata Manager の準備, 33 ページ](#)
- [Business Glossary の準備, 34 ページ](#)
- [データベースのバックアップ, 34 ページ](#)
- [Informatica Cassandra ODBC ドライバ用の odbc.ini ファイルのバックアップ, 34 ページ](#)
- [ドメインの準備, 34 ページ](#)

データトランスフォーメーションファイルのバックアップ

アップグレードの前に、以前のバージョンで作成されたデータトランスフォーメーションファイルをバックアップする必要があります。アップグレードの完了後、新しいインストールディレクトリにファイルをコピーして、以前のバージョンと同じカスタムグローバルコンポーネントを取得します。

以下の表に、バックアップする必要があるファイルまたはディレクトリを示します。

ファイルまたはディレクトリ	デフォルトの場所
リポジトリ	<Informatica installation directory>\DataTransformation\ServiceDB
カスタムグローバルコンポーネントディレクトリ (TGP ファイル)	<Informatica installation directory>\DataTransformation\autoInclude\user

ファイルまたはディレクトリ	デフォルトの場所
カスタムグローバルコンポーネントディレクトリ (DLL および JAR ファイル)	<Informatica installation directory>\DataTransformation\externLibs\user
構成ファイル	<Informatica installation directory>\DataTransformation\CMConfig.xml
ライセンスファイル	<Informatica installation directory>\DataTransformation\CDELICENSE.cfg

Data Transformation のライブラリファイルはコピーしないでください。代わりに、Data Transformation のライブラリを再度インストールします。

PowerCenter リポジトリの準備

ドメインをアップグレードする前に、PowerCenter リポジトリをバックアップします。

PowerCenter リポジトリをバックアップするには、Administrator ツールの PowerCenter リポジトリサービスを選択します。[ドメインアクション] メニューで、[リポジトリコンテンツ] > [バックアップ] を選択します。

モデルリポジトリの準備

ドメインをアップグレードする前に、モデルリポジトリをバックアップします。

各モデルリポジトリをバックアップするには、Administrator ツールで Model Repository サービスを選択します。次に、[ドメインアクション] メニューで、[リポジトリコンテンツ] > [バックアップ] の順に選択します。

データ統合サービスの準備

ドメインをアップグレードする前に、すべての実行中のジョブが完了していることを確認します。データ統合サービスは、アップグレードプロセス中にユーザーが中断したワークフローをリカバリできません。

Profiling ウェアハウスの準備

ドメインをアップグレードする前に、プロファイリングウェアハウスをバックアップします。

ネイティブデータベースバックアップオプションを使用して、プロファイリングウェアハウスをバックアップします。

参照データのディレクトリの準備

参照データファイルをデフォルト以外のディレクトリにインストールまたはコピーする場合は、アップグレードする前にディレクトリをバックアップします。

参照データファイルをインストールディレクトリ構造の外部のディレクトリにインストールまたはコピーする場合、ディレクトリをバックアップする必要はありません。

デフォルトでは、アップグレード操作によって以下の参照データディレクトリの内容が保持されます。

- <Informatica installation directory>/services/DQContent/INFA_Content/dictionaries/
参照ディクショナリファイルの親ディレクトリ。
- <Informatica installation directory>/services/DQContent/INFA_Content/av/
アドレス参照データファイルの親ディレクトリ。
- <Informatica installation directory>/services/DQContent/INFA_Content/identity/
ID ポピュレーションデータファイルの親ディレクトリ。

アップグレード後にディレクトリ構造にディレクトリをリストアできるように、ディレクトリの場所を記録します。

Metadata Manager の準備

ドメインをアップグレードする前に、Metadata Manager を準備します。

1. Metadata Manager ウェアハウスをバックアップします。
2. Metadata Manager サービスを無効にします。
3. Metadata Manager プロパティファイルをバックアップします。

Metadata Manager ウェアハウスのバックアップ

ドメインをアップグレードする前に、Metadata Manager ウェアハウスをバックアップします。

ネイティブのデータベースバックアップオプションを使用するか、または Metadata Manager の mmRepoCmd というコマンドラインプログラムを使用して、Metadata Manager ウェアハウスをバックアップします。

mmRepoCmd には、Metadata Manager ウェアハウスをバックアップおよびリストアするためのコマンドが含まれます。mmRepoCmd は次のディレクトリにあります。

<Informatica services installation directory>\services\MetadataManagerService\utilities\mmrepocmd

Metadata Manager ウェアハウスをバックアップするには、mmRepoCmd backupRepository コマンドを使用します。backupRepository コマンドでは、以下の構文を使用します。

```
mmRepoCmd backupRepository
[<-dn|--domainName> domainName]
[<-hp|--gateway> gateway_host1:port gateway_host2:port...]
[<-mm|--mmServiceName> mmServiceName]
<<-url> http(s)://<host>:<port>
<<-u|--user> user>
[-ep|--encryptedPassword]
[-pw|--password> password]
[<-n|--namespace> namespace]
[<-kt|--keyTab> keyTab]
<<-f|--file> file>
[<-nt|--numThreads> numThreads]
```

Metadata Manager プロパティファイルのバックアップ

ドメインをアップグレードする前に、Metadata Manager プロパティファイルをバックアップします。

imm.properties ファイルは次のディレクトリにあります。

<Informatica のインストールディレクトリ>\services\shared\jars\pc\classes

Business Glossary の準備

ドメインをアップグレードする前に、現在進行中のすべての承認ワークフローを完了します。

ドメインをアップグレードする前に承認ワークフローを完了しない場合は、アップグレード後にレベル 1 承認のキャンセルのみを実行できます。他の投票間隔では、アップグレード後に実行できるアクションはありません。

データベースのバックアップ

ドメインをアップグレードする前に、プロファイリングウェアハウス、参照データウェアハウス、およびワークフローデータベースをバックアップします。

Informatica Cassandra ODBC ドライバ用の odbc.ini ファイルのバックアップ

バージョン 10.2.1 では、Informatica が Cassandra ODBC ファイルをアップグレードします。

アップグレードする前に、次の場所にある odbc.ini ファイルをバックアップする必要があります。

<Informatica installation directory>/tools/cassandra/lib

ドメインの準備

ドメインをアップグレードする前に、ドメインを準備するための手順を実行します。

Verify Database User Account Requirements

Perform the following tasks for the domain configuration repository database:

- Set the OPEN_CURSORS parameter to 4000 or higher.
- Set permissions on the view \$parameter in the Oracle database.
- Set the privileges to run *show parameter open_cursors* in the Oracle database.

When you run the pre-installation (i10Pi) system check tool, i10Pi runs the command against the database to identify the OPEN_CURSORS parameter with the domain database user credentials.

You can run the following query to determine the open cursors setting for the domain database user account:

```
SELECT VALUE OPEN_CURSORS FROM V$PARAMETER WHERE UPPER(NAME)=UPPER('OPEN_CURSORS')
```

- Set the DynamicSections parameter to 3000 or higher in the IBM DB2 database.
DynamicSections のデフォルト値は、Informatica リポジトリに対して低すぎます。Informatica では、デフォルトよりも大きい DB2 パッケージが必要となります。ドメイン環境設定リポジトリ、またはモデルリポジトリの DB2 データベースを設定する場合、DynamicSections パラメータを少なくとも 3000 以上に設定する必要があります。DynamicSections パラメータがこれよりも低い数値に設定されている場合、Informatica サービスのインストール時または実行時に問題が発生する可能性があります。

ドメインのシャットダウン

ドメインをシャットダウンする前に、すべてのアプリケーションサービスを停止できます。ドメインをバックアップしてからアップグレードする前に、ドメインをシャットダウンする必要があります。

ドメインをシャットダウンするには、ドメイン内の各ノード上で Informatica サービスプロセスを停止します。

サポートされている環境に応じて、次のいずれかの方法を使用して、各ノードの Informatica サービスプロセスを停止できます。

- Informatica を Windows の [スタート] メニューから停止するには、[プログラム] > [Informatica[バージョン]] > [サーバー] > [Informatica サービスの停止] の順にクリックします。
- UNIX 上で Informatica を停止するには、*infaservice* コマンドを使用します。デフォルトでは、実行可能ファイル *infaservice* は次のディレクトリにインストールされています。

```
<Informatica installation directory>/tomcat/bin
```

デーモンを停止するには次のコマンドを入力します。

```
infaservice shutdown
```

サポートされている環境に応じて、Windows のコントロールパネルまたは Administrator ツールから Informatica サービスを停止することもできます。

ドメインのバックアップ

ドメインをアップグレードする前に、ドメインの設定メタデータをバックアップする必要があります。

ドメインをバックアップするには、次の手順を実行します。

- *infasetup BackupDomain* コマンドを実行して、ドメイン環境設定データベーステーブルをファイルにバックアップします。
- メタデータコンフィギュレーションファイルを、Informatica をインストールしているマシンからアクセス可能な任意のディレクトリにバックアップします。

Informatica *infasetup* には、ドメインのバックアップとリストアを行うためのコマンドラインプログラムが含まれています。*infasetup* は、以下のディレクトリにあります。

```
<Informatica installation directory>/isp/bin
```

infasetup を使用してドメインをバックアップするには、以下の構文を使用します。

```
BackupDomain
```

```
<<-DatabaseAddress|-da> database_hostname:database_port|
```

```
<-DatabaseConnectionString|-cs> database_connection_string>
```

```
<-DatabaseUserName|-du> database_user_name
```

```

<-DatabasePassword|-dp> database_password
<-DatabaseType|-dt> database_type
[<-DatabaseServiceName|-ds> database_service_name]
<-BackupFile|-bf> backup_file_name
[<-Force|-f>]
<-DomainName|-dn> domain_name
[<-Tablespace|-ts> tablespace_name (used for IBM DB2 only)]
[<-SchemaName|-sc> schema_name (used for Microsoft SQL Server only)]
[<-DatabaseTlsEnabled|-dbtls> database_tls_enabled]
[<-DatabaseTruststorePassword|-dbtp> database_truststore_password]
[<-TrustedConnection|-tc> trusted_connection (used for Microsoft SQL Server only)]
[<-EncryptionKeyLocation|-kl> encryption_key_location]

```

メタデータコンフィギュレーションファイルを、Informatica をインストールしているマシンからアクセス可能な任意のディレクトリにバックアップします。以下の表は、メタデータファイルと、その場所を示します。

メタデータファイル	説明	場所
nodemeta.xml	ノードのメタデータが含まれます。	ドメイン内の各ノード上の <code>isp/config</code> ディレクトリに格納されます。すべてのノードで同じバックアップディレクトリ名を使用する場合、バックアップ場所にコピーする前に <code>nodemeta.xml</code> の名前を変更します。たとえば、 <code>nodemeta.xml</code> を、ノード A とノード B の <code>/nodebak</code> ディレクトリにバックアップするとします。ノード A の場合、ファイルが <code>/nodebak/nodemeta_A.xml</code> に、ノード B の場合、 <code>/nodebak/nodemeta_B.xml</code> にバックアップされるように、コンフィギュレーションファイルの名前を変更します。
domains.infa	ゲートウェイノードの接続情報が含まれます。	次のいずれかの場所に格納されます。 - クライアントおよびサーバーマシン上の Informatica インストールディレクトリ。 - <code>INFA_DOMAINS_FILE</code> 環境変数で設定されている場所。

第 6 章

ドメインのアップグレード

この章では、以下の項目について説明します。

- [ドメインのアップグレードの概要, 37 ページ](#)
- [Upgrading in Graphical Mode, 37 ページ](#)
- [コンソールモードでのアップグレード, 46 ページ](#)
- [サイレントモードでのアップグレード, 48 ページ](#)
- [ドメインアップグレードのトラブルシューティング, 51 ページ](#)

ドメインのアップグレードの概要

以前のバージョンの Informatica サービスのドメインをアップグレードするには、サーバーインストーラを使用します。サーバーインストーラのドメインアップグレードウィザードを使用してアップグレードプロセスを実行できます。

アップグレードウィザードによって、指定したインストールディレクトリに Informatica がインストールされます。以前のバージョンのディレクトリにあるファイルは変更されません。

アップグレードウィザードが旧バージョンのファイルからドメイン情報を読み取り、同じ設定を使用してドメインとサーバーファイルを設定してアップグレードを行います。以前のバージョンと同じデータベースのドメイン環境設定リポジトリのテーブルがアップグレードされます。

アップグレードを開始する前にアップグレード前のタスクを完了します。アップグレードする Informatica の以前のバージョンをホストするすべてのマシンでインストーラを実行します。

注: 複数ノードのドメインでは、マスタゲートウェイノードをアップグレードした後でその他のノードをアップグレードしてください。

インストールファイルのダウンロード元であるディレクトリのルートからアップグレードを実行できます。

ドメインをアップグレードした後、Informatica クライアントツールを同じ Informatica バージョンにアップグレードします。

Upgrading in Graphical Mode

You can upgrade in graphical mode to upgrade the domain on the same machine and on the same domain configuration repository database. You can upgrade the domain in graphical mode on Windows.

On Windows, if you encounter problems when you run the install.bat file from the root directory, run the following file:

<Informatica installation directory>/server/install.exe

1. 以前のバージョンのインストールに使用したユーザーアカウントでマシンにログインします。
2. アップグレードする Informatica 製品のディレクトリおよびサブディレクトリにアクセスするプロセスを、コマンドプロンプトおよび tail log を含めてすべて停止します。
3. インストールファイルがあるディレクトリのルートに移動して、管理者として install.bat を実行します。

管理者としてファイルを実行するには、install.bat ファイルを右クリックして[管理者として実行]を選択します。

Windows でルートディレクトリから install.bat ファイルを実行して問題が発生した場合、次のファイルを実行します。

<Informatica installation directory>/server/install.exe

注: 管理者としてインストーラを実行しないと、Windows システム管理者は、Informatica インストールディレクトリのファイルにアクセスするときに問題が生じることがあります。

[Informatica 10.4.0] ページが表示されます。

4. Select **Upgrade to Informatica 10.4.0**.

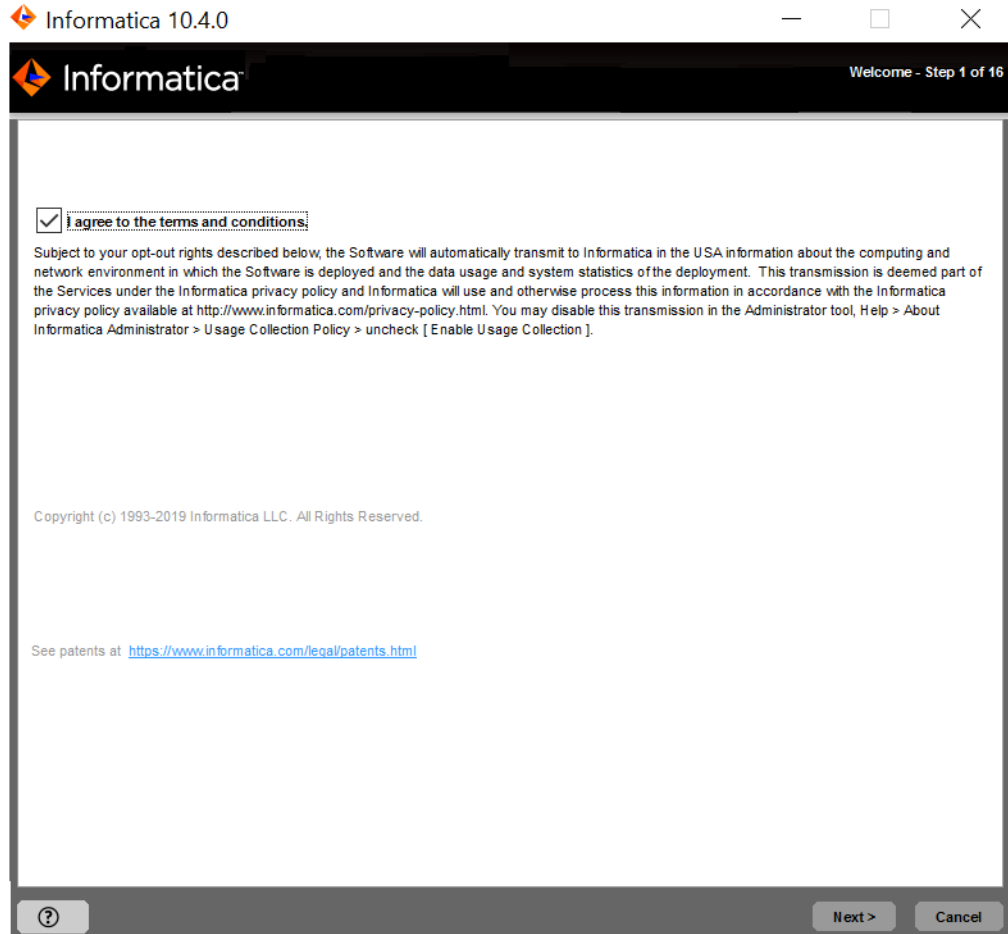


Informatica provides utilities to facilitate the Informatica services installation process. You must run the following utility before you install Informatica services:

Informatica Upgrade Advisor.

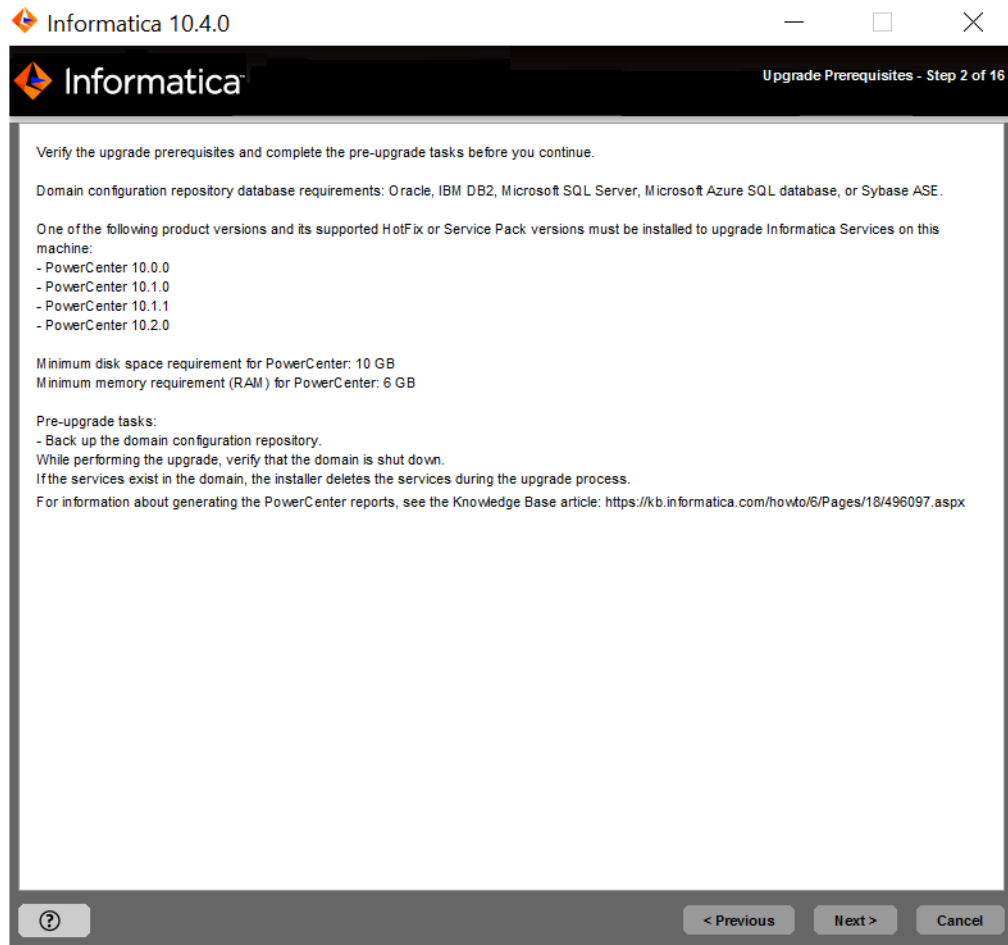
Validates the services and checks for obsolete services in the domain before you perform an upgrade. For more information about the Informatica Upgrade Advisor, see [「Informatica Upgrade Advisor を実行します」 \(ページ 30\)](#).

5. Click **Start**.
6. Read the terms and conditions of Informatica product usage toolkit and select **I agree to the terms and conditions**.



Informatica DiscoveryIQ は、データの使用とシステム統計のルーチンレポートを Informatica に送信する製品使用ツールです。Informatica DiscoveryIQ は、Informatica ドメインをインストールして設定してから 15 分後に、データを Informatica にアップロードします。その後、ドメインはデータを 30 日ごとに送信します。Administrator ツールから使用統計を無効にすることを選択できます。

7. The **Upgrade Prerequisites** page appears.



Verify the requirements before you continue the upgrade.

8. Click **Next**.

The **Upgrade Directory** page appears.

9. Enter the directory of the Informatica version you want to upgrade and the directory in which you want to install Informatica 10.4.0

The following table describes the directories that you must specify:

ディレクトリ	説明
アップグレードする Informatica 製品のディレクトリ	アップグレードする Informatica サービスのバージョンを含むディレクトリ。
Informatica 10.4.0 のディレクトリ	<p>Informatica 10.4.0 のインストール先にするディレクトリ。</p> <p>インストールディレクトリへの絶対パスを入力します。以前のバージョンの Informatica サービスを含むディレクトリと同じディレクトリは使用できません。また、パスのディレクトリ名にスペースまたは次の特殊文字を含めることはできません。@ * \$ # ! % () { } [] , ; ' "</p> <p>注: インストールディレクトリパスには、英数字を使用することを推奨します。á や € などの特殊文字を使用すると、実行時に予期しない結果が生じることがあります。</p> <p>Windows の場合、インストールディレクトリが、現在のマシンに存在する必要があります。</p>

10. Verify that the **Allow changes to the node host name and port numbers** option is not selected.

11. Click **Next**.

The **Domain Security - Encryption Key** page appears.

12. Enter the directory for the encryption key for the Informatica domain.

Informatica uses an encryption key to secure sensitive data, such as passwords, that are stored in the Informatica domain. When you upgrade, you must enter the directory in which to store the encryption key on the node that you are upgrading.

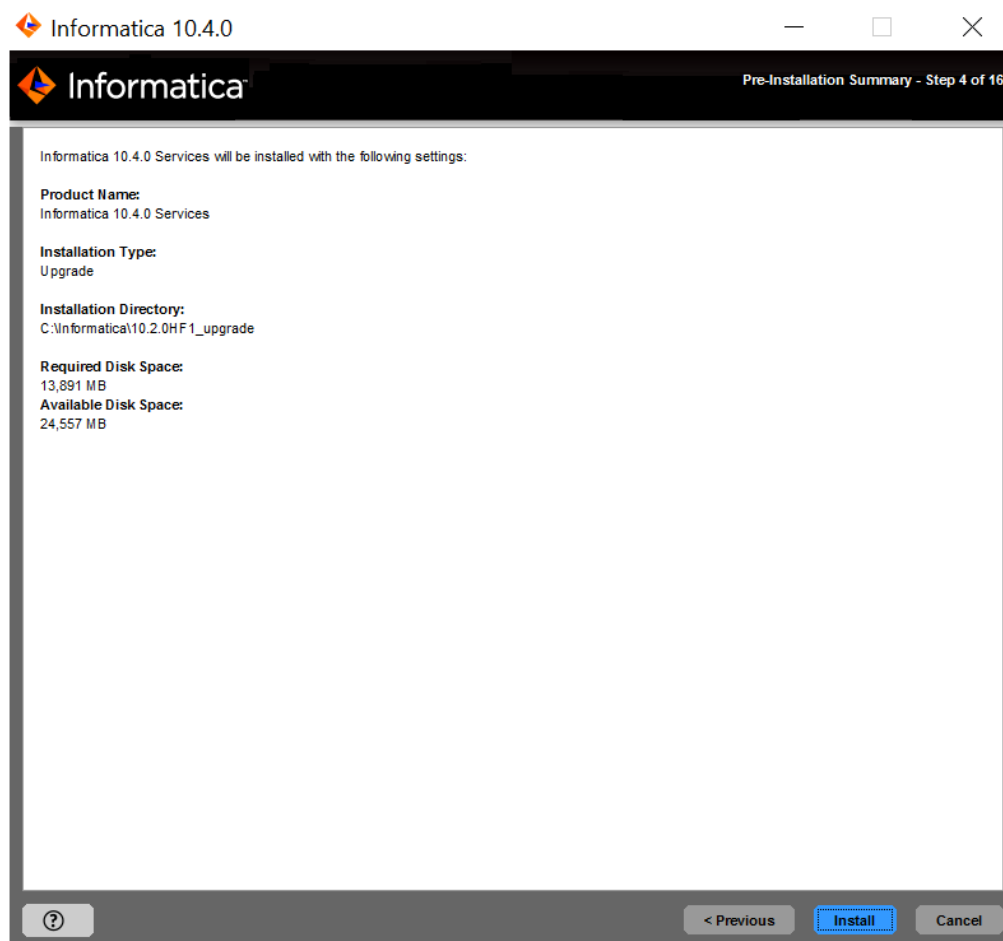
注: All nodes in an Informatica domain use the same keyword and encryption key. You must keep the name of the domain, the keyword for the encryption key, and the encryption key file in a secure location. The encryption key is required when you change the encryption key of the domain or move a repository to another domain.

Property	Description
Encryption key directory	Directory in which to store the encryption key for the domain. By default, the encryption key is created in the following directory: <Informatica installation directory>/isp/config/keys .

13. Enter the user name and password for the informatica domain.

14. Click **Next**.

The **Pre-Installation Summary** page appears.



15. Review the upgrade information, and click **Install** to continue.

The upgrade wizard installs the Informatica server files to the Informatica 10.4.0 installation directory.

The upgrade wizard displays a warning to shut down the Informatica domain before you continue the upgrade.

16. Click **OK**.

The **Domain Configuration Repository Upgrade** page appears.

Informatica Domain Configuration Repository Upgrade - Step 5A of 8

Configure the database for the domain configuration repository.

Database type:

Database user ID:

User password:

Database connection

☒ Enter the JDBC connect string.

If you are upgrading a gateway node, the upgrade wizard displays the database and user account information for the domain configuration repository to be upgraded.

If you are upgrading a worker node, the upgrade wizard does not display the domain configuration repository information. You cannot modify the database connection information.

The following table describes the properties that the installer displays for the domain configuration repository:

プロパティ	説明
データベースタイプ	ドメイン環境設定リポジトリのデータベース。
データベースユーザー ID	ドメイン環境設定リポジトリのデータベースユーザーアカウント。
ユーザーパスワード	データベースユーザーアカウントのパスワード。

The upgrade wizard displays the database connection string for the domain configuration repository based on how the connection string of the previous version was created at installation:

- If the previous version used a JDBC URL at installation, the upgrade wizard displays the JDBC connection properties, including the database address and service name.

Optionally, you can specify additional JDBC parameters to include in the JDBC URL. To provide additional JDBC parameters, select JDBC parameters and enter a valid JDBC parameter string.

- If the previous version used a custom JDBC connection string at installation, the upgrade wizard displays the custom connection string.

You cannot specify additional JDBC parameters.

17. Click **Test Connection** to verify that you can connect to the database, and then click **OK** to continue.
18. Click **Next**.

The **Windows Service Configuration** page appears.

On Windows, the upgrade wizard creates a service to start Informatica. By default, the service runs under the same user account as the account used for installation. You can run the Windows service under a different user account.

19. Select whether to run the Windows service under a different user account.

Enter the following user account information:

プロパティ	説明
別のユーザーアカウントで Informatica を実行する	別のユーザーアカウントで Windows サービスを実行するかどうかを指定します。
ユーザー名	Informatica Windows サービスを実行するユーザーアカウント。 次の形式を使用します。 <ドメイン名>\<ユーザーアカウント> このユーザーアカウントには、[オペレーティングシステムの一部として機能]権限を付与する必要があります。
パスワード	Informatica Windows サービスを実行するユーザーアカウントのパスワード。

20. Click **Next**.

The **Post-Installation Summary** page appears.

21. Click **Done** to complete the installation procedure and exit the installer.

Review the `upgrade.log` file to get more information about the tasks performed by the upgrade wizard and to view the configuration of installed components.

コンソールモードでのアップグレード

コンソールモードでは、同じマシンのドメインと同じドメイン環境設定リポジトリデータベースのドメインをアップグレードできます。ドメインをコンソールモードでアップグレードできます。

コンソールモードでインストーラを実行する場合、Quit、Back および Help という単語は予約語です。これらの単語を入力テキストで使わないでください。

1. 以前のバージョンのインストールに使用したユーザーアカウントでマシンにログインします。
2. アップグレードする Informatica 製品のディレクトリおよびサブディレクトリにアクセスするプロセスを、コマンドプロンプトおよび tail log を含めてすべて停止します。
3. シェルコマンドラインで、ルートディレクトリにあるインストールファイルを実行します。
ロケール環境変数が設定されていることを確認するよう求めるメッセージが表示されます。
4. 環境変数が設定されていない場合は、**N** キーを押してインストーラを終了し、必要に応じて環境変数を設定します。
環境変数が設定されている場合は、**Y** キーを押して続行します。
5. Informatica をアップグレードするために、**2** キーを押します。
6. オプションで、Informatica Upgrade Advisor を実行します。

Informatica には、Informatica サービスのインストールプロセスを簡単にするユーティリティがあります。Informatica サービスをアップグレードする前に、このユーティリティを実行できます。Informatica Upgrade Advisor を使用すると、アップグレードを実行する前にサービスを検証し、廃止されたサービスがドメインにないか確認しやすくなります。

アップグレードを続行する前にアップグレードする Informatica ドメインをシャットダウンするよう求める警告が表示されます。

7. Informatica 製品使用ツールキットの契約条項を読んでから **2** を押して更新を続行します。
以下のオプトアウトの権利の制限の下、本ソフトウェアによって、本ソフトウェアがデプロイされているコンピューティングおよびネットワーク環境に関する情報、デプロイメントのデータ使用状況およびシステム統計情報が米国の Informatica に自動的に送信されます。この送信は Informatica のプライバシーポリシーにおいてサービスの一部と見なされ、Informatica は、
<https://www.informatica.com/in/privacy-policy.html> のプライバシーポリシーに従って、この情報を使用または処理します。Administrator ツールで使用量コレクションを無効にできます。
8. **【アップグレードの前提条件】** ページに、アップグレードのシステム要件が表示されます。
アップグレードを続行する前に、要件を確認します。
9. プロンプトで、アップグレードする Informatica バージョンのディレクトリと、Informatica 10.4.0 をインストールするディレクトリを入力します。

次の表に、指定する必要があるディレクトリを示します。

ディレクトリ	説明
アップグレードする Informatica 製品のディレクトリ	アップグレードする Informatica サービスのバージョンを含むディレクトリ。
Informatica 10.4.0 のディレクトリ	Informatica 10.4.0 のインストール先にするディレクトリ。 インストールディレクトリへの絶対パスを入力します。以前のバージョンの Informatica サービスを含むディレクトリと同じディレクトリは使用できません。また、パスのディレクトリ名にスペースまたは次の特殊文字を含めることはできません。@ * \$#!% () {} [] , ; '。 注: インストールディレクトリパスには、英数字を使用することを推奨します。á や € などの特殊文字を使用すると、実行時に予期しない結果が生じることがあります。

10. ノードのホスト名、ポート番号、またはドメイン環境設定リポジトリを変更するかどうかを選択します。以前のバージョンと同じノード設定を使用するには、**1** キーを押します。ノード設定を変更するには、**2** キーを押します。
11. Informatica サービスをアップグレードするには、**1** キーを押します。
12. Informatica ドメインに使用する暗号化キーのディレクトリを入力します。

Informatica では、Informatica ドメインに保存される機密データ（パスワードなど）を暗号化キーを使用して保護します。アップグレードする場合は、アップグレードしているノード上の暗号化キーを保存するディレクトリを入力する必要があります。

注: Informatica ドメインのすべてのノードは、同じキーワードおよび暗号化キーを使用します。ドメイン名、暗号化キーのキーワード、および暗号化キーファイルは安全な場所に保管する必要があります。ドメインの暗号化キーを変更するときや、リポジトリを別のドメインに移すときに暗号化キーが必要になります。

プロパティ	説明
暗号化キーディレクトリ	ドメインに対する暗号化キーを格納するディレクトリです。デフォルトでは、暗号化キーは<Informatica installation directory>/isp/config/keys に作成されます。

13. Informatica ドメインのユーザー名とパスワードを入力します。
14. アップグレード情報を確認し、**Enter** キーを押して続行します。
インストーラがサーバーファイルを Informatica 10.4.0 のインストールディレクトリにコピーします。
アップグレードするドメイン環境設定リポジトリのデータベースおよびユーザーアカウントの情報が表示されます。以前のバージョンの接続文字列がインストール時に作成された方法に基づいて、ドメイン環境設定リポジトリのデータベース接続文字列が表示されます。
 - 以前のバージョンがインストール時に JDBC URL を使用した場合は、データベースのアドレスとサービス名を含む JDBC 接続プロパティが表示されます。
 - 以前のバージョンでインストール時にカスタム JDBC 接続文字列が使用された場合は、カスタム接続文字列が表示されます。
15. **Enter** キーを押します。
16. JDBC URL を使用する場合は、追加のパラメータを指定して接続文字列に含めることができます。
カスタム接続文字列を使用する場合は、追加のパラメータを指定できません。

17. **Enter** キーを押します。

【インストール後】セクションが表示されます。

18. **Enter** キーを押すと、インストール手順が完了し、インストーラが終了します。

アップグレードウィザードで実行されたタスクの詳細と、インストールされたコンポーネントの設定を確認するには、upgrade.log ファイルを参照してください。

サイレントモードでのアップグレード

サイレントモードでは、同じマシンのドメインと同じドメイン環境設定リポジトリデータベースのドメインをアップグレードできます。

ユーザーの操作なしで Informatica ドメインサービスをアップグレードするには、サイレントモードでアップグレードします。プロパティファイルを使用してアップグレードオプションを指定します。インストーラはファイルを読み込んでアップグレードオプションを確認します。サイレントモードのアップグレードを使用して、ネットワーク上の複数のマシンで Informatica ドメインサービスをアップグレードするか、マシン間でアップグレードプロセスを標準化します。

Informatica インストールファイルを、アップグレードする予定の Informatica インスタンスをホストするマシンにコピーします。

サイレントモードでアップグレードするには、以下のタスクを実行します。

1. アップグレードプロパティファイルを作成し、アップグレードオプションを指定します。
2. アップグレードプロパティファイルを使用して、インストーラを実行します。
3. アップグレードプロパティファイル内のパスワードを保護します。

プロパティファイル内のパスワードの暗号化

インストーラをサイレントモードで実行するときにオプションの指定に使用するプロパティファイルで設定するパスワードを暗号化できるユーティリティが、インストーラには含まれています。Informatica では、複数の 128 ビットキーを含む AES 暗号化を使用してパスワードを暗号化します。

ユーティリティは、暗号化するパスワードごとに実行します。ユーティリティを実行するときは、パスワードの値をコマンドプロンプトでプレーンテキストで指定します。ユーティリティは、暗号化された形式のパスワードを出力として生成します。出力には次のプレフィックスが含まれます。=INSTALLER:CIPHER:AES:128=

プレフィックスを含む完全な出力文字列をコピーして、パスワードプロパティの値としてプロパティファイル内に貼り付けます。インストーラをサイレントモードで実行すると、インストールフレームワークによってパスワードが復号化されます。

1. 以下のユーティリティのディレクトリに移動します。

<Installer directory>/properties/utils/passwd_encryption

2. ユーティリティを実行します。<password>の値として暗号化するプレーンテキストのパスワードを指定します。

- Linux および UNIX では、次のコマンドを実行します。

sh install.sh <password>

- Windows では、次のコマンドを実行します。

install.bat <password>

3. 暗号化されたパスワード文字列を出力からコピーして、対応するパスワードの値として、properties ファイルに貼り付けます。

次の例は、DOMAIN_PSSWD プロパティの値として設定された、暗号化されたパスワードを示しています。

```
DOMAIN_PSSWD==INSTALLER:CIPHER:AES:128=mjkjmdR2kzFJizfRWIOPg==
```

プロパティファイルの作成

Informatica には、2 つのバージョンのプロパティファイルがあります。いずれかのファイルを使用して、インストールのオプションを指定します。

サイレント入力アップグレード新規設定プロパティファイル

ノード設定を変更し、ユーザーの操作なしで Informatica ドメインサービスをアップグレードするには、サイレント入力アップグレード新規設定プロパティファイルを使用します。

サイレント入力アップグレード新規設定プロパティファイルには、Informatica ドメインサービスをサイレントモードでアップグレードするために必要な設定プロパティが含まれています。ファイルの各プロパティに設定する適切な値を検討する場合はこのファイルを使用します。

デフォルトサイレント入力アップグレードプロパティファイル

ユーザーの操作なしで Informatica ドメインサービスをアップグレードするには、サイレント入力アップグレードプロパティファイルを使用します。

デフォルトのサイレント入力プロパティファイルには、多数の設定プロパティ用のデフォルト値が含まれます。デフォルトのプロパティ値を使用して Informatica ドメインサービスをアップグレードする予定で、ファイル内のすべてのプロパティには目を通さない場合は、このファイルを使用します。

Informatica は、インストーラに必要なアップグレードパラメータを含むサンプルのプロパティファイルを提供します。サンプルのプロパティファイルをカスタマイズして、アップグレードのオプションを指定できます。

サンプルのアップグレードプロパティファイルは SilentInput_upgrade.properties という名前で、インストーラのダウンロード場所にあります。ファイルをカスタマイズした後、SilentInput.properties というファイル名で保存します。

1. インストールファイルを含むディレクトリのルートに移動します。
2. SilentInput_upgrade.properties という名前のファイルを検索します。
そのファイルをバックアップしてから変更します。
3. テキストエディタを使用してファイルを開き、アップグレードパラメータの値を変更します。

以下の表に、変更可能なアップグレードパラメータを示します。

プロパティ名	説明
INSTALL_TYPE	Informatica をインストールするか、アップグレードするかを指定します。 値が 0 の場合、インストーラは Informatica の新規インストールを実行します。値が 1 の場合、インストーラは以前のバージョンの Informatica をアップグレードします。
USER_INSTALL_DIR	新しいバージョンの Informatica サービスをインストールするディレクトリ。以前のバージョンの Informatica サービスが存在するディレクトリと同じディレクトリは使用できません。

プロパティ名	説明
UPG_BACKUP_DIR	アップグレードする Informatica サービスの以前のバージョンを含むディレクトリ。
KEY_DEST_LOCATION	このインストールで作成されたノードの暗号化キーを格納するディレクトリ。
DOMAIN_USER	Informatica ドメインのユーザー名。
DOMAIN_PSSWD	Informatica ドメインのパスワード。
ENABLE_USAGE_COLLECTION	Informatica DiscoveryIQ を有効にします。これは、データの使用状況とシステムの統計値に関するレポートを定期的に Informatica に送信する製品使用状況ツールです。Informatica DiscoveryIQ は、Informatica ドメインをインストールして設定してから 15 分後に、データを Informatica にアップロードします。その後、ドメインはデータを 30 日ごとに送信します。使用統計値を Informatica に送信しないことを選択できます。使用統計の送信を無効にする方法の詳細については、『 <i>Informatica Administrator ガイド</i> 』を参照してください。アップグレードするには、値を 1 に設定する必要があります。

4. プロパティファイルを「SilentInput.properties」という名前で保存します。

サイレントインストーラの実行

プロパティファイルを作成したら、コマンドプロンプトを開いてサイレントアップグレードを開始します。

1. コマンドプロンプトを開きます。

Windows で、管理者としてコマンドプロンプトを開きます。管理者としてコマンドプロンプトを開かないと、Windows システム管理者は、Informatica インストールディレクトリのファイルにアクセスするときに問題が生じることがあります。

2. サーバーインストーラディレクトリのルートに移動します。
3. ディレクトリにアップグレードオプションを含む SilentInput.properties ファイルが保存されていることを確認します。
4. サイレントインストール実行可能ファイルを実行します。

サイレントアップグレードがバックグラウンドで実行されます。プロセスにしばらく時間がかかる場合があります。Informatica_<Version>_Services_InstallLog<timestamp>.log がインストールディレクトリに作成されると、サイレントアップグレードプロセスは完了です。

サイレントアップグレードは、プロパティファイルが正しく設定されない場合、または、インストールディレクトリにアクセスできない場合に失敗します。アップグレードが失敗した場合は、サイレントアップグレードログファイルを表示して、エラーを修正します。次に、サイレントインストーラを再実行します。サイレントアップグレードログファイルの名前は silentErrorLog.log です。

このインストーラは、Windows ではルートディレクトリに、UNIX ではユーザーホームディレクトリにログファイルを作成します。

ドメインアップグレードのトラブルシューティング

アップグレードが正常に完了しない場合は、ログファイルを調べて障害の原因を特定します。アップグレードログファイルは、新しいバージョンの Informatica がインストールされているディレクトリのルートにあります。次のログファイルを確認します。Informatica_<Version>_Services_Upgrade.log

アップグレードが失敗した場合は、バックアップからドメイン環境設定リポジトリデータベースをリストアし、インストーラを再度実行します。

安全な通信のために Administrator ツールが設定されている場合、Administrator ツールにアクセスしたときに、404 Not Found メッセージが表示される場合があります。この問題は、ゲートウェイノードを実行しているマシンが、Administrator ツールへの HTTPS 接続に使用されているキーストアファイルにアクセスできない場合に発生します。キーストアファイルをアクセス可能な場所にコピーしてから、ドメインをシャットダウンします。infasetup UpdateGatewayNode コマンドを実行して、キーストアファイルの場所を使用してゲートウェイノードを更新します。ドメイン内の各ゲートウェイノード上でコマンドを実行する必要があります。

第 7 章

ノード設定の変更を伴うドメインのアップグレード

この章では、以下の項目について説明します。

- [ノード設定の変更を伴うドメインのアップグレードの概要, 52 ページ](#)
- [別のデータベースへの移行, 53 ページ](#)
- [別のマシンへのインストールの移行, 53 ページ](#)
- [グラフィカルモードでのアップグレード, 57 ページ](#)
- [コンソールモードでのアップグレード, 68 ページ](#)
- [サイレントモードでのアップグレード, 73 ページ](#)
- [ノード設定の変更の完了, 74 ページ](#)

ノード設定の変更を伴うドメインのアップグレードの概要

ノード設定の変更を伴うドメインのアップグレードを行う前に、アップグレードの準備として以下の手順を実行する必要があります。ノード設定にどのような変更を行うかによって、実行する手順は異なります。ドメイン環境設定リポジトリを別のデータベースに移行できます。または、Informatica サービスのインストールを別のマシンに移行できます。

ドメインをアップグレードする場合は、ノードホスト名、ポート番号、またはドメイン環境設定リポジトリデータベースへの変更を許可するようにノード設定を変更できます。

Informatica サービスのインストールを別のマシンに移行した場合は、ドメインをアップグレードして新しいマシンのノードを設定するようにノード設定を変更します。ドメイン環境設定リポジトリを別のデータベースに移行した場合は、ドメインをアップグレードして新しいデータベースを設定するようにノード設定を変更します。

インストーラを実行する前にアップグレード前のタスクを完了します。

Windows では、グラフィカルモードまたはサイレントモードでインストーラを実行できます。UNIX または Linux では、コンソールモードまたはサイレントモードでインストーラを実行できます。

別のデータベースへの移行

ドメイン環境設定リポジトリのデータベースのタイプまたはバージョンのサポートが終了した場合は、リポジトリを別のデータベースに移行する必要があります。ドメインをアップグレードする前に、以前の Informatica インスタンスのリポジトリを移行します。

例えば、ドメイン環境設定リポジトリが Sybase ASE 15.0.3 データベースにある場合は、Sybase ASE 15.7 データベースにそのリポジトリを移行します。

製品要件およびサポート対象プラットフォームの詳細については、次の Informatica Network で Product Availability Matrix を参照してください。

<https://network.informatica.com/community/informatica-network/product-availability-matrices>

1. ドメインがシャットダウンされていることを確認します。
2. infasetup BackupDomain コマンドを使用して、ドメイン環境設定データベーステーブルがファイルにバックアップされていることを確認します。
3. データベーススキーマとユーザーアカウントをサポートされるデータベース中に作成します。
4. infasetup RestoreDomain コマンドを使用して、バックアップファイル中のドメイン環境設定を指定したデータベーススキーマにリストアします。
5. ゲートウェイノードをアップグレードする場合は、**【ノードのホスト名とポート番号の変更を許可する】** オプションを選択します。このオプションを選択すると、新しいドメイン環境設定リポジトリデータベースに接続するようにゲートウェイノードを設定できます。すべてのゲートウェイノードには、ドメイン環境設定を取得および更新するためのドメイン環境設定リポジトリへの接続が必要です。作業ノードをアップグレードする場合は、**【ノードのホスト名とポート番号の変更を許可する】** オプションをオフにします。

別のマシンへのインストールの移行

サポートが終了しているオペレーティングシステムのマシンに Informatica サービスがインストールされている場合、ドメインをアップグレードする前に、別のマシンにそのインストールを移行する必要があります。

製品要件およびサポート対象プラットフォームの詳細については、次の Informatica Network で Product Availability Matrix を参照してください。

<https://network.informatica.com/community/informatica-network/product-availability-matrices>

ドメインをアップグレードする前に、新しいバージョンの Informatica を実行するマシン上で、次の手順を実行します。

1. インストールディレクトリをコピーします。
2. ポート要件を確認します。
3. システムユーザーアカウントを作成します。
4. データベースへのアクセスを必要とするすべてのサービスのネイティブ接続を構成します。

移行したノードをアップグレードする場合は、**【ノードのホスト名とポート番号の変更を許可する】** オプションを選択します。このオプションを選択すると、新しいマシンのノードの設定を更新できます。別のマシンに移行しなかったドメイン内の他のノードをアップグレードする場合は、**【ノードのホスト名とポート番号の変更を許可する】** オプションをオフにします。

手順 1. インストールディレクトリのコピー

以前のバージョンの Informatica のディレクトリを、新しいバージョンの Informatica を実行するマシンにコピーします。

例えば、以前のバージョンの Informatica が C:\Informatica\<version> にインストールされている場合、C:\Informatica\<version> ディレクトリとサブディレクトリを新しいマシンにコピーします。

アップグレードインストーラを実行するとき、新しいマシン上の Informatica インストールディレクトリを、アップグレード対象のディレクトリとして指定します。

手順 2. ポート要件の確認

インストーラによって Informatica ドメイン内のコンポーネントのポートが設定され、一部のアプリケーションサービスに使用する動的ポートの範囲が指定されます。

コンポーネントに使用するポート番号と、アプリケーションサービスに使用する動的ポート番号の範囲を指定することができます。あるいは、インストーラによって提供されるデフォルトのポート番号を使用することができます。ポート番号が Informatica サービスをインストールするマシンで利用可能かどうかを確認します。

以下の表に、設定できるポートを示します。

ポート	説明
サービスマネージャポート	ノードのサービスマネージャが使用するポート番号。サービスマネージャは、このポートで受信する接続要求をリスンします。クライアントアプリケーションは、このポートを使用してドメインのサービスと通信します。Informatica コマンドラインプログラムは、このポートを使用して、ドメインと通信します。このポートは、SQL データサービスの JDBC/ODBC ドライバ用のポートでもあります。デフォルトは 6006 です。
サービスマネージャのシャットダウンポート	ドメインのサービスマネージャに対するサーバーのシャットダウンを制御するポート番号。サービスマネージャは、このポートでシャットダウンコマンドをリスンします。デフォルトは 6007 です。
Informatica Administrator ポート	Informatica Administrator が使用するポート番号。デフォルトは 6008 です。
Informatica Administrator HTTPS ポート	デフォルトポートはありません。サービスの作成時に必要なポート番号を入力します。このポートを 0 に設定すると、管理者ツールへの HTTPS 接続が無効になります。
Informatica Administrator シャットダウンポート	Informatica Administrator のサーバーシャットダウンを制御するポート番号。Informatica Administrator は、このポートでシャットダウンコマンドをリスンします。デフォルトは 6009 です。
最小ポート番号	このノードで実行するアプリケーションサービスプロセスに割り当てられる動的ポート番号範囲の最小ポート番号。デフォルトは 6014 です。
最大ポート番号	このノードで実行するアプリケーションサービスプロセスに割り当てられる動的ポート番号範囲の最大ポート番号。デフォルトは 6114 です。

注: ポートの競合がある場合、サービスおよびノードは起動に失敗する場合があります。アップグレード後に、アプリケーションサービスのポートの範囲を更新することができます。

Step 3. Create a System User Account

You can create a system user account on Windows or on UNIX.

On Windows

システムユーザーアカウントを作成し、インストールを行ってから Informatica サービスを実行します。Informatica サービスのインストールに使用するユーザーアカウントに、インストールディレクトリに対する書き込み権限があることを確認します。

マシンにログインしたユーザーアカウントを使用して Informatica をインストールし、別のユーザーアカウントで実行することができます。ローカルアカウントまたはドメインアカウントを作成して、Informatica をインストールするか、または Informatica Windows サービスを実行することができます。

注: Windows の信頼関係接続を使用する Microsoft SQL Server 上のリポジトリにアクセスするには、ドメインアカウントを作成します。

ユーザーアカウントは、インストーラを実行するための、または Informatica Windows サービスを実行するための以下の権限が必要になります。

- **ログインユーザーアカウント。**このユーザーアカウントは、管理者グループのメンバであり、サービスとしてログオン権限が必要です。Informatica をインストールする前に、このユーザーアカウントを使用してログインします。
- **別のユーザーアカウント。**このユーザーアカウントは、管理者グループのメンバであり、サービスとしてログオン、およびオペレーティングシステムの一部として機能の権限が必要です。Informatica をインストールする前に、このユーザーアカウントを使用してログインする必要はありません。インストール中に、Informatica Windows サービスを実行するユーザーアカウントを指定することができます。

On UNIX

Informatica のインストールに使用するユーザーアカウントに、インストールディレクトリに対する書き込み権限があることを確認します。

手順 4。サービスマシンへのネイティブ接続の設定

アプリケーションサービスとデータベース間にネイティブ接続を確立するには、アクセスするデータベースのデータベースクライアントソフトウェアをインストールします。

ネイティブドライバは、データベースサーバーおよびクライアントソフトウェアにパッケージ化されています。データベースにアクセスする必要があるマシンに接続を設定します。アプリケーションサービスとデータベース間の互換性を確認するには、データベースバージョンと互換性のあるクライアントソフトウェアをインストールし、適切なデータベースクライアントライブラリを使用します。

データ統合サービスは、ネイティブデータベースドライバを使って次のデータベースに接続します。

- ソースデータベースとターゲットデータベース。ソースデータベースからデータを読み取って、ターゲットデータベースに書き込みます。
- データオブジェクトキャッシュデータベース。データオブジェクトキャッシュを保存します。
- Profiling ソースデータベース。リレーショナルソースデータベースから読み取って、プロファイルソースに対して実行します。
- プロファイリングウェアハウス。プロファイリング結果をプロファイリングウェアハウスに書き込みます。
- 参照テーブル。マッピングを実行して、参照テーブルと外部データソース間でデータを転送します。

データ統合サービスが単一のノードまたはプライマリノードやバックアップノードで実行されている場合は、データ統合サービスが実行されるマシンにデータベースクライアントソフトウェアをインストールして接続を設定します。

データ統合サービスがグリッドで実行されている場合は、計算ロールを持つノードまたはサービスロールと計算ロールの両方を持つノードの各マシンに、データベースクライアントソフトウェアをインストールして接続を設定します。

手順 5. データベースクライアントソフトウェアのインストール

アプリケーションサービスがアクセスするデータベースのタイプに基づいて、所定のマシンにデータベースクライアントをインストールする必要があります。

アプリケーションサービスとデータベース間の互換性を確保するには、適切なデータベースクライアントライブラリを使用して、そのデータベースバージョンと互換性のあるクライアントソフトウェアをインストールします。

Informatica サービスをアップグレードするときは、データ統合サービスを実行するマシンに適切なデータベースクライアントをインストールしてください。

アプリケーションサービスがアクセスするデータベースのタイプに基づいて、次のデータベースクライアントソフトウェアをインストールします。

IBM DB2 Client Application Enabler (CAE)

所定のマシンに Informatica サービスを起動するユーザーとして接続し、そのマシンの接続を設定します。

Microsoft SQL Server 2014 Native Client

既存のマッピングが機能するためには Microsoft SQL Server 2014 Native Client をインストールする必要があります。

次の Microsoft の Web サイトからクライアントをダウンロードします。

<http://www.microsoft.com/en-in/download/details.aspx?id=42295>.

Oracle クライアント

互換性のあるバージョンの Oracle クライアントと Oracle データベースサーバをインストールします。また、必要とするすべてのマシンに Oracle クライアントの同じバージョンをインストールする必要があります。互換性を確認するには、Oracle に問い合わせてください。

Sybase Open Client (OCS)

Sybase ASE データベースサーバと互換性のあるバージョンの Open Client をインストールします。また、Sybase ASE データベースおよび Informatica をホストするマシンに同じバージョンの Open Client をインストールする必要もあります。互換性を確認するには、Sybase に問い合わせてください。

手順 6. UNIX 上でのデータベースクライアントの環境変数の設定

PowerCenter 統合サービス PowerCenter Integration Service プロセスを実行するマシンでデータベースクライアント環境変数を設定します。

データベース環境変数の設定後、データベースとデータベースクライアント間の接続をテストできます。

次の表に、UNIX に設定する必要があるデータベース環境変数を示します。

データベース	環境変数名	データベースユーティリティ	値
Oracle	ORACLE_HOME PATH[PATH] LD_LIBRARY_PATH TNS_ADMIN INFA_TRUSTSTORE	sqlplus	設定: <i><Client InstallDatabasePath></i> 追加: <i><DatabasePath>/bin</i> および USER_INSTALL_DIR/server/bin:\$PATH 設定: \$ORACLE_HOME/lib および USER_INSTALL_DIR/ server/bin:\$LD_LIBRARY_PATH tnsnames.ora ファイルの場所に設定: \$ORACLE_HOME/network/admin デフォルトの SSL ドメインの場合、追加: USER_INSTALL_DIR/services/shared/security カスタムの SSL ドメインの場合、 INFA_TRUSTSTORE および INFA_TRUSTSTORE_PASSWORD を設定
SQL Server	ODBCHOME ODBCINI ODBCINST PATH LD_LIBRARY_PATH INFA_TRUSTSTORE		設定: USER_INSTALL_DIR/ODBC7.1 設定: \$ODBCHOME/odbc.ini 設定: \$ODBCHOME/odbcinst.ini 追加: /opt/mssql-tools/bin:\$PATH \$PATHUSER_INSTALL_DIR/ ODBC7.1:\$PATHUSER_INSTALL_DIR/server/bin: \$PATH 追加: \$ODBCHOME/lib USER_INSTALL_DIR/server/bin: \$LD_LIBRARY_PATH デフォルトの SSL ドメインの場合、追加: USER_INSTALL_DIR/services/shared/security カスタムの SSL ドメインの場合、 INFA_TRUSTSTORE および INFA_TRUSTSTORE_PASSWORD を設定

グラフィカルモードでのアップグレード

グラフィカルモードでアップグレードする場合は、ドメインを別のマシンまたは別のドメイン環境設定リポジトリデータベースにアップグレードするようにノード設定を変更できます。Windows では、グラフィカルモードでドメインをアップグレードできます。

同じマシン上および同じドメイン環境設定リポジトリデータベース上でドメインをアップグレードするには、[「Upgrading in Graphical Mode」 \(ページ 37\)](#)を参照してください。

Windows でルートディレクトリから install.bat ファイルを実行して問題が発生した場合、次のファイルを実行します。

<Informatica installation directory>/server/install.exe

1. 以前のバージョンのインストールに使用したユーザーアカウントでマシンにログインします。
2. アップグレードする Informatica 製品のディレクトリおよびサブディレクトリにアクセスするプロセスを、コマンドプロンプトおよび tail log を含めてすべて停止します。

3. インストールファイルがあるディレクトリのルートに移動して、管理者として install.bat を実行します。
管理者としてファイルを実行するには、install.bat ファイルを右クリックして[管理者として実行]を選択します。

Windows でルートディレクトリから install.bat ファイルを実行して問題が発生した場合、次のファイルを実行します。

<Informatica installation directory>/server/install.exe

注: 管理者としてインストーラを実行しないと、Windows システム管理者は、Informatica インストールディレクトリのファイルにアクセスするときに問題が生じることがあります。

[Informatica 10.4.0] ページが表示されます。

4. [Informatica 10.2 ヘアアップグレード] を選択します。



Informatica には、Informatica サービスのインストールプロセスを簡単にするユーティリティがあります。Informatica サービスをアップグレードする前に、次のユーティリティを実行できます。

インストール前 (i10Pi) システムチェックツール。

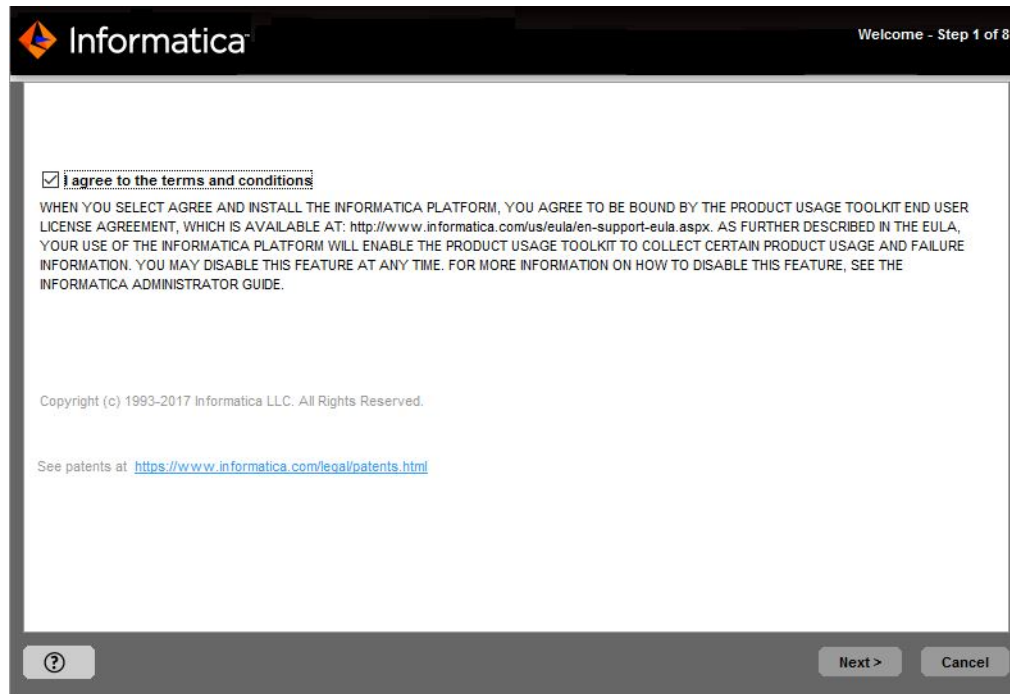
Informatica サービスをインストール中のマシンがインストールに必要なシステム要件を満たしているかを確認します。インストール前 (i10Pi) システムチェックツールの実行に関する詳細は、[「GUID-41DD6761-B1F3-4021-824D-545DBE1796A0」](#)を参照してください。

Informatica Upgrade Advisor。

アップグレードを実行する前にサービスを検証し、廃止されたサービスがドメインにないか確認します。Informatica Upgrade Advisor の詳細については、[「Informatica Upgrade Advisor を実行します」 \(ページ 30\)](#)を参照してください。

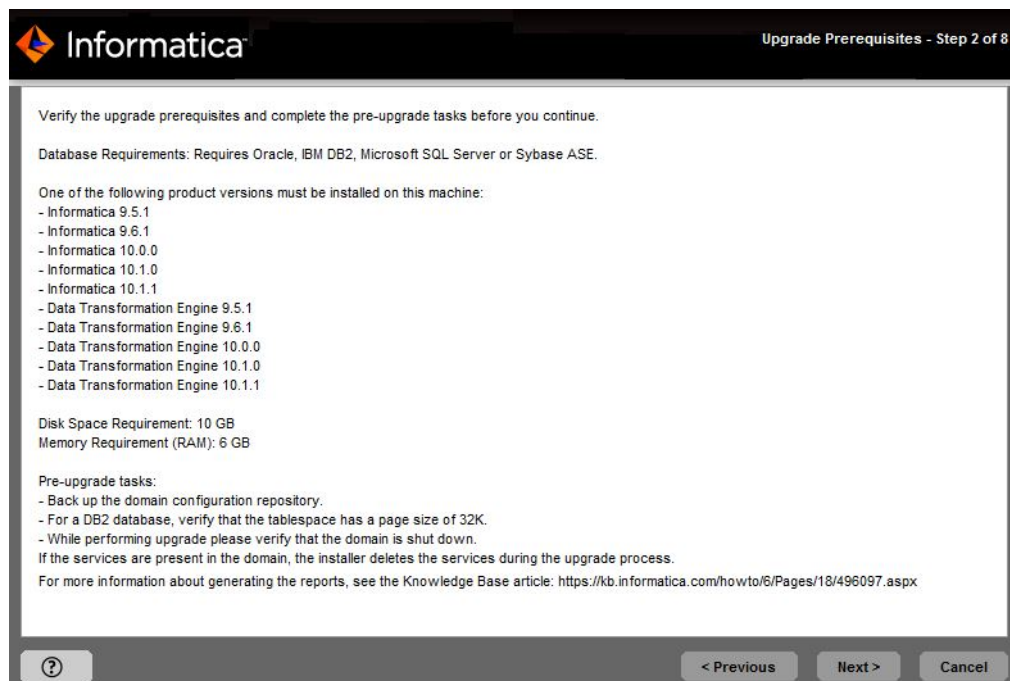
5. [開始] をクリックします。

6. Informatica 製品使用ツールキットの契約条項を読んでから **【契約条項に同意します】** を選択します。




Informatica DiscoveryIQ は、データの使用とシステム統計のルーチンレポートを Informatica に送信する製品使用ツールです。Informatica DiscoveryIQ は、Informatica ドメインをインストールして設定してから 15 分後に、データを Informatica にアップロードします。その後、ドメインはデータを 30 日ごとに送信します。Administrator ツールから使用統計を無効にすることができます。

7. **【アップグレードの前提条件】** ページが表示されます。



アップグレードを続行する前に、要件を確認します。

8. **【次へ】** をクリックします。

 Informatica

Upgrade Directory - Step 3 of 8

Enter the directory of the Informatica product to upgrade:

C:\Informatica\10.1.1

...

Default

Enter the directory for Informatica 10.2.0:

C:\Informatica\10.2.0

...

Default

☐ Allow changes to the node configuration.

Select this option to change the node host name, port numbers, or domain configuration repository database during the upgrade.
This option requires additional configuration tasks after the upgrade.

?

< Previous

Next >

Cancel

- 次の表に、指定する必要があるディレクトリを示します。

ディレクトリ	説明
アップグレードする Informatica 製品のディレクトリ	アップグレードする Informatica サービスのバージョンを含むディレクトリ。
Informatica 10.4.0 のディレクトリ	<p>Informatica 10.4.0 のインストール先にするディレクトリ。</p> <p>インストールディレクトリへの絶対パスを入力します。以前のバージョンの Informatica サービスを含むディレクトリと同じディレクトリは使用できません。また、パスのディレクトリ名にスペースまたは次の特殊文字を含めることはできません。<code>@[* \$ # ! % () { } [] , ; ' '</code></p> <p>注: インストールディレクトリパスには、英数字を使用することを推奨します。<code>á</code> や<code>€</code>などの特殊文字を使用すると、実行時に予期しない結果が生じることがあります。</p> <p>Windows の場合、インストールディレクトリが、現在のマシンに存在する必要があります。</p>

10. [ノードのホスト名とポート番号の変更を許可する] を選択します。

The dialog box is titled "Informatica" and "Upgrade Directory - Step 3 of 8". It contains the following elements:

- Label: "Enter the directory of the Informatica product to upgrade:"
- Text input field: "C:\Informatica" with a browse button "...".
- Button: "Default"
- Label: "Enter the directory for Informatica 10.2.0:"
- Text input field: "C:\Informatica\10.2.0" with a browse button "...".
- Button: "Default"
- Checkbox: ☒ "Allow changes to the node configuration."
- Text: "Select this option to change the node host name, port numbers, or domain configuration repository database during the upgrade. This option requires additional configuration tasks after the upgrade."
- Footer: A question mark icon, "< Previous", "Next >", and "Cancel" buttons.

アップグレードする Informatica のインストールの設定を変更するには、このオプションを使用します。別のマシンにアップグレードしている場合、ノード設定を新しいマシンの設定に合わせて変更します。別のドメイン環境設定リポジトリデータベースにアップグレードしている場合、ノード設定を新しいデータベースの設定に合わせて変更します。

11. [次へ] をクリックします。
[ドメインセキュリティ - 暗号化キー] ページが開かれます。
12. Informatica ドメインに使用する暗号化キーのディレクトリを入力します。

Informatica では、Informatica ドメインに保存される機密データ（パスワードなど）を暗号化キーを使用して保護します。アップグレードする場合は、アップグレードしているノード上の暗号化キーを保存するディレクトリを入力する必要があります。

注: Informatica ドメインのすべてのノードは、同じキーワードおよび暗号化キーを使用します。ドメイン名、暗号化キーのキーワード、および暗号化キーファイルは安全な場所に保管する必要があります。ドメインの暗号化キーを変更するときや、リポジトリを別のドメインに移すときに暗号化キーが必要になります。

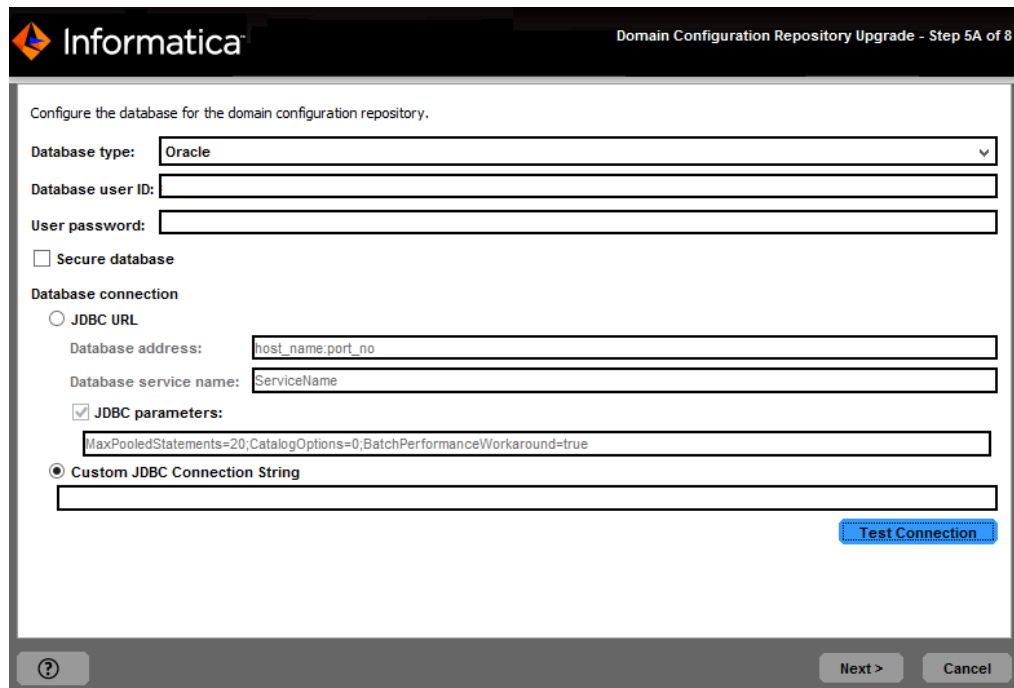
プロパティ	説明
暗号化キーディレクトリ	ドメインに対する暗号化キーを格納するディレクトリです。デフォルトでは、暗号化キーは<Informatica installation directory>/isp/config/keys に作成されます。

13. Informatica ドメインのユーザー名とパスワードを入力します。
14. [次へ] をクリックします。
[インストール前のサマリ] ページが表示されます。
15. アップグレード情報を確認し、[インストール] をクリックして続行します。

アップグレードウィザードによって、Informatica のサーバーファイルが Informatica 10.2 のインストールディレクトリにインストールされます。

アップグレードを続行する前に Informatica ドメインをシャットダウンするよう求める警告が表示されます。

16. **[OK]** をクリックします。
17. ゲートウェイノードをアップグレードしている場合は、**[ドメイン環境設定リポジトリのアップグレード]** ページにドメイン環境設定リポジトリのデータベースおよびユーザーアカウント情報を入力します。



作業ノードをアップグレードしている場合は、ドメイン環境設定リポジトリの情報は表示されません。データベース接続情報は変更できません。手順 [21](#) に進みます。

次のデータベースおよびユーザーアカウントを入力します。

プロパティ	説明
データベースタイプ	ドメイン環境設定リポジトリのデータベース。Oracle、IBM DB2、Microsoft SQL Server、PostgreSQL、または Sybase ASE を選択します。
データベースユーザー ID	ドメイン環境設定リポジトリのデータベースユーザーアカウント。
ユーザーパスワード	データベースユーザーアカウントのパスワード。

プロパティ	説明
テーブルスペース	<p>IBM DB2 で使用できます。テーブルを作成するテーブルスペースの名前です。pageSize の要件である 32768 バイトを満たすテーブルスペースを指定します。</p> <p>単一パーティションのデータベースでは、このオプションが選択されていない場合、インストーラによりデフォルトのテーブルスペースにテーブルが作成されます。</p> <p>複数パーティションのデータベースでは、このオプションを選択し、データベースのカatalogパーティション内に存在するテーブルスペースの名前を指定します。</p>
スキーマ名	<p>Microsoft SQL Server および PostgreSQL で使用できます。ドメイン設定テーブルを含むスキーマの名前です。選択されていない場合、インストーラはデフォルトのスキーマでテーブルを作成します。</p>
信頼関係接続	<p>Microsoft SQL Server で使用できます。信頼関係接続を使用して Microsoft SQL Server に接続するかどうかを示します。信頼認証は、現在のユーザーのセキュリティ資格情報を使用して Microsoft SQL Server へ接続します。選択されていない場合、インストーラは Microsoft SQL Server 認証を使用します。</p>

18. JDBC 接続情報を入力します。

- JDBC の URL 情報を使用して接続情報を入力するには、**[JDBC URL]** を選択し、JDBC の URL のプロパティを指定します。
次の表で、指定する必要がある JDBC URL プロパティについて説明します。

プロパティ	説明
データベースアドレス	host_name:port フォーマットのデータベースのホスト名とポート番号。
データベースサービス名	<p>サービスまたはデータベースの名前:</p> <ul style="list-style-type: none"> - Oracle: サービス名を入力します。 - Microsoft SQL Server: データベース名を入力します。 - IBM DB2: サービス名を入力します。 - Sybase ASE: データベース名を入力します。 - PostgreSQL: データベース名を入力します。
JDBC パラメータ	<p>データベース接続文字列に含めるオプションのパラメータです。パラメータを使用して、データベースのデータベース操作を最適化します。パラメータ文字列が有効であることを確認してください。インストーラは、JDBC URL に文字列を追加する前にパラメータ文字列を検証しません。選択されていない場合、インストーラは追加パラメータなしで JDBC URL 文字列を作成します。</p>

- カスタム JDBC 接続文字列を使用して接続情報を入力するには、**[カスタム JDBC 接続文字列]** を選択して接続文字列を入力します。

JDBC 接続文字列で次の構文を使用します。

IBM DB2

```
jdbc:Informatica:db2://<host name>:<port number>;DatabaseName=
```


Oracle

```
jdbc:Informatica:oracle://<host name>:<port number>;ServiceName=
```

Microsoft SQL Server

```
jdbc:Informatica:sqlserver://<host name>:<port number>;SelectMethod=cursor;DatabaseName=
```

Microsoft Azure SQL データベース

```
jdbc:Informatica:sqlserver://  
host_name:port_no;SelectMethod=cursor;DatabaseName=database_name;SnapshotSerializable=true;EncryptionMethod=SSL;HostNameInCertificate=*.database.windows.net;ValidateServerCertificate=false
```

PostgreSQL

```
jdbc:Informatica:postgresql://<host name>:<port number>;DatabaseName=
```

Sybase

```
jdbc:Informatica:postgresql://<host name>:<port number>;DatabaseName=
```

データベースシステムで必要とされる接続パラメータがすべて接続文字列に含まれていることを確認します。

19. **【接続テスト】** をクリックしてデータベースに接続できることを確認した後、**【OK】** をクリックして続行します。
20. **【次へ】** をクリックします。
【ドメインおよびノードの設定】 ページが表示されます。

Informatica Domain and Node Configuration - Step 6 of 8

Enter information for the Informatica domain.

Domain name:

Node name:

Node host name:

Node port number:

Enter the following custom keystore file information. Required if you use a custom keystore file for HTTP(S) configuration.

Custom keystore password:

Custom keystore file: ...

? < Previous Next > Cancel

21. 新しいバージョンの Informatica の設定に合わせて、ノードのホスト名とポート番号を変更します。

以下の表に、指定可能なドメインとノードのプロパティを示します。

プロパティ	説明
ドメイン名	ドメインの名前。デフォルトのドメイン名は、Domain_<MachineName>です。名前は 128 文字以下で、7 ビットの ASCII 文字のみにする必要があります。スペースまたは次のいずれかの文字は使用できません: ` % * + ; " ? , < > \ /
ノード名	アップグレードするノードの名前。
ノードのホスト名	新しいバージョンの Informatica のノードをホストするマシンのホスト名。マシンが 1 つのネットワーク名を持つ場合は、デフォルトのホスト名を使用します。マシンが複数のネットワーク名を持つ場合は、デフォルトのホスト名を変更して別のネットワーク名を使用します。必要に応じて、IP アドレスを使用できます。 注: localhost は使用しないでください。ホスト名はマシンを明示的に示す必要があります。
ノードのポート番号	アップグレードするノードのポート番号。ノードのデフォルトのポート番号は 6005 です。
ゲートウェイノードのホスト名	ドメインのゲートウェイノードをホストするマシンのホスト名です。作業ノードをアップグレードする場合に使用できます。
ゲートウェイノードのポート番号	ゲートウェイノードのポート番号。作業ノードをアップグレードする場合に使用できます。

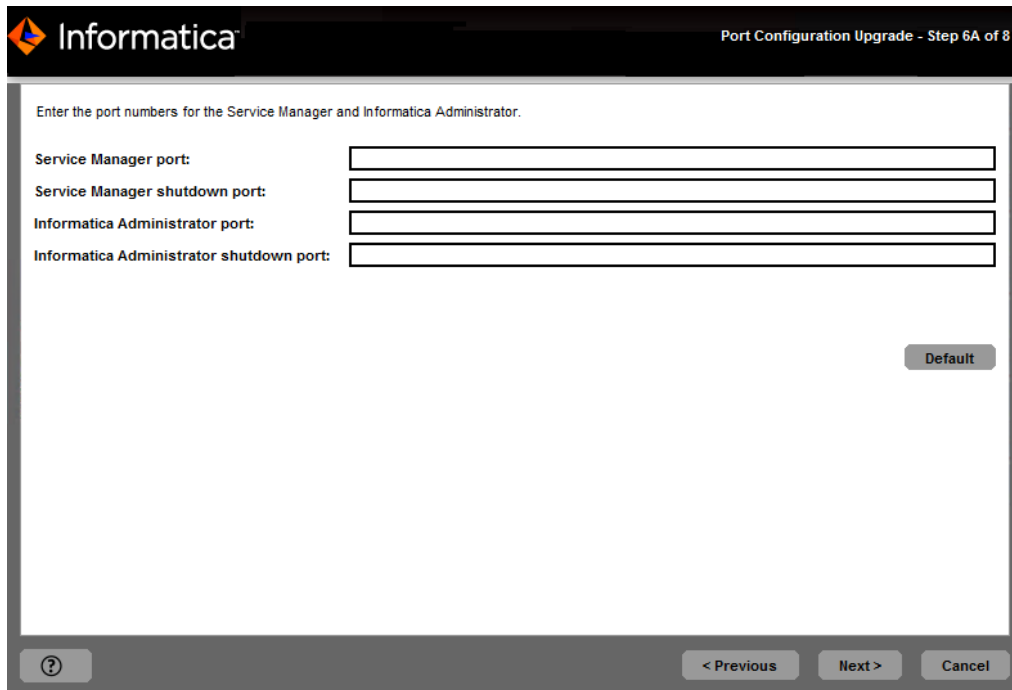
22. カスタムキーストアファイルを使用して Informatica Administrator を保護し、別のゲートウェイノード設定にアップグレードする場合は、カスタムキーストアファイルのパスワードと場所を入力します。

次の表に、Informatica Administrator カスタムキーストアのプロパティを示します。

プロパティ	説明
カスタムキーストアのパスワード	カスタムキーストアファイルのプレーンテキストパスワード。
カスタムキーストアファイル	カスタムキーストアファイルのパスとファイル名。このフィールドを空白にすると、インストーラは以下のディレクトリでキーストアファイルを探します。 <Informatica installation directory>\tomcat\conf\

23. **【次へ】** をクリックします。

[ポート設定のアップグレード] ページが表示されます。



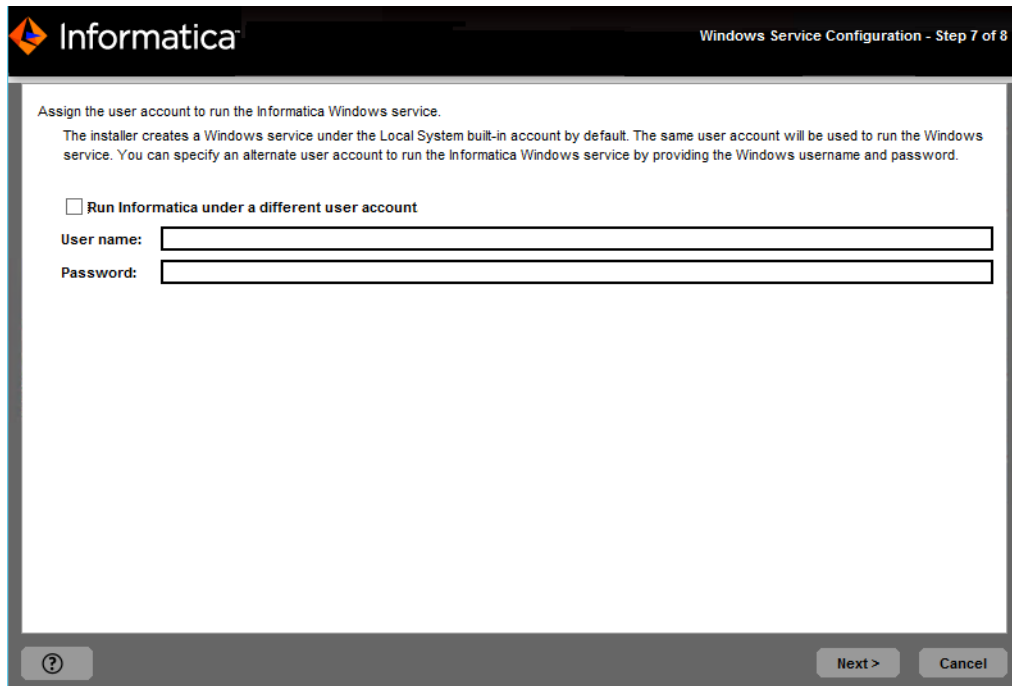
24. 新しいポート番号を入力するか、またはデフォルトのポート番号を使用します。

以下の表に、指定可能なポートを示します。

ポート	説明
サービスマネージャポート	ノードのサービスマネージャが使用するポート番号。クライアントアプリケーションおよび Informatica コマンドラインプログラムは、このポートを使用してドメインのサービスと通信します。
サービスマネージャのシャットダウンポート	ドメインのサービスマネージャに対するサーバーのシャットダウンを制御するポート番号。サービスマネージャは、このポートでシャットダウンコマンドをリスンします。
Informatica Administrator ポート	Administrator ツールで使用されるポート番号。 ゲートウェイノードをアップグレードする場合に使用できます。
Informatica Administrator シャットダウンポート	Administrator ツールがシャットダウンコマンドをリスンするために使用するポート番号。 ゲートウェイノードをアップグレードする場合に使用できます。

25. [次へ] をクリックします。

[Windows サービスの設定] ページが表示されます。



Windows では、アップグレードウィザードによって Informatica を起動するためのサービスが作成されます。デフォルトでは、サービスはインストールに使用されるアカウントと同じユーザーアカウントで実行されます。別のユーザーアカウントで Windows サービスを実行できます。

26. 別のユーザーアカウントで Windows サービスを実行するかどうかを選択します。

次のユーザーアカウント情報を入力します。

プロパティ	説明
別のユーザーアカウントで Informatica を実行する	別のユーザーアカウントで Windows サービスを実行するかどうかを指定します。
ユーザー名	Informatica Windows サービスを実行するユーザーアカウント。 次の形式を使用します。 <ドメイン名>\<ユーザーアカウント> このユーザーアカウントには、[オペレーティングシステムの一部として機能] 権限を付与する必要があります。
パスワード	Informatica Windows サービスを実行するユーザーアカウントのパスワード。

27. [次へ] をクリックします。

[インストール後のサマリ] ページが表示されます。

28. [完了] をクリックすると、インストール手順が完了し、インストーラが終了します。

アップグレードウィザードで実行されたタスクの詳細と、インストールされたコンポーネントの設定を確認するには、upgrade.log ファイルを参照してください。

コンソールモードでのアップグレード

コンソールモードでアップグレードする場合は、ドメインを別のマシンまたは別のドメイン環境設定リポジトリデータベースにアップグレードするようにノード設定を変更できます。UNIX では、ドメインをコンソールモードでアップグレードできます。

同じマシン上および同じドメイン環境設定リポジトリデータベース上でドメインをアップグレードするには、[Upgrading in Console Mode](#) を参照してください。

コンソールモードでインストーラを実行する場合、Quit および Back という単語は予約語です。これらの単語を入力テキストで使用しないでください。

1. シェルコマンドラインで、ルートディレクトリにある `install.sh` ファイルを実行します。
ロケール環境変数が設定されていることを確認するよう求めるメッセージが表示されます。
2. 環境変数が設定されていない場合は、**N** キーを押してインストーラを終了し、必要に応じて環境変数を設定します。
環境変数が設定されている場合は、**Y** キーを押して続行します。
3. Informatica をアップグレードするために、**2** キーを押します。
Informatica には、Informatica サービスのインストールプロセスを簡単にするユーティリティがあります。Informatica サービスをアップグレードする前に、次のユーティリティを実行できます。
Informatica Upgrade Advisor。
アップグレードを実行する前にサービスを検証し、廃止されたサービスがドメインにないか確認します。
アップグレードを続行する前にアップグレードする Informatica ドメインをシャットダウンするよう求める警告が表示されます。
4. Informatica 10.2 にアップグレードするには、**2** キーを押します。
5. Informatica 製品使用ツールキットの契約条項を読んでから **2** を押して更新を続行します。
Informatica DiscoveryIQ は、データの使用とシステム統計のルーチンレポートを Informatica に送信する製品使用ツールです。Informatica DiscoveryIQ は、Informatica ドメインをインストールして設定してから 15 分後に、データを Informatica にアップロードします。その後、ドメインはデータを 30 日ごとに送信します。使用統計値を Informatica に送信しないことを選択できます。使用統計の送信を無効にする方法の詳細については、『*Informatica Administrator ガイド*』を参照してください。
6. Informatica サービスをアップグレードするには、**1** キーを押します。
注: AIX でアップグレードする場合、この手順は無視してください。
7. **【アップグレードの前提条件】** ページに、アップグレードのシステム要件が表示されます。
アップグレードを続行する前に、要件を確認します。
8. プロンプトで、アップグレードする Informatica バージョンのディレクトリと、Informatica 10.2 をインストールするディレクトリを入力します。

次の表に、指定する必要があるディレクトリを示します。

ディレクトリ	説明
アップグレードする Informatica 製品のディレクトリ	アップグレードする Informatica サービスのバージョンを含むディレクトリ。
Informatica 10.4.0 のディレクトリ	Informatica 10.4.0 のインストール先にするディレクトリ。 インストールディレクトリへの絶対パスを入力します。以前のバージョンの Informatica サービスを含むディレクトリと同じディレクトリは使用できません。また、パスのディレクトリ名にスペースまたは次の特殊文字を含めることはできません。@ * \$#!%(){}[];', 注: インストールディレクトリパスには、英数字を使用することを推奨します。á や€などの特殊文字を使用すると、実行時に予期しない結果が生じることがあります。 Windows の場合、インストールディレクトリが、現在のマシンに存在する必要があります。

9. ノードのホスト名とポート番号の変更を許可するには、**2** と入力します。

アップグレードする Informatica のインストールの設定を変更するには、このオプションを使用します。別のマシンにアップグレードしている場合、ノード設定を新しいマシンの設定に合わせて変更します。別のドメイン環境設定リポジトリデータベースにアップグレードしている場合、ノード設定を新しいデータベースの設定に合わせて変更します。

10. Informatica ドメインに使用する暗号化キーのディレクトリを入力します。

Informatica では、Informatica ドメインに保存される機密データ（パスワードなど）を暗号化キーを使用して保護します。アップグレードする場合は、アップグレードしているノード上の暗号化キーを保存するディレクトリを入力する必要があります。

注: Informatica ドメインのすべてのノードは、同じキーワードおよび暗号化キーを使用します。ドメイン名、暗号化キーのキーワード、および暗号化キーファイルは安全な場所に保管する必要があります。ドメインの暗号化キーを変更するときや、リポジトリを別のドメインに移すときに暗号化キーが必要になります。

プロパティ	説明
暗号化キーディレクトリ	ドメインに対する暗号化キーを格納するディレクトリです。デフォルトでは、暗号化キーは<Informatica installation directory>/isp/config/keys に作成されます。

11. Informatica ドメインのユーザー名とパスワードを入力します。

12. アップグレード情報を確認し、**Enter** キーを押して続行します。

インストーラがサーバーファイルを Informatica 10.2 のインストールディレクトリにコピーします。

アップグレードを続行する前にアップグレードする Informatica ドメインをシャットダウンするよう求める警告が表示されます。

13. **Enter** キーを押します。

14. ゲートウェイノードをアップグレードする場合は、ドメイン環境設定リポジトリに使用するデータベースを選択します。

作業ノードをアップグレードしている場合は、ドメイン環境設定リポジトリの情報は表示されません。データベース接続情報は変更できません。手順 [17](#) に進みます。

以下の表に、ドメイン環境設定リポジトリに使用できるデータベースを示します。

プロンプト	説明
データベースタイプ	ドメイン環境設定リポジトリ用データベースのタイプ。次のオプションから選択します。 1 - Oracle 2 - Microsoft SQL Server 3 - IBM DB2 4 - Sybase ASE 5 - PostgreSQL

15. データベースユーザーアカウントのプロパティを入力します。

以下の表に、データベースユーザーアカウントのプロパティを示します。

プロパティ	説明
データベースユーザー ID	ドメイン設定データベースのユーザーアカウントの名前。
ユーザーパスワード	ドメイン環境設定データベースのユーザーアカウントのパスワードです。

16. データベースのパラメータを入力します。セキュアなドメイン環境設定リポジトリを作成しない場合は、データベース用のパラメータを入力します。

- a. IBM DB2 を選択した場合は、テーブルスペースを設定するかどうかを選択し、テーブルスペース名を入力します。

以下の表に、IBM DB2 データベースに設定する必要があるプロパティを示します。

プロパティ	説明
テーブルスペースの設定	テーブルスペースを指定するかどうかを選択します。 1 - いいえ 2 - はい 単一パーティションのデータベースでは、いいえを選択した場合、インストーラによりデフォルトのテーブルスペースにテーブルが作成されます。複数パーティションのデータベースでは、はいを選択する必要があります。
テーブルスペース	テーブルを作成するテーブルスペースの名前です。pageSize の要件である 32768 バイトを満たすテーブルスペースを指定します。 単一パーティションのデータベースでは、テーブルスペースを設定するために「はい」を選択する場合は、テーブルを作成するテーブルスペースの名前を入力します。 複数パーティションのデータベースでは、データベースのカatalog パーティション内に存在するテーブルスペースの名前を指定します。

- b. Microsoft SQL Server を選択した場合は、データベースのスキーマ名を入力します。

以下の表に、Microsoft SQL Server データベースに設定する必要があるプロパティを示します。

プロパティ	説明
スキーマ名	ドメイン設定テーブルを含むスキーマの名前です。このパラメータが空白の場合、インストーラによりデフォルトのスキーマにテーブルが作成されます。

- c. JDBC URL 情報を使用して JDBC 接続情報を入力するには、**1** を押します。カスタム JDBC 接続文字列を使用して JDBC 接続情報を入力するには、**2** を押します。
- d. JDBC 接続情報を入力します。
 - JDBC の URL 情報を使用して接続情報を入力するには、JDBC の URL のプロパティを指定します。以下の表に、データベース接続情報を示します。

プロンプト	説明
データベースホスト名	データベースのホスト名。
データベースポート番号	データベースのポート番号。
データベースサービス名	サービスまたはデータベースの名前: - Oracle: サービス名を入力します。 - Microsoft SQL Server: データベース名を入力します。 - IBM DB2: サービス名を入力します。 - Sybase ASE: データベース名を入力します。 - PostgreSQL: データベース名を入力します。
JDBC パラメータの設定	追加の JDBC パラメータを接続文字列に追加するかどうかを選択します。 1 - はい 2 - いいえ はいを選択する場合は、パラメータを入力するか Enter キーを押してデフォルトを受け入れます。いいえを選択する場合は、インストーラによりパラメータを使用せずに JDBC 接続文字列が作成されます。

- カスタム JDBC 接続文字列を使用して接続情報を入力するには、接続文字列を入力します。JDBC 接続文字列で次の構文を使用します。

IBM DB2

```
jdbc:Informatica:db2://<host name>:<port number>;DatabaseName=
```

Oracle

```
jdbc:Informatica:oracle://<host name>:<port number>;ServiceName=
```

Microsoft SQL Server

```
jdbc:Informatica:sqlserver://<host name>:<port number>;SelectMethod=cursor;DatabaseName=
```

Microsoft Azure SQL データベース

```
jdbc:Informatica:sqlserver://  
host_name:port_no;SelectMethod=cursor;DatabaseName=database_name;SnapshotSerializable=true;EncryptionMethod=SSL;HostNameInCertificate=*.database.windows.net;ValidateServerCertificate=false
```

PostgreSQL

```
jdbc:Informatica:postgresql://<host name>:<port number>;DatabaseName=
```

Sybase

```
jdbc:Informatica:postgresql://<host name>:<port number>;DatabaseName=
```

データベースシステムで必要とされる接続パラメータがすべて接続文字列に含まれていることを確認します。

17. 新しいバージョンの Informatica の設定に合わせて、ノードのホスト名とポート番号を変更します。
以下の表に、指定可能なドメインとノードのプロパティを示します。

プロパティ	説明
ドメイン名	ドメインの名前。デフォルトのドメイン名は、Domain_<MachineName>です。名前は 128 文字以下で、7 ビットの ASCII 文字のみにする必要があります。スペースまたは次のいずれかの文字は使用できません: ` % * + ; " ? , < > \ /`
ノード名	アップグレードするノードの名前。
ノードのホスト名	アップグレードするノードをホストするマシンのホスト名。マシンが 1 つのネットワーク名を持つ場合は、デフォルトのホスト名を使用します。マシンが複数のネットワーク名を持つ場合は、デフォルトのホスト名を変更して別のネットワーク名を使用します。必要に応じて、IP アドレスを使用できます。 注: localhost は使用しないでください。ホスト名はマシンを明示的に示す必要があります。
カスタムキーストアのパスワード	カスタムキーストアファイルのプレーンテキストパスワード。カスタムキーストアファイルを使用して Informatica Administrator を保護し、別のゲートウェイノード設定にアップグレードする場合は、カスタムキーストアパスワードを入力します。
カスタムキーストアファイル	カスタムキーストアファイルのパスとファイル名。カスタムキーストアファイルを使用して Informatica Administrator を保護し、別のゲートウェイノード設定にアップグレードする場合は、カスタムキーストアファイルを入力します。 このフィールドを空白にすると、インストーラは以下のディレクトリでキーストアファイルを探します。 <Informatica installation directory>\tomcat\conf\
ノードのポート番号	アップグレードするノードのポート番号。ノードのデフォルトのポート番号は 6005 です。

プロパティ	説明
ゲートウェイノードのホスト名	ドメインのゲートウェイノードをホストするマシンのホスト名です。作業ノードをアップグレードする場合に使用できます。
ゲートウェイノードのポート番号	ゲートウェイノードのポート番号。作業ノードをアップグレードする場合に使用できます。

18. ドメインコンポーネントに割り当てられているポート番号が表示されます。
 新しいポート番号を指定しても、デフォルトのポート番号を使用してもかまいません。
 以下の表に、指定可能なポートを示します。

ポート	説明
サービスマネージャポート	ノードのサービスマネージャが使用するポート番号。クライアントアプリケーションおよび Informatica コマンドラインプログラムは、このポートを使用してドメインのサービスと通信します。
サービスマネージャのシャットダウンポート	ドメインのサービスマネージャに対するサーバーのシャットダウンを制御するポート番号。サービスマネージャは、このポートでシャットダウンコマンドをリスンします。
Informatica Administrator ポート	Administrator ツールで使用されるポート番号。ゲートウェイノードをアップグレードする場合に使用できます。
Informatica Administrator シャットダウンポート	Administrator ツールがシャットダウンコマンドをリスンするために使用するポート番号。ゲートウェイノードをアップグレードする場合に使用できます。

【インストール後のサマリ】ウィンドウには、アップグレードが正常に完了したかどうかを示すメッセージが表示されます。また、インストールされたコンポーネントとその設定のステータスも表示されます。

アップグレードログファイルを表示して、インストーラが実行したアップグレードタスクの詳細およびインストールされたコンポーネントの設定プロパティを確認できます。

サイレントモードでのアップグレード

サイレントモードでアップグレードする場合は、ドメインを別のマシンまたは別のドメイン環境設定リポジトリデータベースにアップグレードするようにノード設定を変更できます。

ユーザーの操作なしで Informatica サービスをアップグレードするには、サイレントモードでアップグレードします。プロパティファイルを使用してアップグレードオプションを指定します。インストーラはファイルを読み込んでアップグレードオプションを確認します。サイレントモードのアップグレードを使用して、ネットワーク上の複数のマシンで Informatica サービスをアップグレードするか、マシン間でアップグレードプロセスを標準化します。

Informatica インストールファイルを、アップグレードする予定の Informatica インスタンスをホストするマシンにコピーします。

サイレントモードでアップグレードするには、以下のタスクを実行します。

1. アップグレードプロパティファイルを作成し、アップグレードオプションを指定します。
2. アップグレードプロパティファイルを使用して、インストーラを実行します。
3. アップグレードプロパティファイル内のパスワードを保護します。

ノード設定の変更の完了

Informatica サービスのインストールを別のマシンに移行したという理由で、ドメインのアップグレード中にノード設定の変更を選択した場合は、アプリケーションサービスをアップグレードする前に追加のタスクを実行する必要があります。

注: ドメイン環境設定リポジトリを別のデータベースに移行したという理由で、ドメインのアップグレード時にノード設定の変更を選択した場合は、追加のタスクを実行する必要はありません。

次の追加タスクを実行する必要があります。

1. 環境変数を設定します。
2. 動的ポート番号の範囲の確認
3. ノードバックアップディレクトリの場所を確認します。
4. PowerExchange® アダプタを設定します。

ブラウザのキャッシュをクリアする

Administrator ツールにアクセスする前に、ブラウザキャッシュをクリアします。

Windows Internet Explorer では、一時ファイル、クッキー、履歴などの閲覧履歴を削除します。

ブラウザキャッシュをクリアしない場合、以前の Administrator ツールの URL が最新の URL にリダイレクトされず、一部のメニューオプションが表示されないことがあります。

ロケール環境変数の設定

LANG、LC_CTYPE、または LC_ALL を使用して、UNIX コードページを設定します。

異なる UNIX オペレーティングシステムには、同じロケールに対して異なる値が必要です。ロケール変数の値は、大文字と小文字が区別されます。

以下のコマンドを使用して、ロケール環境変数がマシンの言語設定、およびリポジトリで使用するコードページのタイプと互換性があることを確認します。

```
locale -a
```

このコマンドでは、UNIX オペレーティングシステムにインストールされている言語、および既存のロケールの設定が返されます。

Linux のロケール

Linux 以外のすべての UNIX オペレーティングシステムでは、各ロケールに対して一意の値を持っています。Linux では、さまざまな値を使用して同じロケールを表すことができます。たとえば、「utf8」、「UTF-8」、「UTF8」、および「utf-8」は、Linux マシンでは同じロケールを表しています。Informatica では、Linux マシンでロケールごとに特定の値を使用する必要があります。すべての Linux マシンについて、LANG 環境変数が適切に設定されていることを確認してください。

Oracle データベースクライアントのロケール

Oracle データベースクライアントの場合は、データベースクライアントおよびサーバーへのログインで使用するロケールに NLS_LANG を設定します。ロケール設定は、言語、地域、および文字セットから構成されています。NLS_LANG の値は、設定に応じて異なります。

例えば、値が american_america.UTF8 の場合、C シェルでは次のコマンドで変数を設定します。

```
setenv NLS_LANG american_america.UTF8
```

マルチバイト文字をデータベースから読み取るには、次のコマンドで変数を設定します。

```
setenv NLS_LANG=american_america.AL32UTF8
```

データ統合サービスが Oracle データを正常に読み取ることができるように、データ統合サービスマシンに正しい変数を設定する必要があります。

ライブラリパス環境変数の設定

データ統合サービスのプロセスが実行されるマシンで、ライブラリパスの環境変数を設定します。変数名と要件は、プラットフォームとデータベースによって異なります。

LD_LIBRARY_PATH 環境変数を設定します。

以下の表に、各種データベースの LD_LIBRARY_PATH に対して設定する値を示します。

データベース	値
Oracle	<Database path>/lib
IBM DB2	<Database path>/lib
Sybase ASE	「\${SYBASE_OCS}/lib:\${SYBASE_ASE}/lib:\${LD_LIBRARY_PATH}」
Informix	<Database path>/lib
Teradata	<Database path>/lib
ODBC	<CLOSEDODBCHOME>/lib
PostgreSQL	\$PGHOME/lib:\${LD_LIBRARY_PATH}

動的ポート番号の範囲の確認

移行されたノードをアップグレードする場合、アップグレードウィザードは、ノードで実行されるアプリケーションサービスプロセスに動的に割り当てられるデフォルトの範囲のポート番号を割り当てます。

動的ポート番号のデフォルトの範囲は、6013～6113 です。Informatica の新しいバージョンを実行するマシンで、ポート番号のデフォルトの範囲が使用可能になっていることを確認します。このポート番号の範囲を使用できない場合は、Administrator ツールを使用して範囲を更新します。ノードの【プロパティ】ビューの【詳細プロパティ】セクションで、サービスプロセスの動的ポート番号の最小値と最大値を設定します。

ノードバックアップディレクトリの確認

Informatica の新しいバージョンを実行するマシンで、ノードのバックアップディレクトリにアクセスできることを確認します。Administrator ツールで、ノードの【プロパティ】ビューの【詳細プロパティ】セクションの【バックアップディレクトリ】プロパティを表示します。

PowerExchange アダプタの設定

以前のインストールに PowerExchange アダプタが含まれていた場合は、アップグレードされたバージョンの Informatica を実行するマシンで PowerExchange アダプタを設定します。PowerExchange アダプタのインストーラがある場合は、PowerExchange アダプタを再インストールします。

第 8 章

アプリケーションサービスをアップグレードする前に

この章では、以下の項目について説明します。

- [POSIX Asynchronous I/O の設定, 77 ページ](#)
- [Informatica の環境変数の設定, 77 ページ](#)
- [ロケール環境変数の設定, 78 ページ](#)
- [Administrator ツールのキーストアファイルの場所の確認, 79 ページ](#)
- [ブラウザのキャッシュをクリアする, 79 ページ](#)

POSIX Asynchronous I/O の設定

Informatica を IBM AIX マシンにインストールする場合、PowerCenter 統合サービスを実行するすべてのノードで POSIX Asynchronous I/O を有効にします。IBM AIX マシンで実行される PowerCenter 統合サービスは、POSIX Asynchronous I/O が有効になっていないと起動できないことがあります。

Informatica の環境変数の設定

INFA_DOMAINS_FILE および INFA_HOME の各環境変数を設定して、ドメインおよびインストール場所の設定を格納できます。

INFA_DOMAINS_FILE

インストーラにより、domains.inf ファイルが Informatica インストールディレクトリに作成されます。domains.inf ファイルには、ドメイン名、ドメインホスト名、およびドメインホストのポート番号など、ドメイン内のゲートウェイノードの接続情報が含まれています。

INFA_DOMAINS_FILE 変数の値を、domains.inf ファイルのパスおよびファイル名に設定します。

Informatica サービスをインストールするマシンで INFA_DOMAINS_FILE 変数を設定します。Windows では、INFA_DOMAINS_FILE をシステム変数として設定します。

INFA_HOME

INFA_HOME を使用して、Informatica インストールディレクトリを指定します。Informatica ディレクトリ構造を変更する場合は、環境変数に Informatica インストールディレクトリの場所、またはインストールされた Informatica ファイルがあるディレクトリの場所を設定する必要があります。

例えば、任意の Informatica ディレクトリに対してソフトリンクを使用します。いずれの Informatica アプリケーションやサービスでも、実行する必要があるその他の Informatica コンポーネントを見つけられるように INFA_HOME を設定するには、INFA_HOME に Informatica インストールディレクトリの場所を設定します。

ロケール環境変数の設定

LANG、LC_CTYPE、または LC_ALL を使用して、UNIX コードページを設定します。

異なる UNIX オペレーティングシステムには、同じロケールに対して異なる値が必要です。ロケール変数の値は、大文字と小文字が区別されます。

以下のコマンドを使用して、ロケール環境変数がマシンの言語設定、およびリポジトリで使用するコードページのタイプと互換性があることを確認します。

```
locale -a
```

このコマンドでは、UNIX オペレーティングシステムにインストールされている言語、および既存のロケールの設定が返されます。

Linux のロケール

Linux 以外のすべての UNIX オペレーティングシステムでは、各ロケールに対して一意の値を持っています。Linux では、さまざまな値を使用して同じロケールを表すことができます。たとえば、「utf8」、「UTF-8」、「UTF8」、および「utf-8」は、Linux マシンでは同じロケールを表しています。Informatica では、Linux マシンでロケールごとに特定の値を使用する必要があります。すべての Linux マシンについて、LANG 環境変数が適切に設定されていることを確認してください。

Oracle データベースクライアントのロケール

Oracle データベースクライアントの場合は、データベースクライアントおよびサーバーへのログインで使用するロケールに NLS_LANG を設定します。ロケール設定は、言語、地域、および文字セットから構成されています。NLS_LANG の値は、設定に応じて異なります。

例えば、値が american_america.UTF8 の場合、C シェルでは次のコマンドで変数を設定します。

```
setenv NLS_LANG american_america.UTF8
```

マルチバイト文字をデータベースから読み取るには、次のコマンドで変数を設定します。

```
setenv NLS_LANG=american_america.AL32UTF8
```

データ統合サービスが Oracle データを正常に読み取ることができるように、データ統合サービスマシンに正しい変数を設定する必要があります。

Administrator ツールのキーストアファイルの場所の確認

Administrator ツールへの接続を保護するために作成したキーストアファイルを使用していた場合は、Administrator ツールにアクセスする前に、そのキーストアファイルの場所を確認する必要があります。アップグレードプロセスではこの場所が更新されません。

以前のドメインでインストーラによって作成されたデフォルトのキーストアファイルを使用していた場合は、キーストアファイルの場所を確認する必要はありません。

実行する必要があるタスクは、キーストアファイルを以前に保存した以下の場所に応じて異なります。

以前の Informatica インストールディレクトリ構造内の場所

以前の Informatica インストールディレクトリ構造内の場所にキーストアファイルを格納した場合は、次の手順を実行します。

1. このファイルを別の場所にコピーします。
2. コピーされたキーストアファイルの場所を使用して、ゲートウェイノードを更新します。

infasetup UpdateGatewayNode コマンドを実行して、キーストアファイルの場所を使用してゲートウェイノードを更新します。ドメイン内の各ゲートウェイノード上でコマンドを実行する必要があります。

以前の Informatica インストールディレクトリ構造外の場所

以前の Informatica インストールディレクトリ構造外の場所にキーストアファイルを格納した場合は、ゲートウェイノードを実行するマシンがこのファイルにアクセスできることを確認します。

ブラウザのキャッシュをクリアする

Administrator ツールにアクセスする前に、ブラウザキャッシュをクリアします。

Windows Internet Explorer では、一時ファイル、クッキー、履歴などの閲覧履歴を削除します。

ブラウザキャッシュをクリアしない場合、以前の Administrator ツールの URL が最新の URL にリダイレクトされず、一部のメニューオプションが表示されないことがあります。

第 9 章

アプリケーションサービスのアップグレード

この章では、以下の項目について説明します。

- [アプリケーションサービスのアップグレードの概要, 80 ページ](#)
- [サービスアップグレードウィザードの実行, 82 ページ](#)
- [モデルリポジトリサービスのアップグレードの確認, 82 ページ](#)

アプリケーションサービスのアップグレードの概要

アプリケーションサービスのアップグレードプロセスは、アップグレード前の Informatica サービスのバージョンによって決まります。

Informatica サービスのバージョンによっては、アプリケーションサービスのアップグレードが必要です。アプリケーションサービスをアップグレードする場合、依存サービスもアップグレードする必要があります。アプリケーションサービスのアップグレード時には、アップグレードプロセスによって、そのサービスに関連付けられたデータベースのデータベースコンテンツがアップグレードされます。

[サービスアップグレード] ウィザード、各サービスの [アクション] メニュー、またはコマンドラインを使用してアプリケーションサービスをアップグレードします。サービスアップグレードウィザードは、適切な順序で複数のサービスをアップグレードし、依存関係をチェックします。各サービスの [アクション] メニューまたはコマンドラインを使用してアプリケーションサービスをアップグレードする場合は、適切な順序でアプリケーションサービスをアップグレードし、依存サービスをアップグレードしたことを確認する必要があります。

アプリケーションサービスのアップグレードに必要な特権は、サービスによって異なります。

サービスをアップグレードする特権

アプリケーションサービスのアップグレードに必要な特権は、アプリケーションサービスによって異なります。

サービスアップグレードウィザードにアクセスするには、ドメインに対する管理者ロールが必要です。

以下のアプリケーションサービスをアップグレードするには、ユーザーにこれらのロール、特権、および権限が必要です。

モデルリポジトリサービス

サービスのアップグレードウィザードを使用してモデルリポジトリサービスをアップグレードするには、ユーザーに以下の資格情報が必要です。

- ドメインの管理者ロール。
- モデルリポジトリサービスに対する、プロジェクトの作成、編集、および削除の特権、プロジェクトへの書き込み権限。

[アクション] メニューまたはコマンドラインからモデルリポジトリサービスをアップグレードするには、ユーザーに次の資格情報が必要です。

- ドメインに対するサービスの管理特権、およびモデルリポジトリサービスでの権限。
- モデルリポジトリサービスに対する、プロジェクトの作成、編集、および削除の特権、プロジェクトへの書き込み権限。

データ統合サービス

データ統合サービスをアップグレードするには、ユーザーにデータ統合サービスでの管理者ロールが必要です。

コンテンツ管理サービス

コンテンツ管理サービスをアップグレードするには、ユーザーにコンテンツ管理サービスでの管理者ロールが必要です。

PowerCenter リポジトリサービス

PowerCenter リポジトリサービスをアップグレードするには、ユーザーにドメインに対するサービスの管理特権、および PowerCenter リポジトリサービスでの権限が必要です。

Metadata Manager サービス

Metadata Manager サービスをアップグレードするには、ユーザーにドメインに対するサービスの管理特権、および Metadata Manager サービスでの権限が必要です。

以前のバージョンからのサービスアップグレード

以前のバージョンからアップグレードする場合、一部のアプリケーションサービスでアップグレードが必要です。前のバージョンで使用したアプリケーションサービスをアップグレードします。

アップグレード前に、Metadata Manager サービスが無効になっていることを確認します。他のアプリケーションサービスがすべて有効になっていることを確認します。

アプリケーションサービスをアップグレードするには、次のサービスと関連データベースをこの順にアップグレードします。

1. モデルリポジトリサービス
2. データ統合サービス
3. データ統合サービスのプロファイリングウェアハウス
4. Metadata Manager サービス
5. PowerCenter リポジトリサービス

注: 他のアプリケーションサービスをすべてアップグレードする場合は、アップグレードプロセスによって、サービスに関連付けられたデータベースのデータベースコンテンツがアップグレードされます。

サービスアップグレードウィザードの実行

アプリケーションサービスと、サービスに関連付けられたデータベースのデータベースコンテンツのアップグレードには、サービスアップグレードウィザードを使用します。サービスアップグレードウィザードには、アップグレードが必要なサービスと関連するデータベースとともにアップグレード済みのサービスのリストが表示されます。現在または前のアップグレードレポートを保存することもできます。

注: アップグレードの前に Metadata Manager サービスが無効になっている必要があります。その他のすべてのサービスは、アップグレードの前に有効になっている必要があります。

1. Informatica Administrator のヘッダ領域で、**[管理]** > **[アップグレード]** をクリックします。
2. アップグレードするアプリケーションサービスと関連データベースを選択します。
3. 必要に応じて、**[アップグレード後、サービスが自動的に再起動します]** を指定します。
アップグレード後にアプリケーションサービスを自動的にリサイクルすることを選択した場合は、アップグレードウィザードによってサービスがアップグレード後に再起動されます。
4. **[次へ]** をクリックします。
5. 依存関係エラーが存在する場合は、**[依存関係エラー]** ダイアログボックスが表示されます。依存関係エラーを確認し、**[OK]** をクリックします。次に、依存関係エラーを解決して **[次へ]** をクリックします。
6. リポジトリログイン情報を入力します。
7. **[次へ]** をクリックします。

サービスアップグレードウィザードによって各アプリケーションサービスと関連データベースがアップグレードされ、ステータスと処理の詳細が表示されます。

8. アップグレードが完了すると、**[サマリ]** セクションにアプリケーションサービスとアップグレードステータスのリストが表示されます。各サービスをクリックすると、**[サービスの詳細]** セクションにアップグレードの詳細が表示されます。
9. 必要に応じて、**[レポートの保存]** をクリックして、アップグレードの詳細をファイルに保存します。
レポートを保存しないことにした場合は、次回サービスアップグレードウィザードを起動したときに **[前のレポートの保存]** をクリックできます。
10. **[閉じる]** をクリックします。
11. アップグレード後にアプリケーションサービスを自動的にリサイクルすることを選択しなかった場合は、アップグレードしたサービスを再起動します。

アップグレードレポートを表示し、保存できます。2 回目にサービスアップグレードウィザードを実行する場合、**[前のレポートの保存]** オプションが表示されます。サービスをアップグレードした後にアップグレードレポートを保存しなかった場合は、このオプションを選択して、前回のアップグレードレポートを表示または保存できます。

モデルリポジトリサービスのアップグレードの確認

モデルリポジトリサービスをアップグレード後は、モデルリポジトリサービスログをチェックしてアップグレードが正常に完了したことを確認します。

オブジェクト依存関係のグラフ

モデルリポジトリサービスをアップグレードする場合、アップグレードプロセスはモデルリポジトリのコンテンツをアップグレードし、オブジェクトの依存関係のグラフを再作成します。

アップグレードプロセスでモデルリポジトリのコンテンツのアップグレード中に致命的なエラーが発生した場合、サービスのアップグレードは失敗します。Administrator ツールまたはコマンドラインプログラムによって、アップグレードをもう一度実行する必要があることが知らされます。

オブジェクト依存関係のグラフの再構築中にアップグレードプロセスで致命的なエラーが発生する場合、サービスのアップグレードは成功します。オブジェクト依存関係のグラフを再構築するまでは、Developer tool でオブジェクトの依存関係を表示することはできません。

モデルリポジトリサービスをアップグレードした後、モデルリポジトリサービスログに次のメッセージが含まれることを確認します。

```
MRS_50431 "Finished rebuilding the object dependency graph for project group '<project group>'."
```

ログにこのメッセージが存在しない場合は、`infacmd mrs rebuildDependencyGraph` コマンドを実行してオブジェクト依存関係のグラフを再構築します。この再構築プロセスが完了するまで、モデルリポジトリオブジェクトにユーザーアクセスがあってはなりません。完了前にユーザーがアクセスすると、オブジェクト依存関係のグラフが正確でなくなることがあります。サービスのアップグレードを行う前にモデルリポジトリサービスからログアウトするようユーザーに要請します。

`infacmd mrs rebuildDependencyGraph` コマンドでは、以下の構文を使用します。

```
rebuildDependencyGraph
<-DomainName|-dn> domain_name
[<-SecurityDomain|-sdn> security_domain]
<-UserName|-un> user_name
<-Password|-pd> password
<-ServiceName|-sn> service_name
[<-ResilienceTimeout|-re> timeout_period_in_seconds]
```

Model Repository サービスの詳細プロパティ

モデルリポジトリサービスをアップグレードした後、最大ヒープサイズと `MaxMetaspaceSize` 値を設定することができます。サービスをアップグレードする前に、**-Xss** 値を設定します。サービスをアップグレードした後に、**-Xss** 値をリセットする必要があります。

モデルリポジトリサービスについて、以下の詳細プロパティを設定してください。

最大ヒープサイズ

プロセスをアップグレードする前に、モデルリポジトリサービスの**最大ヒープサイズ**プロパティ値が 4GB 未満である場合、このプロパティ値を 4GB に設定することができます。アップグレードした後、プロパティ値をアップグレード前の値にリセットするか、またはグローバルカスタマサポートがお使いの環境で推奨している値へリセットします。

JVM コマンドラインオプション

次の JVM コマンドラインオプションを設定します。

- **-Xss**。モデルリポジトリサービスアップグレードをアップグレードする前に、**-Xss** 値を 1m に設定します。アップグレードした後、**-Xss** オプションをアップグレード前の値にリセットします。デフォルト値は 512k です。
- **MaxMetaspaceSize**。バージョン 10.1 では、**MaxPermSize** プロパティを **MaxMetaspaceSize** プロパティに置き換えます。デフォルトでは、**MaxMetaspaceSize** プロパティ値は 512MB に設定されています。

モデルリポジトリサービスに詳細プロパティ値を設定するには、> **サービスおよびノードの管理**に移動して、モデルリポジトリサービスを選択し、**プロパティ > 詳細プロパティ**セクションを編集します。

第 10 章

Informatica クライアントのアップグレード

この章では、以下の項目について説明します。

- [Informatica クライアントのアップグレードの概要, 84 ページ](#)
- [Informatica クライアントのアップグレードオプション, 85 ページ](#)
- [プロファイル, 86 ページ](#)
- [グラフィカルモードでのアップグレード, 86 ページ](#)
- [サイレントモードでのアップグレード, 87 ページ](#)

Informatica クライアントのアップグレードの概要

クライアントインストーラを使用して Informatica Developer の以前のバージョンをアップグレードします。Informatica Developer は指定したインストールディレクトリにインストールされています。クライアントインストーラは新しくインストールした Informatica Developer を、以前のバージョンと同じ設定で設定します。クライアントインストーラは、クライアントツールの以前のバージョンのファイルを変更しません。

アップグレードを開始する前にアップグレード前のタスクを完了します。アップグレードする Informatica Developer の以前のバージョンをホストするすべてのマシンでインストーラを実行します。Informatica クライアントは、グラフィカルモードまたはサイレントモードでアップグレードできます。

クライアントインストーラを実行するときに、次の中からアップグレードする次の Informatica クライアントツールを選択できます。

Informatica Developer

Informatica Developer は、マッピング、データオブジェクト、および仮想データベースの作成と実行に使用するクライアントアプリケーションです。Informatica Developer で作成されたオブジェクトは、モデルリポジトリに保存され、データ統合サービスで実行されます。Informatica Developer をアップグレードする場合は、HotFix バージョンを含む Informatica バージョンが、ドメインのアップグレードのバージョンと一致することを確認してください。

PowerCenter のクライアントツール

PowerCenter クライアントは、PowerCenter リポジトリ、マッピング、およびセッションの管理に使用できるツールのセットです。クライアントのアップグレードによって、以下のクライアントツールもアップグレードされます。

- Mapping Architect for Visio
- Mapping Analyst for Excel

クライアントインストーラを実行するときに、Informatica Developer をアップグレードできます。

次のエントリに、Informatica Developer を実行するための最小システム要件を示しています。

プロセッサ

少なくとも 1 つの CPU が必要です。

RAM

少なくとも 1GB が必要です。

ディスク空き容量ディスクスペース

少なくとも 6GB が必要です。

次のエントリに、PowerCenter クライアントを実行するための最小システム要件を示しています。

プロセッサ

少なくとも 1 つの CPU が必要です。

RAM

少なくとも 1GB が必要です。

ディスク空き容量ディスクスペース

少なくとも 3GB が必要です。

Informatica Developer をアップグレードする場合は、Informatica バージョンが、ドメインのアップグレードのバージョンと正確に一致することを確認してください。

Informatica クライアントツールをアップグレードすると、以下のコンポーネントもアップグレードされます。

- DataDirect ODBC ドライバ
- Java Runtime Environment ライブラリ

インストールファイルのダウンロード元であるディレクトリのルートからアップグレードを実行できます。

Windows では、zip ファイル名を含むインストールディレクトリパスの全体の長さが 60 文字以下でなければなりません。zip ユーティリティのバージョンが、Windows オペレーティングシステムのバージョンと互換性があることを確認します。ファイルを解凍する場合は、zip ユーティリティが空のフォルダも抽出することを確認します。

Informatica クライアントのアップグレードオプション

以下のいずれかの方法で Informatica クライアントツールをアップグレードできます。

- グラフィカルモードでのアップグレード。Informatica クライアントツールをグラフィカルモードでアップグレードします。インストーラを使用してアップグレードプロセスを実行できます。

- サイレントモードでのアップグレード。アップグレードオプションを含むプロパティファイルを使用して Informatica クライアントツールをアップグレードします。

プロファイル

アップグレードが完了したら、プロファイルとスコアカードに対するアップグレード後のタスクを完了します。

データドメインのインポート

定義済みのデータドメイングループとそれらに関連するデータドメインをデータドメイングロッサリに追加するには、[ウィンドウ] > [設定] > [Informatica] > [データドメイングロッサリ] > [インポート] メニューオプションを使用して Informatica_IDE_DataDomain.xml ファイルをインポートします。

データドメインに関連付けられているルールを表示したりルールに変更を加えたりするには、Developer ツールの [ファイル] > [インポート] メニューオプションを使用して Informatica_IDE_DataDomainRule.xml ファイルをインポートします。

プロファイルおよびスコアカードの保存

infacmd ps restoreProfilesAndScorecards コマンドを実行して、以前のバージョンのプロファイルとスコアカードを現在のバージョンに復元します。コマンドを実行する前に、モデルリポジトリコンテンツのバックアップを作成していることを確認してください。

既存のスコアカードの実行

バージョン 10.1.0 以前で作成したスコアカードの**累積メトリック傾向**ペインに統計を表示するには、このスコアカードを実行します。[累積メトリック傾向] ペインは、Analyst ツールのスコアカードダッシュボードに表示できます。

グラフィカルモードでのアップグレード

ルートディレクトリから install.bat ファイル実行時に問題を検出した場合は、以下のファイルを実行します。

<Informatica installation directory>\client\install.exe

1. すべてのアプリケーションを終了します。
2. ルートディレクトリから install.bat を実行します。
3. [インストールタイプ] ページで、[Informatica 10.4.0 クライアントへのアップグレード] を選択し、[次へ] をクリックします。
4. Informatica のインストールおよび製品使用ツールキットの利用規約をお読みになったら [契約条項に同意します] を選択します。

以下のオプトアウトの権利の制限の下、本ソフトウェアによって、本ソフトウェアがデプロイされているコンピューティングおよびネットワーク環境に関する情報、デプロイメントのデータ使用状況およびシステム統計情報が米国の Informatica に自動的に送信されます。この送信は Informatica のプライバシーポリシーにおいてサービスの一部と見なされ、Informatica は、

<https://www.informatica.com/in/privacy-policy.html> のプライバシーポリシーに従って、この情報を使用または処理します。Administrator ツールで使用量コレクションを無効にできます。

- a. 契約条項に同意しない場合は、**1** キーを押します。
- b. 契約条項に同意する場合は、**2** キーを押します。
5. インストールを続行する前に、**【アップグレード前提条件】** ページでシステム要件を確認し、**【次へ】** をクリックします。
6. **【次へ】** をクリックします。
7. **【ディレクトリの選択】** ページで、アップグレードする Informatica バージョンのディレクトリと、Informatica 10.4.0 をインストールするディレクトリを入力します。

次の表に、指定する必要があるディレクトリを示します。

ディレクトリ	説明
アップグレードする Informatica クライアントのディレクトリ	アップグレードする Informatica クライアントツールの以前のバージョンを含むディレクトリ。
Informatica 10.4 のクライアントツールのディレクトリ	Informatica 10.4 のクライアントツールのインストール先ディレクトリ。インストールディレクトリへの絶対パスを入力します。インストールディレクトリは、現在のマシンに存在する必要があります。パスのディレクトリ名には、スペースまたは次の特殊文字を含めることはできません: @ * \$ # ! % () { } [] , ; ' 注: インストールディレクトリパスには、英数字を使用することを推奨します。á や € などの特殊文字を使用すると、実行時に予期しない結果が生じることがあります。

8. **【次へ】** をクリックします。
9. **【インストール前のサマリ】** ページで、インストール情報を確認し、**【インストール】** をクリックします。
インストーラによって、Informatica クライアントファイルがインストールディレクトリにコピーされます。
10. **【インストール後のサマリ】** ページで、アップグレードが成功したかどうかを確認し、**【完了】** をクリックしてインストーラを終了します。
11. Informatica Developer のアップグレード完了後、Windows マシンをログオフしてからもう一度ログオンし、システム設定を完了します。

インストーラログファイルを参照すると、インストーラで実行されるアップグレードタスクの詳細を取得できます。

サイレントモードでのアップグレード

ユーザーの操作なしで Informatica クライアントツールをアップグレードするには、サイレントモードでアップグレードします。プロパティファイルを使用してアップグレードオプションを指定します。インストーラはファイルを読み込んでアップグレードオプションを確認します。サイレントモードのアップグレードを使用して、ネットワーク上の複数のマシンで Informatica クライアントツールをアップグレードするか、マシン間でアップグレードプロセスを標準化します。

Informatica インストールファイルを、アップグレードする予定の Informatica クライアントをホストするマシン上のハードディスクにコピーします。

サイレントモードでアップグレードするには、以下のタスクを実行します。

1. アップグレードプロパティファイルを作成し、アップグレードオプションを指定します。
2. アップグレードプロパティファイルを使用して、インストーラを実行します。

プロパティファイルの作成

Informatica は、インストーラに必要なアップグレードパラメータを含むサンプルのプロパティファイルを提供します。サンプルのプロパティファイルをカスタマイズして、アップグレードのオプションを指定できます。

サンプルのプロパティファイルの名前は `SilentInput.properties` で、クライアントインストーラディレクトリのルートにあります。

1. クライアントのインストールファイルを含むディレクトリのルートに移動します。
2. `SilentInput.properties` という名前のファイルを探します。
そのファイルをバックアップしてから変更します。
3. テキストエディタを使用してファイルを開き、アップグレードパラメータの値を変更します。
以下の表に、変更可能なアップグレードパラメータを示します。

プロパティ名	説明
<code>INSTALL_TYPE</code>	Informatica クライアントツールをインストールするか、アップグレードするかを指定します。 以前のバージョンの Informatica からアップグレードするには、値を 1 に設定します。
<code>USER_INSTALL_DIR</code>	新しいバージョンの Informatica クライアントツールをインストールするディレクトリです。
<code>UPG_BACKUP_DIR</code>	アップグレードする Informatica ツールの以前のバージョンのディレクトリです。

4. プロパティファイルを保存します。

サイレントインストーラの実行

プロパティファイルを作成したら、コマンドプロンプトを開いてサイレントアップグレードを開始します。

1. コマンドプロンプトを開きます。
2. クライアントインストーラディレクトリのルートに移動します。
3. ディレクトリにアップグレードオプションを含む `SilentInput.properties` ファイルが保存されていることを確認します。
4. サイレントアップグレードプロセスを開始するには、`silentInstall.bat` を実行します。

サイレントアップグレードがバックグラウンドで実行されます。プロセスにしばらく時間がかかる場合があります。Informatica_<Version>_Services_InstallLog.log がインストールディレクトリに作成されると、サイレントアップグレードプロセスは完了です。

サイレントアップグレードは、プロパティファイルが正しく設定されない場合、または、インストールディレクトリにアクセスできない場合に失敗します。アップグレードが失敗した場合は、インストールログファイルを表示して、エラーを修正します。次に、サイレントインストーラを再実行します。
5. Informatica Developer のアップグレード完了後、Windows マシンをログオフしてからもう一度ログオンし、システム設定を完了します。

第 11 章

アップグレードした後に

この章では、以下の項目について説明します。

- [サポートの終了レポートの場合, 89 ページ](#)
- [Informatica ドメイン, 89 ページ](#)
- [PostgreSQL への移行, 90 ページ](#)
- [ドメインへのクライアントの接続の保護, 91 ページ](#)
- [Microsoft SQL Server の接続プロバイダタイプのアップグレード, 92 ページ](#)
- [PowerCenter 統合サービス, 92 ページ](#)
- [Data Integration Service, 93 ページ](#)
- [ログイベントディレクトリの更新, 93 ページ](#)
- [メタデータアクセスサービス, 94 ページ](#)
- [スケジューラサービス, 95 ページ](#)
- [アナリストサービス, 95 ページ](#)
- [Metadata Manager エージェント, 97 ページ](#)
- [Metadata Manager サービス, 97 ページ](#)

サポートの終了レポートの場合

バージョン 10.1.1 では、Data Analyzer、レポートサービス、レポートおよびダッシュボードサービスのサポートが廃止されました。

レポートおよびダッシュボードサービス、またはレポートサービスで使用不可になったレポートの生成方法については、次のナレッジベースの記事 496097 を参照してください:

<https://kb.informatica.com/howto/6/Pages/18/496097.aspx>

Informatica ドメイン

アップグレードしたら、ドメインのアップグレード後のタスクを実行します。

ログイベントディレクトリの更新

アップグレード後に、ドメインのログイベントディレクトリを更新しなければならない場合があります。

アップグレード後のログイベントディレクトリのデフォルト値は、次のアップグレードタイプによって異なります。

ノード設定を変更しないでドメインをアップグレードします。

ログイベントディレクトリは、以前のバージョンで指定された場所を指します。

ノード設定を変更してドメインをアップグレードします。

ログイベントディレクトリは新しいインストールディレクトリ内の `isp/logs` ディレクトリを指します。

別のディレクトリをログに使用するには、Administrator ツールでドメインの [ログディレクトリパス] プロパティを更新します。infasetup updateGatewaynode コマンドを使用してディレクトリを更新することもできます。例えば、ログイベントディレクトリを新しいインストールディレクトリの `server/infra_shared/logs` ディレクトリに設定できます。

PostgreSQL への移行

バージョン 10.4.0 以降では、PostgreSQL をドメイン設定リポジトリデータベース、PowerCenter リポジトリデータベース、モニタリングモデルリポジトリデータベース、またはモデルリポジトリデータベースに使用できます。

既存のサービスに PostgreSQL データベースを使用するには、ドメインとサービスをバージョン 10.4.0 にアップグレードした後、次の作業を完了します。

1. PostgreSQL データベースを作成します。データベースの作成の詳細については、*Informatica 10.4.0 アプリケーションサービスガイド*を参照してください。
2. ドメインとリポジトリを構成するために必要なコマンドを入力します。

ドメイン

ドメインをバックアップするには、以下のコマンドを入力します。

```
infasetup BackupDomain
```

PostgreSQL データベースでドメインを更新するには、以下のコマンドを入力します。

```
infacmd isp UpdateRepositoryService
```

ドメインを PostgreSQL に復元するには、以下のコマンドを入力し、データベースタイプとスキーマ名を PostgreSQL に設定します。

```
infasetup RestoreDomain
```

PowerCenter リポジトリ

PowerCenter リポジトリをバックアップするには、以下のコマンドを入力します。

```
pmrep backup
```

PostgreSQL データベースで PowerCenter リポジトリサービスを更新するには、以下のコマンドを入力します。

```
infacmd isp UpdateRepositoryService
```

サービスをリサイクルするには、以下のコマンドを入力します。

```
infacmd isp EnableService
```

PostgreSQL データベースタイプで PowerCenter リポジトリをリストアするには、次のコマンドを入力します。

```
pmrep restore
```

モデルリポジトリ

モデルリポジトリサービスをバックアップするには、以下のコマンドを入力します。

```
infacmd mrs BackupContents
```

PostgreSQL データベースでモデルリポジトリサービスサービスを更新するには、以下のコマンドを入力します。

```
infacmd mrs UpdateServiceOptions
```

サービスをリサイクルするには、以下のコマンドを入力します。

```
infacmd isp EnableService
```

PostgreSQL データベースタイプでモデルリポジトリサービスをリストアするには、以下のコマンドを入力します。

```
infacmd mrs restoreContents
```

3. PowerCenter リポジトリサービスに PostgreSQL の以下の環境変数を設定します。

```
PGSERVICE: Set to the location of the pg_service.conf file:  
<pg_service.conf file directory>/pg_service.conf  
PGHOME: Set to PostgreSQL client install location. For example, /usr/pgsql -10  
Add to PATH: $PGHOME:${PATH}  
Add to LD_LIBRARY_PATH: $PGHOME/lib:${LD_LIBRARY_PATH}
```

ドメインへのクライアントの接続の保護

以前のバージョンで、クライアントアプリケーションと Informatica ドメイン間で安全な通信を有効にした場合は、アップグレード後にキーストアファイルの場所を確認するか、または新しいキーストアを生成する必要があります。Metadata Manager を使用する場合は、アップグレード後に新しいキーストアファイルを生成する必要があります。他のクライアントアプリケーションを使用する場合は、アップグレード後にキーストアファイルの場所を確認する必要があります。

クライアントアプリケーションとサービス間で安全な接続を設定する場合は、セキュアな HTTPS 接続用のキーおよび証明書を含むキーストアファイルを指定します。アップグレード後に、新しいキーストアファイルを生成するか、またはキーストアファイルの場所を確認する必要があります。アップグレードプロセスでは、キーストアファイルも場所も更新されません。

注: 512 ビット未満の RSA 暗号化を使用してプライベートキーと SSL 証明書を作成した場合は、新しい SSL 証明書ファイルを作成する必要があります。FREAK 脆弱性により、512 ビット未満の RSA 暗号化はサポートされていません。

実行する必要があるタスクは、使用しているクライアントアプリケーションによって異なります。

Metadata Manager

Metadata Manager を使用する場合は、アップグレード後に新しいキーストアファイルを生成します。キーストアファイルの生成に使用された Java のバージョンと、Informatica とともにインストールされた Java のバージョンが一致することを確認するために、キーストアファイルを再生成します。Java のバージョンが一致しない場合は、Metadata Manager で操作を実行するユーザーに対して、[Metadata Manager サービスに接続できません] というエラーが表示されます。

新しいキーストアファイルを生成するには、次の手順を実行します。

1. Metadata Manager Web アプリケーションに対して安全な接続を設定するために必要なキーおよび証明書を含む新しいキーストアファイルを生成します。キーストアファイルを生成するには、現在のバージョンの Informatica とともにインストールされたキーツールユーティリティを使用します。
注: Metadata Manager サービスは RSA 暗号化を使用します。そのため、RSA アルゴリズムで生成されたセキュリティ証明書を使用することをお勧めします。
2. Metadata Manager サービスが稼働しているマシンからアクセス可能なディレクトリにキーストアファイルを保存します。
3. Administrator ツールを使用して、Metadata Manager サービスのキーストアファイルを更新します。

他の Web クライアントアプリケーション

他の Web クライアントアプリケーションを使用する場合、実行する必要のあるタスクは、次のいずれの場所にキーストアファイルを格納したかによって異なります。

以前の Informatica インストールディレクトリ構造内の場所

以前の Informatica インストールディレクトリ構造内の場所にキーストアファイルを格納した場合は、次の手順を実行します。

1. このファイルを別の場所にコピーします。
2. コピーされたキーストアファイルの場所を使用して、アプリケーションサービスを更新します。

Administrator ツールを使用して、適切なアプリケーションサービスのキーストアファイルの場所を更新します。例えば、Analyst ツールのセキュリティにキーストアファイルが使用されている場合は、アナリストサービスのプロパティでキーストアファイルの場所を更新します。

以前の Informatica インストールディレクトリ構造外の場所

以前の Informatica インストールディレクトリ構造外の場所にキーストアファイルを保存した場合は、アプリケーションサービスが実行されるマシンからそのキーストアファイルにアクセスできることを確認します。

Microsoft SQL Server の接続プロバイダタイプのアップグレード

アップグレードを行うと、デフォルトで、Microsoft SQL Server 接続が OLEDB プロバイダタイプに設定されます。

ODBC プロバイダタイプを使用するようにすべての Microsoft SQL Server 接続をアップグレードすることをお勧めします。次の形式で Informatica サービスを使用すると、すべての Microsoft SQL Server 接続を ODBC プロバイダタイプにアップグレードすることができます。

```
ODBCINST=<INFA_HOME>/ODBC7.1/odbcinst.ini
```

環境変数を設定したら、Informatica サービスをホストするノードを再起動する必要があります。

PowerCenter 統合サービス

アップグレードしたら、PowerCenter 統合サービスのアップグレード後のタスクを実行します。

オペレーティングシステムのプロファイル用の Umask の設定

オペレーティングシステムプロファイルを使用したバージョンからアップグレードした場合は、umask 設定値を設定し、STM が書き込むファイルのセキュリティを変更してください。

たとえば、umask を 077 に変更するとセキュリティを最大化できます。Umask の設定を変更した場合は Informatica サービスを再起動してください。

Data Integration Service

アップグレードしたら、Data Integration Service ごとにアップグレード後のタスクを実行します。

HTTP プロキシサーバーパスワードのリセット

Data Integration Service が Web サービスコンシューマトランスフォーメーションを実行し、かつ認証付きの HTTP プロキシサーバーを使用するように設定されている場合は、HTTP プロキシサーバーパスワードをリセットします。

パスワードをリセットしないと、Data Integration Service で Web サービスコンシューマトランスフォーメーションを正常に処理できません。

Administrator ツールで、Data Integration Service 用の HTTP プロキシサーバーパスワードをリセットします。

ログイベントディレクトリの更新

アップグレード後に、ドメインのログイベントディレクトリを更新しなければならない場合があります。

アップグレード後のログイベントディレクトリのデフォルト値は、次のアップグレードタイプによって異なります。

ノード設定を変更しないでドメインをアップグレードします。

ログイベントディレクトリは、以前のバージョンで指定された場所を指します。

ノード設定を変更してドメインをアップグレードします。

ログイベントディレクトリは新しいインストールディレクトリ内の isp/logs ディレクトリを指します。

別のディレクトリをログに使用するには、Administrator ツールでドメインの [ログディレクトリパス] プロパティを更新します。infasetup updateGatewaynode コマンドを使用してディレクトリを更新することもできます。例えば、ログイベントディレクトリを新しいインストールディレクトリの server/infa_shared/logs ディレクトリに設定できます。

メタデータアクセスサービス

アップグレード後、Data Engineering にメタデータアクセスサービス Metadata Access Service を Data Engineering Integration。メタデータアクセスサービスは、Developer tool で Hadoop 接続情報にアクセスし、メタデータをインポートおよびプレビューできるようにするアプリケーションサービスです。

Hadoop クラスタで Kerberos 認証を使用する場合、メタデータアクセスサービスにはサービスプリンシパル名 (SPN) に関する情報とキータブ情報が含まれます。

メタデータアクセスサービスは他のサービスに依存しません。メタデータアクセスサービスは任意の順序で作成できます。Hadoop クラスタからオブジェクトをインポートするときに、HBase、Hive、および HDFS の各接続は、メタデータアクセスサービスを使用して設計時にオブジェクトメタデータを抽出します。

メタデータアクセスサービスの作成

メタデータアクセスサービスを使用すると、Developer tool は Hadoop 接続情報にアクセスして、Hadoop 環境からメタデータをインポートおよびプレビューできます。Hadoop 環境へのデザイン時アクセスには、メタデータアクセスサービスが必要です。

1. Administrator ツールで、**[管理]** タブをクリックします。
2. **[サービスとノード]** ビューをクリックします。
3. ドメインナビゲータで、ドメインを選択します。
4. **[アクション]** > **[新規]** > **[メタデータアクセスサービス]** をクリックします。

新しいメタデータアクセスサービスウィザードが表示されます。

5. **[新しいメタデータアクセスサービス - ステップ 1/3]** ページで、以下のプロパティを入力します。

プロパティ	説明
名前	サービスの名前。この名前では、大文字と小文字が区別されず、ドメイン内で一意にする必要があります。128 文字を超えたり、@で始めることはできません。空白や以下の特殊文字を含めることはできません。 ` ~ % ^ * + = { } \ ; : ' " / ? . , < > ! () []
説明	サービスの説明。説明は、765 文字を超えることはできません。
場所	サービスが作成されるドメインおよびフォルダ。別のフォルダを選択するには [参照] をクリックします。サービスは作成後に移動できます。
ライセンス	このサービスの使用を許可するライセンスオブジェクト。
ノード	サービスを実行するノード。
バックアップノード	ライセンスに高可用性が含まれていて、プライマリノードが使用できない場合に、サービスを実行できるノードです。

6. **[次へ]** をクリックします。
[新しいメタデータアクセスサービス - ステップ 2/3] ページが表示されます。
7. **[HTTP プロトコルタイプ]** を選択し、メタデータアクセスサービスに使用するそれぞれのポート番号を入力します。

8. 残りのセキュリティプロパティに対し、デフォルト値を受け入れます。メタデータアクセスサービスを作成し終わると、セキュリティプロパティを設定することができます。
9. **【サービスの有効化】** を選択します。
メタデータアクセスサービスには、その他のサービス依存性はありません。
10. **【次へ】** をクリックします。
【新しいメタデータアクセスサービス - ステップ 3/3】 ページが表示されます。
11. 該当する場合は、偽装ユーザーの実行オプション、Kerberos クラスタ、ログオプションを指定して **【次へ】** をクリックします。
12. **【完了】** をクリックします。
ドメインによってメタデータアクセスサービスが作成され、有効化されます。

スケジューラサービス

アップグレード後、以前のインストール済み環境にあるスケジューラサービスのファイルを、アップグレードしたインストール済み環境にコピーすることが必要な場合があります。

スケジューラサービスの一時ファイルの場所は、デフォルトで `./scheduler/temp` に設定されています。スケジューラサービスのプロパティでこのパスを変更した場合は、以前の場所にあるすべてのファイルを、アップグレードしたドメイン内の場所に手動でコピーする必要があります。

スケジューラサービスがデフォルトの場所を使用している場合、またはパスをドメイン外部のディレクトリに変更した場合は、ファイルをコピーする必要はありません。

注: スケジューラサービスがファイルを見つけられない場合は、パラメータファイルを使用するスケジューラインスタンスが、アップグレードされたドメインで実行されません。

アナリストサービス

アップグレードしたら、アナリストサービスごとにアップグレード後のタスクを実行します。

モデルリポジトリのユーザー名とパスワードの入力

バージョン 10.1 では、Kerberos 認証を使用するドメインで Business Glossary の承認を使用する場合は、Analyst Service で Model Repository Service のユーザー名とパスワードを入力する必要があります。アナリストサービスを作成するとき、ユーザー名とパスワードは必須ではありませんが、Kerberos 認証を使用するドメイン内で承認ワークフローが機能するようにする場合はユーザー名とパスワードが必要です。

Kerberos 認証を用いるドメイン内で承認ワークフローを機能させるには、次の作業を実行します。

1. Administrator ツールで、**【サービスとノード】** タブをクリックします。
2. ドメインナビゲータで、**【アナリストサービス】** を選択します。
3. モデルリポジトリサービスのプロパティを編集します。
4. **【モデルリポジトリサービスのプロパティの編集】** ダイアログボックスに、モデルリポジトリサービスのユーザー名とパスワードを入力します。

5. **[OK]** をクリックします。

フラットファイルキャッシュの場所の確認

アップグレード後に、フラットファイルキャッシュディレクトリの場所を確認する必要があります。アップグレードプロセスではこの場所が更新されません。

以前の Informatica インストールディレクトリ内にフラットファイルキャッシュディレクトリを作成している場合は、そのディレクトリをアップグレードした Informatica インストールディレクトリにコピーし、新しい場所を使用してアナリストサービスのプロパティを更新します。

以前の Informatica インストールディレクトリ以外の場所にディレクトリを作成している場合は、アナリストサービスとデータ統合サービスの両方がそのディレクトリにアクセスできることを確認します。

アナリストサービスとデータ統合サービスが異なるノードで実行されている場合は、共有ディレクトリを使用するようにフラットファイルディレクトリを設定します。データ統合サービスがプライマリおよびバックアップノード、またはグリッドで実行される場合、各データ統合サービスプロセスは共有ディレクトリのファイルにアクセスする必要があります。

フラットファイルキャッシュディレクトリの場所を確認するには、アナリストサービスのランタイムプロパティにある **【フラットファイルキャッシュの場所】** プロパティを表示します。

一時エクスポートファイルの場所の確認

アップグレード後に、一時エクスポートファイルディレクトリの場所を確認または指定する必要があります。Analyst ツールはこの場所を使用して、エクスポートするビジネス用語集を保存します。アップグレードプロセスではこの場所が更新されません。

以前の Informatica インストールディレクトリ内に一時エクスポートファイルディレクトリを作成している場合は、そのディレクトリをアップグレードした Informatica インストールディレクトリにコピーし、新しい場所を使用してアナリストサービスのプロパティを更新します。以前の Informatica インストールディレクトリ以外の場所にディレクトリを作成している場合は、アナリストサービスを実行しているマシンがそのディレクトリにアクセスできることを確認します。一時エクスポートファイルディレクトリの場所を設定していない場合は、エクスポート時に Analyst ツールが用語集を保存できる場所を指定します。

一時エクスポートファイルディレクトリの場所を確認または指定するには、アナリストサービスのビジネス用語集のプロパティで **【一時エクスポートファイルディレクトリ】 Temporary Export File Directory** プロパティを表示します。

アナリストサービスのリサイクル

アップグレード後に Analyst ツールにアクセスするには、アナリストサービスをリサイクルします。アナリストサービスをリサイクルする前に、モデルリポジトリサービスおよびデータ統合サービスのアップグレード手順とアップグレード後の手順を完了します。

アナリストサービスをリサイクルしたら、少なくとも 10 分間待機し、その後で **【用語集】** ワークスペースにアクセスします。

アナリストサービスをリサイクルする前に、次のタスクが実行されていることを確認します。

- モデルリポジトリサービスのアップグレード
- データ統合サービスのアップグレード

注: アナリストサービスをリサイクルする前に、モデルリポジトリサービスとデータ統合サービスが実行されている必要があります。

Metadata Manager エージェント

アップグレード後、各 Metadata Manager Agent をアンインストールしてから再インストールして、Metadata Manager がメタデータソースからメタデータを抽出できるようにする必要があります。リソースを移行する前に、最新バージョンの Metadata Manager Agent をインストールします。

1. Metadata Manager Agent を停止します。
2. Metadata Manager Agent を再インストールします。

Metadata Manager Agent のインストールの詳細については、*Metadata Manager 管理者ガイド*を参照してください。

Metadata Manager サービス

Metadata Manager エージェントを再インストールしたら、Metadata Manager サービスごとに次のアップグレード後のタスクを実行します。

1. Metadata Manager プロパティファイルにすべてのカスタマイズが含まれるように更新します。
2. Metadata Manager リポジトリが Microsoft SQL Server データベースで、Metadata Manager サービスを UNIX 上で実行する場合は、ODBCINST 環境変数が設定されていることを確認します。
3. Metadata Manager サービスを有効にします。
4. Netezza リソースを再作成します。
5. Metadata Manager リソースの移行およびリロードを行います。
6. Informatica Platform リソースをアップグレードします。
7. 以前のバージョンでいずれかのビジネスインテリジェンスリソースに【ワークスレッド】設定プロパティを設定した場合は、【マルチスレッド】設定プロパティを同じ値に設定します。
8. Metadata Manager Web アプリケーションに対して安全な接続を設定している場合、mmcmd と mmRepoCmd のコマンドラインプログラム用の truststore ファイルを確認します。

Metadata Manager プロパティファイルの更新

以前のインストールディレクトリ内の imm.properties ファイルを現在のバージョンと比較します。必要に応じて、現在のバージョンの imm.properties ファイルを更新します。

imm.properties ファイルは次のディレクトリにあります。

<Informatica installation directory>\services\shared\jars\pc\classes

変更は、Metadata Manager サービスを有効にすると反映されます。

UNIX での ODBCINST 環境変数の確認

Metadata Manager リポジトリが Microsoft SQL Server データベースで、Metadata Manager サービスが UNIX 上で実行される場合は、PowerCenter 統合サービスを実行するマシンに ODBCINST 環境変数が設定されていることを確認します。

PowerCenter 統合サービスは、IME ベースのファイルからメタデータを抽出してそのメタデータを Metadata Manager ウェアハウスにロードするワークフローを実行します。PowerCenter 統合サービスは、ODBC を使用して Microsoft SQL Server データベースに接続します。UNIX では、ODBCINST 環境変数が odbcinstr.ini フ

ファイルの場所に設定されている必要があります。このように設定されていないと、PowerCenter 統合サービスは ODBC ドライバにアクセスできません。

PowerCenter 統合サービスを実行するマシンで、ODBCINST 環境変数が次の値に設定されていることを確認します。

```
ODBCINST=<INFA_HOME>/ODBC7.1/odbcinst.ini
```

環境変数が設定されていない場合は、設定してからドメインを再起動します。

Informatica Platform リソースのアップグレード

Informatica 10.0 アプリケーションからメタデータを抽出する Informatica Platform リソースを作成した場合は、リソースのアップグレードが必要です。リソースをアップグレードするには、リソースを再作成するか、または 10.0 コマンドラインユーティリティを使用するようにリソースを設定します。

リソースのアップグレード方法は、アプリケーションのベースとなるサービスをアップグレードしたかどうかによって異なります。

データ統合サービスとモデルリポジトリサービスをバージョン 10.1.1 にアップグレードした。

アプリケーションのベースとなるサービスをバージョン 10.1.1 にアップグレードした場合は、アップグレード後にリソースを再作成する必要があります。新しいリソースを作成したら、古いリソースをパージおよび削除できます。

データ統合サービスとモデルリポジトリサービスをアップグレードしなかった。

アプリケーションのベースとなるサービスをアップグレードしなかった場合は、10.0 コマンドラインユーティリティを使用するようにリソースを設定する必要があります。

10.0 コマンドラインユーティリティを使用するようにリソースを設定するには、次の手順を実行します。

1. Informatica グローバルカスタマサポートに連絡して、バージョン 10.0 用のコマンドラインユーティリティの zip ファイルを入手します。
2. 10.1.1 Metadata Manager サービスがアクセスできるディレクトリにファイルを抽出します。
最高のパフォーマンスを得るには、Metadata Manager サービスを実行するマシン上のディレクトリにファイルを抽出します。異なるマシンにファイルを抽出した場合、Metadata Manager サービスがディレクトリにアクセスするのに数分かかる可能性があります。
3. リソースを編集し、**[10.0 コマンドラインユーティリティディレクトリ]** プロパティを設定します。
このプロパティを、コマンドラインユーティリティをインストールしたディレクトリ（例: C:\Informatica\100_CLU）に設定します。

10.0 コマンドラインユーティリティディレクトリを設定した後、リソースをロードできます。

Informatica Platform リソースの作成方法と、Informatica Platform リソース用コマンドラインユーティリティのインストール方法の詳細については、『*Metadata Manager 管理者ガイド*』の「データ統合リソース」の章を参照してください。

ビジネスインテリジェンスリソース用のマルチスレッドの更新

バージョン 10.1.1 では、一部のビジネスインテリジェンスリソースの**【ワーカースレッド】**設定プロパティが、**【マルチスレッド】**設定プロパティに置き換えられています。以前のバージョンの Metadata Manager で**【ワーカースレッド】**プロパティを設定していた場合は、アップグレード後に**【マルチスレッド】**プロパティを同じ値に設定してください。

【マルチスレッド】プロパティの値を更新するのは、次のリソースです。

- Business Objects

- Cognos
- Oracle Business Intelligence Enterprise Edition
- Tableau

〔マルチスレッド〕 設定プロパティは、Metadata Manager Agent がメタデータを非同期で抽出する際に使用するワーカースレッドの数を制御します。アップグレード後に〔マルチスレッド〕 プロパティを更新しない場合は、Metadata Manager Agent がワーカースレッドの数を計算します。Metadata Manager Agent は、Metadata Manager Agent を実行しているマシンの JVM アーキテクチャと有効な CPU コアの数に基づいて、1-6 個のスレッドを割り当てます。

〔マルチスレッド〕 設定プロパティの詳細については、『*Metadata Manager 管理者ガイド*』の「ビジネスインテリジェンスリソース」の章を参照してください。

Metadata Manager コマンドラインプログラム用のトラストストアファイルの確認

バージョン 10.1 では、Metadata Manager Web アプリケーションにセキュアな接続を設定すると、Metadata Manager コマンドラインプログラムはエラーのあるセキュリティ証明書を受け入れません。エラーのあるセキュリティ証明書をコマンドラインプログラムで受け入れるかどうかを制御するプロパティは廃止されました。

MMCcmdConfig.properties ファイルの Security.Authentication.Level プロパティで、mmcnd または mmRepoCmd の証明書検証を制御していました。このプロパティを次のいずれかの値に設定できました。

- NO_AUTH。コマンドラインプログラムは、電子証明書にエラーがあっても電子証明書を受け入れます。
- FULL_AUTH。コマンドラインプログラムは、エラーのあるセキュリティ証明書を受け入れません。

NO_AUTH 設定は無効になりました。コマンドラインプログラムは、エラーのないセキュリティ証明書のみを受け入れるようになりました。

Metadata Manager Web アプリケーションにセキュアな接続を設定していて、以前に Security.Authentication.Level プロパティを NO_AUTH に設定していた場合、トラストストアファイルの設定が必要となります。トラストストアファイルを使用するように mmcnd または mmRepoCmd を設定するには、mmcnd または mmRepoCmd に関連付けられている MMCcmdConfig.properties ファイルを編集します。TrustStore.Path プロパティにトラストストアファイルのパスとファイル名を設定します。

mmcnd および mmRepoCmd 用の MMCcmdConfig.properties ファイルの詳細については、*Metadata Manager* コマンドリファレンスを参照してください。

DataDirect Drivers の更新

DataDirect Oracle ODBC および SQL Server ODBC ドライバファイルをアップグレードします。既存の接続が DataDirect SQL Server レガシ ODBC ドライバを使用している場合、DataDirect 8.0 New SQL Server Wire Protocol を使用する必要があります。

DataDirect Oracle ODBC ドライバ

DataDirect Oracle Wire Protocol はバージョン 7.1 から 8.0 にアップグレードされます。Windows 上では、DataDirect Oracle ODBC ドライバは DWora27.dll から DWora28.dll にアップグレードされます。Linux 上では、ドライバは DWora27.so から DWora28.so にアップグレードされます。Oracle ODBC ドライバ DWora27.so を使用している既存の ODBC 接続は失敗します。

アップグレード後、次のタスクを実行します。

- Linux 上で、既存の ODBC 接続を使用して Oracle データベースに接続する場合は、DWora28.so ファイルが含まれる ODBC ドライバパスを指すように odbc.ini ファイルを更新する必要があります。

- Windows 上で、既存の ODBC 接続を使用して Oracle データベースに接続する場合は、DataDirect 8.0 Oracle Wire Protocol ドライバを使用して新しいデータソースを作成する必要があります。

DataDirect SQL Server レガシ ODBC ドライバ

Informatica では、DataDirect SQL Server レガシ ODBC ドライバファイル (Dwmss27.x) のサポートを終了しました。DataDirect でこのドライバがサポートされなくなったためです。アップグレードの後、DataDirect SQL Server レガシ ODBC ドライバファイルの Dwmss27.x を使用する既存の ODBC 接続は失敗します。Informatica インストーラに含まれている DataDirect 8.0 New SQL Server Wire Protocol か、サードパーティベンダーが提供する任意の ODBC ドライバを使用する必要があります。

DataDirect SQL Server ODBC ドライバ

DataDirect SQL Server ODBC ドライバは、Linux では Dwsqsls27.so から Dwsqsls28.so にアップグレードされます。Windows では、DataDirect SQL Server ODBC ドライバは Dwsqsls27.dll から Dwsqsls28.dll にアップグレードされます。DataDirect SQL Server ODBC ドライバの Dwsqsls27.so (Linux) または Dwsqsls27.dll (Windows) を使用する既存の接続は失敗します。

Linux では、アップグレード後に次のタスクを実行します。

- [DSN の使用] プロパティを有効にして既存の Microsoft SQL Server 接続を使用する場合は、Dwsqsls28.so ファイルを含む ODBC ドライバパスを指すように odbc.ini ファイルを更新する必要があります。
- Dwsqsls27.so ドライバを使用していた既存の ODBC 接続を使用するには、Dwsqsls28.so ファイルが含まれる ODBC ドライバパスを指すように odbc.ini ファイルを更新する必要があります。

Windows では、アップグレード後に次のタスクを実行します。

- [DSN の使用] プロパティを有効にして既存の Microsoft SQL Server 接続を使用する場合は、DataDirect 8.0 New SQL Server Wire Protocol ドライバを使用して Microsoft SQL Server データベース用の新しいデータソースを作成する必要があります。
- DataDirect 7.1 New SQL Server Wire Protocol ドライバを使用していた既存の ODBC 接続を使用する場合は、DataDirect 8.0 New SQL Server Wire Protocol ドライバを使用して Microsoft SQL Server データベース用の新しいデータソースを作成する必要があります。

Informatica Cassandra ODBC データソースのアップグレード

アップグレード後、odbc.ini ファイルを odbc.ini ファイルのバックアップコピーに置き換え、Cassandra ODBC ドライバ名を変更する必要があります。

odbc.ini ファイルを置き換えた後、odbc.ini ファイルの Driver プロパティの値を<Informatica installation directory>\tools\cassandra\lib\libcassandraodbc_sb64.so に更新する必要があります。

Data Transformation ファイルのコピー

Data Transformation のアップグレード後、以前のインストールディレクトリから新しいインストールディレクトリにファイルをコピーして、以前のバージョンと同じワークスペース、リポジトリ、およびカスタムグローバルコンポーネントを取得します。

ファイルまたはディレクトリ	デフォルトの場所
リポジトリ	<Informatica installation directory>\DataTransformation\ServiceDB
カスタムグローバルコンポーネントディレクトリ (TGP ファイル)	<Informatica installation directory>\DataTransformation\autoInclude\user
カスタムグローバルコンポーネントディレクトリ (DLL および JAR ファイル)	<Informatica installation directory>\DataTransformation\externLibs\user

Data Transformation のライブラリファイルはコピーしないでください。代わりに、Data Transformation のライブラリを再度インストールします。

Hive エンジンのサポート終了のためのプロファイルの更新

バージョン 10.2.2 から、Informatica では Hive エンジンのサポートを終了しました。Hive エンジンで実行するように設定されたプロファイルがある場合は、別のエンジンで実行するように更新する必要があります。Informatica では、Hadoop 環境の Blaze エンジンは引き続きサポートします。

Hive エンジンで実行するように設定されているプロファイルは、手動で特定して変更する必要があります。

リリースガイドの確認

『*Informatica リリースガイド*』では、新機能と拡張機能、バージョン間での動作の変更、およびアップグレードした後に実行する必要があるタスクについて説明します。実装しなければならない可能性がある新機能、または有効にしなければならない可能性がある新しいオプションのリストを表示するには、『*Informatica リリースガイド*』を参照してください。

付録 A

アップグレードチェックリスト

この付録では、以下の項目について説明します。

- [アップグレードチェックリストの概要, 102 ページ](#)
- [ドメインをアップグレードする前に, 102 ページ](#)
- [ドメインのアップグレード, 103 ページ](#)
- [アプリケーションサービスをアップグレードする前に, 104 ページ](#)
- [アプリケーションサービスのアップグレード, 104 ページ](#)
- [Informatica クライアントのアップグレード, 105 ページ](#)
- [After You Upgrade, 105 ページ](#)

アップグレードチェックリストの概要

アップグレードのチェックリストでは、アップグレードを完了するために実行する必要があるタスクについて要約します。Informatica 製品を複数のマシンでアップグレードする場合は、このガイドの詳細な指示を使用して最初のアップグレードを完了してください。その後のアップグレードは、このチェックリストを利用して実行できます。

ドメインをアップグレードする前に

ドメインをアップグレードする前に、以下のアップグレード前のタスクを実行します。

- ☐ 『Informatica リリースノート』をお読みください。
- ☐ ドメインを分割します。
- ☐ 次のタスクを実行して、UNIX の要件を満たすようにマシンを設定します。
 - マシンに必要なオペレーティングシステムパッチおよびライブラリがインストールされていることを確認します。
 - マシンがドメインをアップグレードするための最小システム要件を満たしていることを確認します。
 - マシンがアプリケーションサービスをアップグレードするためのハードウェア要件を満たしていることを確認します。
 - 環境変数を確認します。

- オペレーティングシステムがファイル記述子の要件を満たしていることを確認します。
 - 最大ヒープサイズの設定を確認します。
 - インストーラファイルを抽出します。
 - インストール前 (i10Pi) システムチェックツールを実行します。
 - Informatica Upgrade Advisor を実行します。
- ☐ Data Transformation ファイルをバックアップします。
- ☐ Administrator ツールまたは infacmd DisableService を使用して、アナリストサービスを無効にします。
- ☐ 次のタスクを実行して、モデルリポジトリを準備します。
- モデルリポジトリをバックアップします。
 - モデルリポジトリデータベースのユーザーアカウント要件を確認します。
- ☐ 次のタスクを実行して、データ統合サービスを準備します。
- データ統合サービスの各プロセスの実行オプションを記録します。
 - すべてのワークフローが完了したことを確認します。
- ☐ 次のタスクを実行して、プロファイリングウェアハウスを準備します。
- ネイティブデータベースバックアップオプションを使用して、プロファイリングウェアハウスをバックアップします。
 - データベースのユーザーアカウント権限を確認します。
- ☐ ネイティブデータベースバックアップオプションを使用して、プロファイリングウェアハウス、参照データウェアハウス、およびワークフローデータベースをバックアップします。
- ☐ Informatica Cassandra ODBC ドライバ用の odbc.ini ファイルをバックアップします。
- ☐ 次のタスクを実行して、ドメインを準備してください。
- ドメインをシャットダウンします。ドメインをシャットダウンするには、ドメイン内の各ノード上で Informatica サービスプロセスを停止します。
 - ドメインをバックアップします。
- ☐ ノード設定を変更するための準備をします。
- 以下の理由でノード設定の変更を選択した場合は、追加のアップグレード前のタスクを実行します。

ドメインのアップグレード

サーバーインストーラを使用してドメインをアップグレードします。サーバーインストーラのドメインアップグレードウィザードを使用してアップグレードプロセスを実行できます。

アップグレードウィザードによって、指定したインストールディレクトリに Informatica ファイルがインストールされます。以前のバージョンのディレクトリにあるファイルは変更されません。

アップグレードウィザードを実行する際に、ドメインを別のマシンまたは別のドメイン環境設定リポジトリデータベースにアップグレードする場合には、ノード設定を変更するオプションを選択します。

アプリケーションサービスをアップグレードする前に

アプリケーションサービスをアップグレードする前に、以下のアップグレード前のタスクを実行します。

- ☐ ロケール環境変数を設定します。
ロケール設定にリポジトリのコードページとの互換性があることを確認します。
- ☐ ブラウザのキャッシュをクリアします。
- ☐ ノード設定を変更して Informatica のインストールを別のマシンに移行するオプションを選択する場合、以下のタスクを実行します。
 - 環境変数を設定します。
 - ライブラリパス環境変数を設定します。
 - ノードで実行されるアプリケーションサービスプロセスに動的に割り当てられるポート番号の範囲を確認します。
 - ノードのバックアップディレクトリがノードからアクセス可能であることを確認します。
 - PowerExchange アダプタを設定します。PowerExchange アダプタのインストーラがある場合は、PowerExchange アダプタを再インストールします。

アプリケーションサービスのアップグレード

サービスのアップグレードが必要になるサービスバージョンもあります。サービスアップグレードウィザードを使用して、サービスをアップグレードできます。

- ☐ 次のアプリケーションサービスのアップグレードに必要な特権を確認します。
 - モデルリポジトリサービス
 - データ統合サービス
 - コンテンツ管理サービス
- ☐ 次のサービスおよび関連するデータベースをアップグレードします。
 - モデルリポジトリサービス
 - データ統合サービス
 - データ統合サービスのプロファイリングウェアハウス
- ☐ サービスアップグレードウィザードを実行して、アプリケーションサービスとサービスに関連付けられたデータベースのデータベースコンテンツをアップグレードします。
- ☐ モデルリポジトリサービスのアップグレードの確認
 - オブジェクト依存関係のグラフ
 - 最大ヒープサイズ

Informatica クライアントのアップグレード

クライアントインストーラを使用してクライアントツールをアップグレードします。クライアントツールは、指定したインストールディレクトリにインストールされます。クライアントインストーラは新しくインストールしたクライアントツールを、以前のバージョンと同じ設定で設定します。

After You Upgrade

After you upgrade the domain, application services, and client files, perform the following post-upgrade tasks:

- ☐ Perform the following tasks for the domain:
 - If you used your SSL certificate files to enable secure communication in the previous domain, verify the keystore and truststore file locations. The upgrade process does not update these locations.
 - You can optionally configure the domain configuration repository on a database that is secured with the SSL protocol.
- ☐ Create the Metadata Access Service to access Hadoop connection information to import and preview metadata from the Hadoop environment.
- ☐ Perform the following tasks for each Data Integration Service:
 - Reset the HTTP proxy server password.
If the Data Integration Service runs Web Service Consumer transformations and is configured to use an HTTP proxy server with authentication, reset the HTTP proxy server password.
 - If the Data Integration Service runs on multiple nodes and you configured the execution options differently for each service process, verify that the Execution Options on the Properties view use the correct values.
 - If you work with rule specifications in the Analyst tool or the Developer tool, verify the Maximum Heap Size value.
 - Verify that the Maximum Memory Per Request property uses the correct value for each Data Integration Service module.
- ☐ Perform the following tasks for each Analyst Service:
 - If you use Business Glossary approval workflow in a domain with Kerberos authentication, enter the user name and password for the Model Repository Service.
 - Verify the location of the flat file cache directory. The upgrade process does not update this location.
 - Verify or configure the location of the temporary export file directory for Business Glossary files. The upgrade process does not update this location.
 - Verify or configure the location of the asset attachment directory for Business Glossary files. The upgrade process does not update this location.
 - If you will run workflows that contain Human tasks, optionally specify an exception management audit database and schema.
 - Recycle the Analyst Service.
Before you recycle the Analyst Service, complete the upgrade and post-upgrade steps for the Model Repository Service, Data Integration Service, and Content Management Service.

- ☐ Perform the following tasks for profiles and scorecards:
 - Import data domain groups and related data domains to the data domain glossary. If you want to add predefined data domain groups and their related data domains to the data domain glossary, import the `Informatica_IDE_DataDomain.xml` file.
 - Run `infacmd ps restoreProfilesAndScorecards` command to restore the profiles and scorecards from a previous version to the current version.
 - Run the scorecards to view the statistics in the Cumulative Metrics Trend pane for the scorecards that you had created.
- ☐ Upgrade all your Microsoft SQL Server connections to use the ODBC provider type.
- ☐ Upgrade the Informatica Drivers for SQL Data Service.
- ☐ Upgrade the Informatica Cassandra ODBC Data Sources.
- ☐ Copy the Data Transformation files from the previous installation directories to the new installation directories, to get the same workspace, repository, and custom global components as in the previous version.
- ☐ Read the *Informatica Release Guide* to view the list of new functionality that you might want to implement or new options that you might want to enable.

索引

A

AIX

Java Cryptography Extension [22](#)

Java Runtime Environment [22](#)

D

dbs2 接続

データベース接続のテスト [56](#)

DISPLAY

環境変数 [29](#)

G

graphical mode

upgrading Informatica services [37](#)

I

IATEMPDIR

環境変数 [18](#), [23](#), [29](#)

Informatica Cassandra ODBC ドライバ

odbc.ini ファイルのバックアップ [34](#)

Informatica process

user accounts [55](#)

Informatica services

upgrading in graphical mode [37](#)

コンソールモードでのアップグレード [46](#)

サイレントモードでのアップグレード [48](#)

Informatica サービス

コンソールモードでのアップグレード（ノードへの変更あり） [68](#)

installation requirements

minimum system requirements [14](#)

isql

データベース接続のテスト [56](#)

J

Java Runtime Environment [18](#)

JRE_HOME

環境変数 [18](#), [23](#), [29](#)

L

LANG

ロケール環境変数 [18](#), [23](#), [29](#)

LC_ALL

ロケール環境変数 [18](#), [23](#), [29](#)

Linux

データベースクライアント環境変数 [56](#)

P

patch requirements

installation [22](#)

PATH

環境変数 [18](#), [23](#)

S

sqlplus

データベース接続のテスト [56](#)

system requirements

minimum installation requirements [14](#)

U

UNIX

コンソールモードでの Informatica サービスのアップグレード [46](#)

コンソールモードでのアップグレード（ノードへの変更あり） [68](#)

データベースクライアント環境変数 [56](#)

データベースクライアント変数 [56](#)

ライブラリパス [75](#)

user accounts

Informatica process [55](#)

Windows [55](#)

W

windows

upgrading Informatica services in graphical mode [37](#)

Windows

user accounts [55](#)

Z

zLinux [18](#)

あ

アップグレード

ファイルの事前バックアップ [31](#)

後でファイルをコピー [101](#)

アップグレードエラー

モデルリポジトリサービス [83](#)

アップグレードパス [10](#)

アプリケーションサービス

ポート [54](#)

アプリケーションサービスのアップグレード

特権 [80](#)

い

インストール
 ファイルの事前バックアップ [31](#)
インストールの要件
 環境変数 [18](#), [23](#), [29](#)
 ディスク容量 [23](#)
 ポートの要件 [54](#)
 最小システム要件 [23](#)

お

オブジェクト依存関係のグラフ
 再構築 [83](#)
オペレーティング システム
 サポートの終了 [53](#)

こ

コンソールモード
 Informatica サービスのアップグレード [46](#), [68](#)

さ

サイレントモード
 Informatica サービスのアップグレード [48](#)

し

システム要件
 最小 [14](#), [15](#), [21](#), [27](#), [28](#)
 最小インストール要件 [23](#)

す

スケジューラ
 アップグレード後のファイルのコピー [95](#)

て

ディスク容量の要件
 インストールの要件 [23](#)
データベース
 接続のテスト [56](#)
データベースクライアント
 IBM DB2 クライアントアプリケーションイネーブラ [56](#)
 Microsoft SQL Server ネイティブクライアント [56](#)
 Oracle クライアント [56](#)
 Sybase オープンクライアント [56](#)
 環境変数 [56](#)
 構成 [56](#)

と

ドメイン
 ポート [54](#)

の

ノード
 アップグレード時の移行 [74](#)
ノード設定
 変更プロセスの完了 [74](#)

は

バッチの要件
 インストール [16](#)

ふ

ファイルのバックアップ
 アップグレード前 [31](#)
 インストール前 [31](#)
ファイルをコピーする
 アップグレード後 [101](#)

ほ

ポート
 アプリケーションサービス [54](#)
 ドメイン [54](#)
 要件 [54](#)
ポートの要件
 インストールの要件 [54](#)

め

メタデータアクセスサービス
 構成 [94](#)
 作成 [94](#)

も

モデルリポジトリサービス
 アップグレードエラー [83](#)

ら

ライブラリパス
 環境変数 [18](#), [23](#)

り

リポジトリ
 データベースクライアントのインストール [56](#)